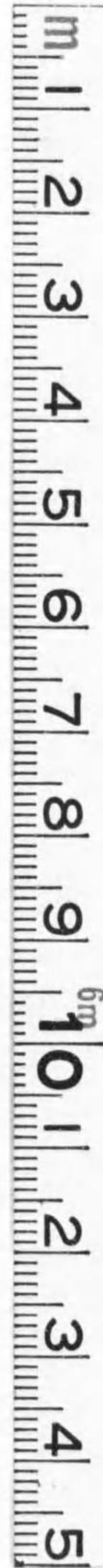


356

628



譯邦
滿洲國史教本

好文社發行

始



特203
67



邦譯

滿洲國史獻本

滿洲奉天教育廳發行
日本筒井清芳譯註

東京好文社版



滿洲國史教本序

自昔欲研究一國之人情風俗者必先讀其歷史始無臆測及武斷之弊然往々因文字不同不能人人共曉則譯筆尚矣今同井清芳先生以所譯滿洲國史教本第一冊見示披讀一過至為傾倒蓋先生精於漢詰故文無贖義且於本文之外於地名人名官名等更詳加注

釋俾讀者於本文以外歷史之關係尤能一目了然則裨益於後學豈淺鮮哉至於我國學子讀之並可明由漢文譯日文之法又本書之餘事也已余不文謹負數言弁於簡首用示欽遲

滿洲國駐日本特命全權公使丁士源



大同二年十二月

序

塞外漠北の國土と民族は、東洋史の一部たる支那史中の重要部分を占めたとはいへ
史家の多くは支那を宗とするが故に、之に關する記述は、大概斷片的で一貫せる系統
を失してゐた。從來ならば是に満足せざるを得なかつたであらうが、今や滿洲國は其
の尨大なる疆土と幾千萬の民族とを以て獨立の第一歩を踏み出してゐる。之を後援支
持して理想の王道國家を現出せしめんが爲に重荷を負ふ我等日本國民は、關心せざら
んとするも得ないのである。惟ふに滿洲の現状を認識するはもとより緊要である。し
かしながら現状の觀察は要するに平面的の展望である。更に歴史を深く學ぶことによ
つて始めて之を立體的に把握し得たといふべきであらう。這般奉天省教育廳は小學校
用として歴史教科書を編纂し、滿洲國文教部の審定を経て之を頒布した。第一、第二
冊に於て滿洲國史を、第三、第四冊に於て東洋史を教ふるもののやうである。寡聞な
私は滿洲國獨立後此の種系統ある滿洲歴史として世に出現せるものは、小冊子なりと
雖も恐らく本書を以て嚆矢とすべきであらうと思ふ。史材の選擇に關しては別に批評

家の言があらう、唯私は、待望の本書の出現に滿腔の喜を感じるままに、不文を顧みるの暇なく其の第一、第二冊を譯述したのである。

私は先年支那の所謂排日教科書の一部を翻譯したことがあるが、無垢の少年に對日悪感情を培養せんが爲には流石に文字の國である。堅白異同、牽強附會の筆致を巧妙に驅使して、日本國家を誣ひ、日本國民を罵倒し一章一課として卒讀に堪ふるもの無く、一節を讀んで憤慨し、一語を譯して激昂し、往々怒氣筆尖に感じて文字を爲さず時に憤然として筆を投ずることも一再ではなかつたが、本書は國民政府と關係を絶つた後の滿洲國人の感情の現れであらう、親日氣分が横溢してゐるから、欣然として讀み、快然として筆を進むることが出來た。

内容は又頗る興味に富んでゐる。昔時に於ける滿洲と支那本土との關係はもとより中古以降に於て漸次對等の地位に進み、遂に中國に優勝して之を其の膝下に伏さしめし點など吾人の意を強うするもので、殊に驚嘆に價するものは、遼、金、元、清等の南伐と、今回日滿兩軍の熱河肅清と河北進出に於て、其のあまりに類似せる軍の行動は讀者をして今昔混淆の間に誘ひ、今更ながら「歴史は繰返す」とは眞に至言である

ことを悟らせることである。更に今回の獨立は最も自然の理法に叶つたもので、滿洲を強いて支那に附庸せしむる如きは、恰も、松樹の枝に桃果を實らせんとすると同様で無謀も亦甚だしい事が自ら判明するであらう。茲に一般教育家に對し青少年教育資料として本書を提供すると共に、併せて滿洲新國家に關心を持つ諸賢の高見を得るならば、ひとり譯者の幸榮にとどまらないと信ずるのである。

昭和八年五月十四日

此の日我皇國の一軍は長驅敵を急追して昔宋、金の争ひし灤河を渡り、他の一軍は強敵を擊破して勇躍石匣鎮を占領し、彼の安祿山が叛軍を起したといはれる漁陽即ち密雲を指呼の間に望む地點に達せりとの報を讀み、實に感慨無量なるものがある。語を寄す平津の市民諸君、「漁陽の鼙鼓地を動して來る、驚破す霓裳羽衣の曲」の感無きや否や、インテリ輕薄兒輩に支配せらるゝ支那大衆に對し一掬同情の涙無きを得ない。

於屏岳麓 筒井清芳

凡例

一、本書を譯するには、原文の意味を損ぜざらんが爲に直譯を本體とし、直譯して意味の解し難い所は意譯に従つたのであるが、行文の餘勢往々蛇足の加はつた處もある。しかし蛇足を添へたことに依つて原文の意味を更に明瞭ならしめた効果はあらうと思ふ。

二、原文中には日本人に熟さない文字が多いのであるが、譯文に於ても能ふ限り原文の文字を用ひ、甚しく異様に感ずるもののみ他の文字に換へた。

三、傍訓は固有名詞のみに片假名を以て施し其の他は特に必要と思はれる文字に比良假名の傍訓を附した。

四、由來漢文學及其の系統に屬する文章は、藝術的表現は極めて巧妙で眞に人の感興を惹くことが多いが、科學的説明には缺くる處があるやうである。本書中往々一章或は一節の中、事件の推移を前後し、或は原因と結果を顛倒し、或は數字を無暗に大數で表はしたりして初心者迷はす處が少くないから、其の心して讀まれんことを望む。

五、註解を施すに當り最も困難を感じたのは、地名に對して其の位置を示すことである。即ち同一地名が諸所にあること、時代の遷るに従つて地名を變更せしこと、從來の史家が或事件を叙するに當り、其の地區、地形、位置等に關心の薄かりしこと及地名を殊更に詩的好字に換へて記載する習慣があつた爲である。それで如何に苦心を拂ふも遂に註解を施し得ない所や、折角註解を施しても或は誤無きを保し難い、此の點は識者の高教を待つて修正したい。猶新光社發行の世界地理風俗大系の支那篇は本書の註解に多くの資料を提供した。

六、第一冊第二課萬里の長城の註解は議論に亘り、第二冊第十八課最近の滿洲の註解には多くの參考文書を載せた。前者は國境としての長城を一層明瞭ならしめたいからであつて、後者は時局の認識を更に深めたいからである。

七、最後に譯者淺學の爲譯文の適當ならざる點が多からうと思ふ。幸に鼈頭掲ぐる處の原文を參照せられ、足らざるを補ふと共に、譯者に對して叱正せられんことを希ふ次第である。

滿洲國史教本 第一冊 目次

(原文)

(譯文)

□ 古代滿洲的民族……………	古代滿洲の民族……………(一)
□ 匈奴南侵與萬里長城……………	匈奴の南侵と萬里の長城……………(二)
□ 漢人移植滿洲……………	漢人滿洲に移殖す……………(二)
□ 挹婁和扶餘……………	挹婁と扶餘……………(四)
□ 高句麗的創興……………	高句麗の創興……………(七)
□ 高句麗的衰亡……………	高句麗の衰亡……………(三)
□ 渤海的疆土和風俗……………	渤海の疆土と其の風俗……………(三)
□ 渤海的建國和文化……………	渤海の建國と其の文化……………(五)
□ 契丹的勃興……………	契丹の勃興……………(九)
□ 遼的建國……………	遼の建國……………(三)

- 遼人滅晉……………遼人晋を滅ぼす……………(三七)
- 遼復國號契丹……………遼又國を契丹と號す……………(四一)
- 宋與契丹構和……………宋と契丹との構和……………(四四)
- 女眞的勃興……………女眞の勃興……………(四七)
- 金的建國……………金の建國……………(五〇)
- 宋金聯合夾攻契丹……………宋金聯合して契丹を夾攻す……………(五三)
- 金的逼宋……………金人宋に逼る……………(五七)
- 金的文化……………金の文化……………(六一)

滿洲國史教本 第二册 目次

- 蒙古的勃興……………蒙古の勃興……………(六五)
- 成吉思汗的武功……………成吉思汗の武功……………(六八)
- 蒙古約宋滅金……………蒙古宋と約して金を滅ぼす……………(七一)
- 元世祖的開國……………元の世祖の開國……………(七五)

- 元代的東西交通……………元代の東西交通……………(八)
- 滿洲的崛起……………滿洲の崛起……………(一二)
- 太祖大破明兵……………太祖大に明兵を破る……………(一七)
- 大清的建國……………大清の建國……………(二〇)
- 清的統一中國……………清の中國統一……………(二四)
- 清的隆盛時代……………清の隆盛時代……………(二九)
- 清的滿蒙政策……………清の滿蒙政策……………(三二)
- 清俄的交涉……………清露の交渉……………(三六)
- 清的滿洲實邊策……………清の滿洲實邊策……………(四〇)
- 清日戰爭的起因和結果……………日清戰爭の起因と其の結果……………(四六)
- 清俄密約和旅大租借條約……………清露密約と旅大租借條約……………(五〇)
- 日俄戰爭的起因和結果……………日露戰爭の起因と其の結果……………(五四)
- 清的變法和遜位……………清の變法と遜位……………(五九)
- 最近的滿洲……………最近的滿洲……………(六五)

附 録

- 滿洲國史年表……………(150)
- 日本の滿洲國承認と日滿議定書……………(154)
- 日本の國際聯盟脫退の經過……………(165)
- 滿洲國帝政を布く……………(170)

滿洲國史教本

第一册

一、古代滿洲的民族

距今約三千年前在滿洲地方住有一種民族就是肅慎。此種民族活動的地域以北滿牡丹江一帶爲中心東至日本海西至東蒙古散居於白山黑水之間自成部落。各部落均由酋長統轄。活動經一千年之久可稱爲滿洲最古的民族了。

當時肅慎族所用的武器有兩種一是楛矢一是石弩。楛矢是一種木製的矢幹石弩是用堅石製成的鏃頭。他們住在森林中或河邊兩岸只知狩獵爭鬪。就使用石

古代滿洲の民族……………

滿洲國史教本 第一册

一 古代滿洲の民族

今を去ること約三千年前、滿洲地方に在住する一種の民族があつた。肅慎といはれるのが是である。此の種民族の活動の地域は、北滿牡丹江一帶を中心とし、東は日本海に至り、西は東蒙古に至る、長白山と黑龍江との間に散居して自然に部落を形成してゐた。各部落は均しく酋長に由つて統轄せられ、活動すること一千年の久しきに亘つたが、此の肅慎こそ滿洲最古の民族といふべきである。

當時肅慎族の使用した武器に二種ある。其の一を楛矢といひ、他の一を石弩といふ。楛矢は一種の木で作つた矢で、石弩は堅い石で鏃頭を製したものである。彼等は

器一點看來可見他們是未開化的民族。

肅慎是住於滿洲最古的民族後世的靺鞨渤海女真金清等都是他們的同族。

森林中か或は河川の兩岸に住んで居て、只狩獵をするにと、他と争鬪することを知つてゐるのみであつた。石器のみを使用したことから考へると、彼等は未開化の民族であることを知ることが出来るよう。

肅慎は滿洲に住んだ最古の民族である。後世の靺鞨、

渤海、女真、金、清等はすべて此の肅慎と同族である。

註 (一)肅慎の名は「ミチハセ」又は「ミチムマセ」と訓じ我國史上にも現はれてゐる

即ち(1)欽明天皇の朝佐渡を掠奪す。(2)齋明天皇の朝阿倍比羅夫の征討。(3)其他天武天皇、持統天皇の朝の記事にも見ゆ、但し此の滿洲國史の肅慎と我が國史上の肅慎を同一なりと斷ずるは早計であらう。

(二)楛は荊に似た植物で赤色の樹幹を有し矢がらを作るに用ひられる。

(三)支那の古書に「肅慎氏楛矢石弩を貢ぐ」とあり、鐵器時代に入りて已に相當の年代を経過せし當時の漢民族に對して異様の感を與へたことであらう。

二 匈奴の南侵と萬里の長城

肅慎が東部山地に在つて狩獵生活をなしつつあるに當

當肅慎正在東部山地作狩獵

生活同時西部蒙古高原住有匈奴民族。匈奴人以遊牧爲生飼養牛羊馬匹逐水草而居住。——遊牧民族大都性極勇敢善於騎射——在夏秋之際陽光朗照氣候和暖匈奴人得以自由遊牧於北方原野。一到冬季氣候嚴寒水草枯竭畜類飼料遂感缺乏於是不得不南下覓食往往遠至中國本部黃河沿岸肆行掠奪。所以中國古代常苦匈奴爲患如燕趙等北方諸國爲防備他們南侵起見均在國境建築城牆以便抵禦。各國雖築有城牆但匈奴南侵之事依然不絕到了秦始皇統一戰國以後派三十萬大軍大破匈奴。同時將各國防邊舊城連接起

り、時を同うして西部蒙古高原には匈奴民族が住んでゐた匈奴人は牛羊馬匹を飼養して生活を爲し、水草を逐うて居住する遊牧民族である。——遊牧民族は大概性質極めて勇敢で騎射が巧みであるのを常とする——蒙古の高原も夏秋の際は日光は朗々と照りかがやき従つて氣候は溫暖であるから、彼等は自由に北方原野を遊牧して生活を樂しむことが出来るが、一たび冬季が來ると、氣候は嚴寒水草は全く枯竭して遂に畜類飼料の缺乏を感じる。是に於て匈奴たる者は、南方暖地に赴いて食を覓めざるを得ないから、往々にして遠く中國本部の黃河沿岸にまでも行つて肆に掠奪した。中國古代では常に此の匈奴の掠奪に苦しんだものである。燕、趙等の北方諸國は、彼等の南侵防備の目的から均しく國境に城牆を建築して以て抵抗防禦の據點とした。

來造成萬里長城。從此匈奴無隙可入轉而劫奪於西方中國黃河沿岸一帶的居民得以稍稍安枕了。

各國は城牆を築いたがしかながら匈奴の南侵は依然として絶ゆることが無かつた。秦の始皇帝が戰國を統一した後、三十萬の大軍を派して大に匈奴を破ると共に、各國個々の舊城牆を連接統一して所謂萬里の長城を造成した後は、匈奴は侵入すべき間隙が無くなつたから、轉じて西方諸國を劫奪するやうになつたので、中國黃河沿岸の居住民は稍枕を安んずることが出來た。

註

(一)匈奴、昔、今の熱河省シラムレン河流域を本地として其の東西に蔓延せる民族であつて、商の湯王の時に起り晋初に亡びた。トルコ種なりといはれ、或は蒙古滿洲兩族の混合種なりともいはれる。史冊に單に胡ともいひ今の蒙古人の祖先なりとせられる。其の根據地は北方ではケルレン、トラの諸流域、南方では陰山の南北である。漢民族の勢が盛んになれば漠北に退き、衰ふれば漠南に出で、更に進んで漢民族の國即ち中國を侵略するのが殆ど例になつてゐた。

(二)中國、支那をいふ。世界の中央に在りとの考で支那民族が自國を誇稱したことから起つた名稱であるが、其の起原は頗る古いらしく孟子に「堯の世河水逆行して中國に氾濫す」とあつて河水は黃河で、中國とは所謂中原のことである。蓋此

の中原の名稱も昔は河南省を中心とする沃野をいつたものであらうが、支那民族の歴史は進展し舞臺は廣くなつて、今日地理的に説明すれば東は山東省の泰山山系、西は山西省の大行山脈、南は河南省の伏牛山脈、北は河北省の恒山山脈を以て圍まれた總面積二十萬方マイル、人口一億五千萬を包容する世界無比の大平原をいふのである。

(三)燕、趙、共に支那戰國時代の七雄國の一であつて概して今の河北省の西部より山西、陝西兩省の地に當り匈奴と境を接して國を建ててゐた。

(四)萬里の長城、漢民族は一面からいへば城牆を築造すべく運命づけられた人種であるといへる。此の運命は約五千年前彼等の祖先が、遠く黃河の上流より次第に東徙し中原に進出した時から確定的となつた。先住民族たる苗族を南方に壓迫して黃河沿岸に繁殖し定着するまでは、拮据經營尋常ならざるものがあつた。既に敵の故土に入つて耕耘に従ふのである。此等の報復と迫害を免かれんが爲には非常なる苦心を拂つたことは想像に難くない。試に彼等が外敵防禦の爲に地上に構築する國訓「トリデ」と稱せらるるもののみを調べて見ても、堡、壘、寨、塞、砦、柵、墉、壁、塼等の文字がある。之等は構築の材料、方法或は其の位置等で多少内容を異にするのであらうが、之に類する「カキ」即ち墻、堞、屏、垣、堦、堵、藩、籬等を數ふれば頗る多數の語彙を有する。しかして之が多ければ多い程彼等が苦心慘澹百般の手段を講じ盡した當時の情況を推知し得るのである。漢民

族の中原定着は漸く其の緒に就いて、各地に於て個々に團結し自ら稱して諸夏の國といつた。周圍には萊夷、除戎、百越、氏羌、群狄、群貊等の蕃族が居つて絶えず漢民族を苦しめた爲、彼等の生活は、堡、砦、塹、墻等で圍まれた城内生活を營むやうになり、家屋の如きも泥造の構造から現在の如く如何なる悪業祕事も行はれ易い魔屈のやうなものに向つて發達した。漢民族が周圍の蕃族を驅逐し或は之を同化するまでには、諸夏の國國は其の勢力を打つて一丸とする爲に、大同團結をする必要があつた。古來最も難解とせらるる易经同人の卦は此の間の消息を語るものではないかといはれる。「同人野に于いてす、亨る、大川を渉るに利し君子の貞に利し」。「戎を莽に伏せ、高陵に升り、三歳まで興らず」。「人に同ずるに先には號はひ咷んで後には笑ふ、大なる師して克ちて相遇ふ」。隱語めいて解らぬが説明を聞けばうなづけぬこともない。漢民族は周圍の蕃族との戦に因つて堡砦等の城墻、著しく發達せしめたであらうが、最後に匈奴の出現と、春秋戰國の争覇は各國個々の長城となり、秦の始皇帝の中國統一に因つて遂に萬里の長城にまで進化した。現在滿洲に残存する柳條邊墻の如きは構築の目的及對照物にもよるが、むしろ長城の退化である。

匈奴出現の頃から漢民族も漸く歴史時代に入り、異民族との争鬪殊に北方民族との對立關係が愈明瞭となつて来る。秦時の明月漢時の關、萬里長征人未だ還らず、但龍城の飛將をして在らしめば、胡馬をして陰山を度らしめず」と唐の王

昌齡が歎いたやうに、秦時といはず漢時といはず其の歎いた詩人の仕ふる唐時といはず、胡馬が陰山を越えて中國に侵入するのは恒例となつてゐる。支那の歴史其のものは、其の大半を之等北方塞外民族との争鬪で填めてあるといつても決して過言では無い。争鬪の結果は或は漢民族が優勝して遠く塞外民族の疆土に勢力を伸張して之を歸伏せしめた時代もあり、或は塞外民族が勝利を得て所謂中原の地を略取し四百餘州に君臨した時代もあるのであるが、茲に特筆しておきたいのは漢民族が塞外の地を完全に支配した年數よりも、塞外民族が支那中原の地を支配した期間の方が遙かに長いことである。

地圖を繙けば、支那大陸の西北部甘肅省から東へ蒙古大沙漠の南邊を横ぎり、山を越え谷を渡り、蜿蜒紆餘として北平の遙か北方を過ぎ、遂に東南方山海關の海濱に至る異様の劃線がある。いふまでもなく之が萬里の長城で日本里程で約八百里、實に世界無比真に驚くべき大土工である。其の大部分は堅固なる煉瓦を以て築造し、高さ平均十メートル、厚さ上部で平均四メートル強、大なる部隊が堂々隊伍を組んで行進することを得、一定の間隔をおいて望樓や、堡壘の用を爲す工事を施し、其の内部を守備隊の兵舎にあて、尙此の長城の外側即ち蒙古側よりは登り得ずして、内側即ち支那側からのみ登り得る構造になつてゐるさうである。北平の北方に八達嶺といふ山がある、支那の地理書に此の八達嶺上の展望を書いて次のやうにいつてをる。八達嶺は一大分水嶺で標高約六〇〇メートル、南

方は南口の峡谷をへだてて遙かに河北の大平野を望み、北には脚下に展開する懷來盆地をへだてて遙かに陰山山脈の蜿蜒たるを望み展望偉大を極めてゐる。有名な萬里の長城は此の分水嶺上に築造せられ、谷を渡り山を越え遙かかなたの雲際に消えさるまで。綿々として盡きざる有様は實に天下の一大偉觀である。「漢々たる孤城落照の間、黃榆白葦關山に滿つ、千枝の羌笛雲に連つて起る、知る是れ胡兒馬を牧して還るを」。これは長城守備の一點景である。

秦時の長城は東は今の滿洲遼陽を過ぎ、東南に屈曲して安東縣附近まで延びてゐた。爾來二千數百年漢民族の支那人は、幾たびか之を修繕し、幾たびか之を整理し、北方民族との勢力の消長に従つて、或は北方に擴張し、或は南方に縮小して大體今の長城の線に位置の定つたのが隋の時代といはれる。圖上で見る如く山西、河北にまたがり長城が二重になつてゐるのはこれが爲である。今回滿洲新國家獨立について支那人が聲を大にして日本人を中傷し、惡宣傳を行つてゐるが實に嗤ふべきことで、歴史上から見れば「滿洲を支那の領土だ」などいふ資格は、漢民族たる支那人には斷然無いのである。前述の如く秦の長城完成後は、長城外を塞外とか、關外とか、漠北とかいつて其の住民を化外の民とし支那國民として待遇したこととはない。待遇せなればかりで無く常に之を敵とし蛇蝎の如く忌み嫌ひ、北狄と名けて獸として待遇した。元來支那人ほど自己を尊大に構へ他國人を蔑視する國民は珍らしく、昔から東夷、南蠻、西戎、北狄などいふ言葉があ

るがどんな意味か調べて見よう。辭書には、

夷。(常に弓を携へ人を殺す未開人である)。

即ち東夷とは東方の國の者で、人を殺すことを好む臺灣の生蕃のやうな人種であるといふのである。

蠻。(南方溫暖の地には蛇が多い。蠻は蛇の一種である)。

即ち南蠻とは南方の國の者で、蛇のやうな人種である。

戎。(常に戈を持ち甲を着て争を好む野蕃人)。

即ち西戎とは西方の國の者で、侵略をこととする強盜のやうな人種である。

狄。(獸類と同様な人種故に狄の字を書く)。

即ち北狄とは北方塞外の民族で獸類と同じ資格しか無い下等な人種である。

之に引きかへ自分等や自分等の國を中夏といつて自慢をする。「夏の」の字は日本では主として「なつ」のことであるが支那では「なつ」の意味にも使ふが大體次のやうに辭書に書いてある。

夏。(禮儀正しく、容貌も清らかな人)。

今では中華民國といふが華も夏も概して意味は同じである。即ち支那人にいはすれば他國人は蛇や獸と同様であつて、自分等だけが立派な人であるといふのである。我々日本人のことを、「委奴」と名づけて現在小學校の教科書にまで載せてをるが、委奴の語の起原は別にありとしても、現支那人の用ひてゐる意味はいふ

までも無く「日本の奴」といふのである。奴の字の解釋はあまりおとなげないから省略して再び長城の説明を進める。萬里の長城は漢民族たる支那人が自らこれを築き、自らこれを守つて幾千年國境としての信念の固きことも恰も長城其ものが、幾星霜を経るも嚴として昔の面影を残してゐると同様である。吾人は今一度王昌齡の詩を引用して見たい。「秦時明月漢時關」とは何を詠じたのか、天空に輝く月輪が、秦時より漢時と續き唐時の今日に至るまでも變り無く、長城の關門を守る衛兵の姿を照らす場景を賦して、匈奴と漢民族との争鬪の傳統的であることと、國境嚴守の情況を言外に表示してゐるではないか。秦時に於て然り、漢時に於て然り、唐時に於ても亦然り、其の他の時代は推して知るべしでは無いか。今日長城の沿線兩側幾十里の間、森林として見るべきもの無く滿目荒涼として人煙極めて稀なるは、果して如何なる原因からであるか、長城の築造、増設、修理の爲に夥しき煉瓦を焼く燃料として、附近の森林といふ森林、樹木といふ樹木は幾千年來伐り盡し採り盡して、遂には其の跡に新に樹木の生え得ないまで、根を掘り葉まで集めて焼き盡し燃やし盡した結果であると見る學者もある程で、如何に此の長城に力を傾注したかを知ることが出来る。要するに萬里の長城は、支那民族自ら畫いた鮮やかな國境の一線で、今更塞外の地である滿洲の地に、新國家が成立したからとて之に抗議すべき理論の根據は極めて薄弱なものである。歴史の示すのはそのみでは無い。長城以南の地にあつても概して河北一帯は、昔

三、漢人移殖滿洲

朝鮮半島本爲三韓民族——
辰韓辨韓馬韓——所居。當中國
周初箕子率領殷民五千人到了
朝鮮北部在平壤地方建設都城

漢人滿洲に移殖す……

時帝都に遠く疆民は果して普く王化に浴せしや頗る疑ふべく、中古に至つて北方民族たる遼、金、元と漢民族たる五代、宋との折衝を見れば、恰も歐洲に於ける獨佛兩國間のアルサスローレン兩州と同様に處置せらるべき地域のあることを吾人に教へるのである。しかし從來滿洲を支那の一部なりと認めてゐた時代もある。但しこれは支那人自らの力ではなく、嘗ては、北狹とか胡人とかの蔑稱を以て待遇してゐた塞外民族のお蔭である。即ち元、清、などの如く塞外から起つて四百餘州に君臨した時、自己の故地を支那と同様に治めたからである。此の事理を辨へたならば今日の支那人たる者は、滿洲新國家の元首溥儀氏正しく清の直系たる支那大國萬乘の天子前の宣統皇帝に對し、三拜して非禮を謝し、九拜して其の洪恩に感泣すべきで、滿洲國に對して敵意を持つなどは以ての外である。

三 漢人滿洲に移殖す

朝鮮半島は元三韓民族——辰韓、辨韓、馬韓——の居住する處である。中國周時代の初箕子が殷の人民五千人を引連れて朝鮮の北部に來て平壤地方に都城を建設した。

其後約經一千年到了漢代初葉有衛滿者驅逐箕子的子孫而立爲王。

漢初匈奴常爲邊患武帝幾次出兵派衛青霍去病做大將大敗匈奴這時漢族的兵威極盛得了朝鮮衛氏篡國的消息武帝就乘勝派兵滅了他並收其地改爲郡縣距今約有二千多年了。

漢武帝東征朝鮮收爲郡縣漢人隨大軍東來漸次移殖於滿洲南部一帶這種移民大都從事墾荒以農業爲生活當時稱現在的遼陽叫遼東爲漢人勢力的中樞今日鞍山首山接近遼陽的地方常有各種古墳發現大半是古時漢人的遺跡。

其の後約一千年を経て漢代の初葉に到つて衛滿なる者が箕子の子孫を驅逐して自ら立つて王となつた。

漢代の初匈奴が常に中國の北邊を犯してゐたから漢の武帝は幾度も出兵し、衛青、霍去病等を大将として大に匈奴を敗つた。此の頃漢族の兵威は極めて盛んであつたが、朝鮮の衛氏が國を篡奪した消息を知つた武帝は、勝に乗じて兵を派して衛氏を滅ぼし、猶其の地を收めて改めて、郡縣としたが今を去ること二千年の遠い昔である。

漢の武帝が東方朝鮮を征服して、收めて郡縣の制を布くや、多數の漢人が軍に従つて東來し、漸次滿洲の南部一帯に移殖した。此の種の移民は大概開墾に従事し農業を以て生活した。當時現在の遼陽を遼東と呼び漢人勢力の中樞たらしめた。今日鞍山、首山等遼陽に接近せる地方には、常に各種の古墳を發見するが、其の大半は昔時

の漢人遺跡である。

- 註
- (一) 箕子は殷の王族で紂王の叔父である。紂王の暴虐を諫めて囚へられ、伴り狂して奴となり琴鼓に悲憤を紛らしてゐたが、武王の殷を滅すに及び周の臣たることを恥ぢ朝鮮に逃れて自立した。武王は禮を重んじて箕子を朝鮮王に封じた。これが所謂古朝鮮で西紀前一〇〇〇年頃にあたる。
 - (二) 衛滿は燕の人である。燕王廬縮が漢室に叛して國內亂るるに及び其の黨十餘人と共に亡命して朝鮮に走り、策を廻らして不意に朝鮮王箕準を襲うて之を逐ひ、西紀前一九四年自立して王となり平壤に都した。箕子初めて朝鮮に入つてから約一〇〇〇年を経過してゐた。
 - (三) 衛青、字は中卿といひ平陽の人である、漢の武帝に仕へて大中大夫となつた。武帝の匈奴征伐の際大將軍に拜せられ、雁門雲中より出で、大に匈奴を破り河東の地を奪つて朔方郡を置いた。後又霍去病と共に匈奴を討つて之を漠北に逐うて四郡を開いた。功に依つて長平侯に封ぜられた。
 - (四) 霍去病、衛青の甥である勇武人に勝れて最騎射が巧みであつた。衛青に従つて匈奴を討ち軍功に依つて冠軍侯に封じ驃騎將軍となつた。人となり寡言、産を治めず、古人の兵書を墨守せずして機に臨んで術を施した。
 - (五) 衛滿の孫衛右渠に至り漢の武帝に滅ぼされた。國を立つること八十七年であつた。

(六) 樂浪郡(平安道の南部及黃海道) (2) 臨屯郡(江原道) (3) 玄菟郡(咸鏡道) (4) 眞蕃郡(平安道の北部と滿洲奉天省の東南部) 之等の郡は概して半島の北半部であつて南半部は所謂三韓が分立してゐた。

(七) 漢の武帝の頃は今より約二千年の昔であるが漢文系統の文章では數字を記すに實數を現はさず大數を書く場合が多いから此所では原文のまま三千年前としておいた。

四、挹婁和扶餘

挹婁是肅慎的別種住在長白山東部穴居野處常在山中生活平時以養豚爲業食其肉衣其皮冬季用豚膏塗身厚至數分以防寒風夏季裸體僅用布條少許覆蔽臀部前後。他們也知牧畜耕種所以出產五穀麻布牛馬等物。又善於騎射矢上塗着毒藥禽獸中了立刻就死。由狩獵所得的挹婁

四 挹婁と扶餘

挹婁は肅慎の別種である。長白山の東部に在住して穴居野處、常に山中に在つて生活し、平常は養豚を業とし其の肉を食ひ、其の皮を着た。冬季は豚の膏を皮膚に塗ることを厚さ數分に至らしめて以て寒風を防いだ。夏季は全くの裸體で、僅かに少許の布切を用ひて臀部の前後を覆ふのみである。彼等は又牧畜と耕種の方法を知つてゐたから、五穀、麻、布、牛、馬等の産物を出した。亦

貂是非常珍貴的。

扶餘亦與肅慎同種都是通古斯族。古說相傳其王叫做金蛙嘗得河伯的女兒爲太陽所照而有娠生了一個大卵有一兒破卵殼而出他的母親把他撫育成成人骨格甚偉善於騎射命名叫做東明扶餘人嫉他的才能打算殺了他他就不得已出奔中途遇河欲渡無橋追兵甚急東明告水說我是太陽的兒子河伯的外孫現在追兵快到如何得渡於是魚鼈忽然聚集成成一橋得以安然渡過。遂到了鴨綠江流域建立新國就是後來高麗的始祖

大概扶餘古國建立於北滿一帶約在二千年前幅員二千里人

騎射が善く出來た。矢上には毒藥を塗附してあるから禽獸は中ると立所に死ぬのである。彼等の狩に由つて得る所の「挹婁貂」は非常に珍貴な物である。

扶餘は亦肅慎と同種であつて、都て是等は通古斯族である。古說の傳ふるところに依れば、扶餘の王を金蛙と呼んだ。嘗つて河神の女を得て妻としたが、或時彼の女は太陽の光を身に受けると其の時から妊娠して、後一個の大卵を産んだ。中に一兒があつて卵殼を破つて出て來た。彼の女は此の子に命名して東明と呼び、撫育して成人せしめたが骨格が、甚だ偉大で騎射を善くした。扶餘人等は彼の才能を嫉むのあまり遂に彼を殺さうと企てたから、彼は止むを得ず出奔して途中河に遇つたが渡らうとすれど橋が無い。追撃の兵は甚だ急である。東明は水に向つて告げて言つた。

口八萬戸其初都城在農安附近後又遷至長春平野。國人注重農事倘遇水旱不調五穀不熟便歸罪於國王以爲廢立的口實甚且結果他的性命。這種民族的風俗在國內常穿白布衣出了國門便飾以綿繡。現在朝鮮半島の住民尙有此種遺風就是因爲高麗的始祖是扶餘人的緣故。扶餘立國既古人民以從事農業爲生活。他們的的文化影響於古代滿洲非常深遠。

「我れは是れ太陽の子、河神の外孫。今敵の追撃甚だ急なり。如何にか此の河を渡るを得ん」
 是に於て河中の魚鼈忽然として集ひ聚り、連り併んで一橋を形成したので、安然として渡ることが出来た。遂に鴨綠江の流域に到り、新國を建立した。是が後來の高麗の始祖である。

大概扶餘の古國は北滿一帶に建立したもので約二千年前に當り、幅員二千里、人口八萬戸であつた。其の初都城は農安附近にあつたが後長春平野に遷つた。國人は農事を重んじ、若し晴雨不調で五穀が熟らないやうなことに遇へば、之を國王の罪に歸し以て廢立の口實として其の生命を奪つた。此の民族の風習として國內に在る時は白布の衣服を纏ひ、國門を出る時は綿繡を以て飾つた。現在朝鮮半島の住民に尙此の遺風があるのは、高麗の始

祖が扶餘人との緣故に因るのである。扶餘の立國は既に古く人民は農業に従事して生活した。彼等の文化が古代滿洲に影響したことは非常に大きいのである。

註

(一) 農安は新京の北方十餘邦里の所にあつて年々増加する農産物の集散地となつてゐる。遼、金時代は黃龍府と稱せられ北境の重要都市であつた。

(二) 國內、國門、此の國の字は現代使用する國家と解するよりも、國內は郷土、國門は郷關と解するが至當であらう。

(四) 現在朝鮮忠清南道の扶餘は、百濟第二十五世聖王以後の都である。いふまでもなく百濟は扶餘族が建てた國であるが、此の朝鮮の扶餘と同名の地が農安の西北方二十餘邦里の處にある。新京、農安及び此の扶餘一帶は扶餘人の故土であつて現在の扶餘は遼、金時代の達呂嘴の地で、清朝では新城と稱し後蒙古名の伯都訥に復したが、國民政府が古に因んで扶餘と改めたものである。朝鮮の扶餘、滿洲の扶餘歴史を回顧すれば因縁淺からずといふべきである。

五、高勾麗的創興

當中國西漢興盛的時候略取朝鮮半島北部爲郡縣維持勢力

五 高勾麗の創興

中國の西漢は其の興盛の時世に當り、朝鮮半島の北部

約有百年之久。到了東漢國勢衰微便有通古斯族侵入朝鮮半島建立了高句麗和百濟兩個王國與韓民族建立的新羅王國相對峙。三國鼎峙於半島對內採用合縱連橫的政策對外採用遠交近攻的政策垂七百年之久。在歷史上稱爲朝鮮三國。

高句麗又稱高麗其始祖東明或稱朱蒙也叫鄒牟本是扶餘國人。他的逸事在上課已經說過。鄒牟建國的年代距今二千年約在中國漢元帝二年日本神武天皇紀元六百二十四年也就是西歷紀元前三十七年。高麗最初五百年建都在現今奉天輯安縣附近後二百年遷都於朝鮮的平壤。其

を略取して郡縣と爲し、約百年の久しき間勢力を維持した。東漢の國勢衰微するに到り、通古斯族が朝鮮半島に侵入して建立した高句麗、百濟の兩王國と、韓民族の建立した新羅王國とが相對峙した。此の三國は半島内に鼎立して、對內的には合縱連衡の政策を採り、對外的には遠交近攻の政策を採つて七百年の久しきに垂んとした。歴史上是を朝鮮の三國といふのである。

高句麗は又高麗とも稱する。其の始祖東明は或は朱蒙と稱し又鄒牟とも呼ばれる。元扶餘國人で彼の逸事は已に前課で述べた通りである。鄒牟が建國した年代は今を去ること二千年、略中國漢の元帝二年、日本神武天皇紀元六百二十四年であつて、西歷では紀元前三十七年である。高麗は最初五百年は、都を建てて現今の奉天省輯安縣附近に在つたが、後二百年は朝鮮の平壤に遷都した。

領土頗廣滿洲東部和朝北部皆在勢力範圍内。國運隆盛經七百年之久。現在南滿各地常常發見古墳城址稱作高麗墳高麗城的。就是當時的遺物。

高麗第十九代廣開土王——好大王——英明有爲奪遼河以東的地方擴大自國的領土又南聯新羅共抗百濟親率水師南征連陷百濟五十餘城。他的兒子長壽王所建的好大王碑刻有一千八百字的長文記述祖先的創業好大王的功績。約爲一千五百年前的遺物。——現尚保存在輯安縣附近——實是我滿洲歷史上希有的古物。

其の領土は頗る廣く、滿洲の東部と朝鮮の北部は皆其の勢力範圍内に在つて、國運隆盛七百年の久しきを経た。現在南滿各地では常に古墳や城址を發見するが、高麗墳高麗城と稱せられて當時の遺物である。

高麗第十九代廣開土王——好大王——は英明有爲で遼河以東の地方を奪つて自國の領土を擴大し、又南新羅と聯合して共に百濟に敵對し、親ら水師を率ゐて南征し百濟の五十餘城を連續して陥れた。廣開土王の子廣壽王が建つる所的好大王碑には一千八百字の長文を刻み、祖先の創業と好大王の功績を記述してあるが、約一千五百年前の遺物で、今尚輯安縣附近に保存せられてゐる。實に我が滿洲歷史上希有の古物である。

註 (一)高句麗、我國にては高句麗又は高麗と呼び後に王建の建つる高麗と區別するを普通としてゐる。コマは朝鮮語で「コ」は大の義、「マ」はマル、ムルともいはれ

てゐる高句麗では城の義であるから高句麗は正しくはコマル又はコマである。然るに何時か原音を忘れてコクリと讀ませ、勾を脱して専ら高麗と書きコリ若くはコライと讀ませたから、西洋諸國でも朝鮮をコレア又はコレーと呼ぶやうになつた。我國史に貊と書いてコマと訓ずるから獸類を連想して益々原義と離れたやうである。

(二)合縱、周末戰國の世秦、楚、燕、齊、趙、韓、魏を七雄國といふ。就中秦は今の陝西、甘肅、四川を領有し、東に函谷關の險要を控へ地勢最優勝の位置を占めたのみならず、士民は質朴剛建であつたから遂に他の六國に雄視し、之を併呑せんとするやうになつた。是に於て洛陽の人蘇秦なる者が天下の大勢を察し、六國に遊説して同盟を結び以て秦に當らせた。之を合縱といふのである。七國の位置が秦は西にあり、他の六國は其の東に略南北に併んでゐたから縦に連合したといふ意味である。(2)連衡、合縱の策は秦の離間策で破れた。是に於て張儀なる者が連衡の策を立てた。衡は横の義である。六國は横即ち東西に連つて秦に仕へることである。後世各種の諸勢力の同盟結合等に此の合縱連衡といふ語を用ふるやうになつた。

(三)遠交近攻、魏の人范雎なる者が秦の昭襄王に用ゐられて獻策した政略である即ち秦が天下を統一せんとするや遠方今の山東地方の齊、河北地方の燕等と親交を結び、近隣の趙、魏、漢の如きは攻めて之を亡ぼし順次斯くの如くして遂に六

國を盡く亡ぼした。現在支那人は此の政略を踏襲してゐるやうである。

六、高句麗的衰亡

當中國南北朝時高句麗和中國互相通好到了隋朝統一南北長壽王六世孫嬰陽王元深恐中國的壓迫率領靺鞨兵萬餘人入寇遼西。隋文帝發兵三十萬分道伐高麗未能得利其後煬帝屢次出兵也是徒勞往返。

嬰陽王元傳位於其弟榮留王建武正是中國隋亡唐興的時候。建武爲他的大臣泉蓋蘇文所弑而立他的從子臧稱作寶藏王。泉蓋蘇文擅作威福並率百濟侵新羅且絕新羅入貢中國的道路。唐太宗大怒親自督軍討伐高句麗

六 高句麗の衰亡

中國南北朝時代、高句麗と中國は互に好を通じてゐた。隋朝が南北を統一するに到り。高句麗では長基王六世の孫に當る嬰陽王（名は元）が深く中國より壓迫せられんことを恐れ、靺鞨兵一萬餘を率ゐて遼西地方へ入寇した。隋の文帝は三十萬の兵を發して道を分つて高麗を討伐したが、未だ勝利を得ることが出来なかつた。其の後文帝の子煬帝も亦屢々兵を出したが、唯徒勞を繰返すのみであつた。

嬰陽王は位を其の弟榮留王（名は建武）に傳へた。恰も中國では隋亡んで唐の興つた時であつた。高麗では大臣泉蓋蘇文といふ者が榮留王を弑して王の甥「臧」を立

破蓋牟遼東白巖三城就是現今奉天省的遼陽海城蓋平一帶地方。後因天氣嚴寒糧食將盡兵馬不能久留未竟大功而還。

唐高宗時高麗百濟連兵侵新羅新羅派人來唐求救。唐室以爲高麗百濟狼狽爲奸欲伐高麗不可不先破百濟。於是派蘇定方薛仁貴等率兵十萬滅了百濟。既亡唐乃乘勢經略高麗。這時高麗權臣泉蓋蘇文已死三子爭權發生內亂。高宗命李勣圍攻平壤寶藏王出降。唐收高麗爲郡縣。命薛仁貴做安東都護使鎮撫降地。滿人建立的高麗從此滅亡了。

てて寶藏王と稱し、擅に權威を振ひ財寶を積み、百濟を味方に従はしめて新羅を侵し且つ新羅が唐に入貢する道路を絶つた。之を聞いた唐の太宗は大に怒り、親ら軍を督し高句麗を討伐して蓋牟、遼東、白巖の三城を破つた。是は現今の奉天省遼陽、海城、蓋平一帶の地方である。後嚴寒の季節に遭遇し、糧食將に盡きんとして軍を久しく留むることが出來ず、未だ大功を收めずして唐に還つた。

唐の高宗の代、高麗、百濟の聯合軍が新羅に侵入したから、新羅は人を唐に派して救を求めた。唐室では高麗と百濟が亂暴狼藉するので高麗を伐たうと思つた。しかしそれには先づ百濟を破らなければならぬといふ事に決つた。そこで蘇定方、薛仁貴等に兵十萬を率ゐしめて百濟に派し、遂に之を滅ぼしてしまつた。唐軍は勢に乗じ

て高麗を経畧した。高麗では此の時權臣泉蓋蘇文は己に死し、其の三子が權力を爭奪して遂に内亂を發生せしめてゐた。唐の高宗は李勣に命じて平壤を攻圍したので、寶藏王も遂に出て降つた。唐は高麗を收めて郡縣と爲し薛仁貴に安東都護使を命じ降地を鎮撫せしめた。滿洲人が建國した高麗も茲に至つて滅亡した。

註 (一)唐の高宗は蘇定方に兵を授け、山東の一角から海に航し新羅の武烈王と會して百濟を攻め、其の都城を陥れて義慈王を降した。百濟の將鬼室、福信等我邦に質として來てゐた王弟扶餘豊を迎へて我が援兵を乞ひ、高麗と結んで恢復を圖つた。齋明天皇は親ら舟師を率ゐて筑紫に幸し、阿曇比羅夫をして百濟を救はしめ給ひしも我軍白村江(錦江)口に於て利あらず、百濟王豊は高句麗に奔り、西歴六六三年百濟は全く亡びた。我邦の半島に於ける幾百年の勢力を失つたのは此の時からである。

(二)平壤陥り高句麗の亡んだのは百濟の滅亡後五年西歴六六八年である。

七、渤海の疆土和風俗

渤海の疆土と其の風俗……

七 渤海の疆土と其の風俗

……二二

渤海在歷史上常呼作靺鞨本
是扶餘的遺族。追朔來源古代的
肅慎後漢的滿節三國時的挹婁
後魏時的勿吉都是同音異譯的
名稱。

勿吉分作兩部一是黑水勿吉
一是粟末勿吉——黑水就是黑
龍江粟末就是松花江——他們
的屬地東方靠海西方接近突厥
南方界於高麗北方和室韋相鄰
就是現今吉林黑龍江兩省及東
海濱省南部黑龍江以南烏蘇里
江以東等地。國內分作數十部各
部都有酋長或附於高麗或臣於
突厥。黑水靺鞨居住極北最稱強
健勇武有力常爲鄰國的邊患。
他們的風俗編髮爲辮插雉尾

渤海は歷史上では常に靺鞨と呼びなされてゐる。元扶
餘の遺族であつて、其の源を尋ねれば古代の肅慎、後漢
時代の滿節、三國時代の挹婁、後魏時代の勿吉は皆同音
異譯の名稱である。

勿吉は二部に分れてゐて一を黑水勿吉といひ、他の一
を粟末勿吉といふ。黑水は黑龍江のことであつて、
粟末は松花江のことである。彼等の屬地は東方は海
に倚り、西方は突厥に接近し、南方は高麗と界し、北方
は室韋と相隣してゐて、現今の吉林、黑龍江の兩省及び
東海濱省の南部、黑龍江以南烏蘇里江以東等の地である。
國內は數十部に分れ、各部には皆酋長があつて、或は高
麗に附屬し、或は突厥に臣事してゐた。黑水靺鞨の極北
に居住する者は、體力最強健、武勇勝れて常に隣國の邊
境を侵し之を惱してゐた。

做冠飾。居住沒有屋宇只知掘地
成穴架木於上拿土覆蔽狀如中
國墳墓。家人父子相聚而居。人死
了埋在地下也無棺斂。家畜尙豬
富人多至數百口。他們風俗的鄙
陋和契丹突厥並無兩樣。

彼等の風俗は、髮を編んで辮と爲し、雉尾を挿んで頭
部の飾とした。居住の家屋としては無く、只地を掘つて穴
を作り、其の上に木を架け土を以て蔽覆ぶせるのみで、
之を眺めると恰も中國の墳墓のやうである。家人父子等
家族全部が相聚つてここに穴居するのである。人が死ぬ
れば地に埋めるが棺斂は無かつた。家畜では猪を主とし
富者は數百頭も養つてゐた。彼等の風俗の鄙陋なること
は契丹や、突厥とかはるところは無い。

註 (一)突厥は匈奴の別種で唐代其の一派は漠北に居つた。

(二)室韋は通古斯族と稱せられてゐるが、又匈奴とも人種的關係あるが如き文献も
あり、要するに一種混淆した種族であらう。蒙古の東部黑龍江沿岸主として其の
北岸に居つた。

(三)東海濱省は現在露領沿海州一帯の地である。

八、渤海的建國和文化

八 渤海の建國と其の文化

中國隋唐時代靺鞨酋長多數内屬。惟有粟末部酋長大祚榮不服。他本高麗別種既甚驍勇又善用兵。高麗既亡他就招集高麗遺族和靺鞨部民築城於東牟山——現今吉林省敦化縣——自立爲震國王地方數千里戶口十餘萬兵士數萬人。

唐中宗卽位遣使招撫祚榮奉詔遣他兒子入侍唐室睿宗時封祚榮爲渤海郡王。——此時遷都於牡丹江流域之忽汗城當在現今寧古塔西南——從此以後始去靺鞨之名而專稱渤海。

祚榮死後諡爲高王傳位於他的兒子武藝吁做武王。出兵北征攻破黑水靺鞨疆宇大關東北各

中國の隋唐時代靺鞨の酋長等の多くは之に内屬したが唯粟末部の酋長大祚榮は服さなかつた。彼は元高麗の別種で甚驍勇又善く兵を用ひた。高麗亡んで後彼は高麗の遺族と靺鞨部民とを招集して、城を東牟山——現今吉林省敦化縣——に築き自立つて震國王と爲つたが、其の領地は方數千里、戶口十餘萬、兵士數萬人であつた。

唐の中宗卽位し、使を遣して祚榮を招撫したから、祚榮は中宗の詔を奉じて其の子を唐室に入れて侍臣とした。睿宗の時祚榮を渤海郡王に封じた。此の時郡都を牡丹江の流域忽汗城に遷す。——之より以後始めて靺鞨の名が去つて専ら渤海と稱せられるやうになつた。

祚榮の死後高王と諡し、位を其の子武藝に傳へて武王と呼んだ。武王は兵を出して北征し攻めて黑水靺鞨を破つたから、疆界大に開け東北地方の民族で臣服せない者

民族無不臣服。武藝傳位於他的兒子欽茂吁作文王唐肅宗封他爲渤海國王。再傳六世到了宣王仁秀賢明有德政國勢益見興隆當時稱爲「海東盛國」。

渤海諸王累世交通中國摹倣唐制屢次派遣學生留學研究禮樂技術文化甚盛。一面結好日本和平恭順最初派遣使臣赴日出帆於海參崴附近渡過日本海至帝都奈良拜謁聖武天皇頗受優待日本亦遣使答禮。從此兩國通商渤海人常用毛皮換取日本綢絹。渤海自建國迄滅亡二百餘年和日本的關係非常親密。

は無かつた。武王は位を其の子欽茂に傳へて文王と呼んだ。唐の肅宗は文王を渤海國王に封じた。再傳して六世宣王（名は仁秀）は賢明で德政を施したから國勢益々興隆し、當時「海東盛國」と稱せられた。

渤海の諸王は代々中國と交通して唐の制度を模倣し、屢々學生を派して唐に留學せしめ禮、樂、技術を研究せしめたから其の文化は花と咲いた。又一面日本と好を結び恭順で平和を樂しんだ。最初使臣を派して日本に赴いた時には、海參崴港附近から舟出して日本海を渡航し、帝都奈良に到つて聖武天皇に拜謁したが、使臣等は頗る日本の優待を受けた。日本も亦使を遣して答禮し、兩國は之より通商するやうになつた。渤海人は常に毛皮類を以て日本の綢絹類と交易した。渤海は建國より滅亡まで二百餘年日本との關係は非常に親密であつた。

註

- (一) 忽汗城は龍泉府と稱し現在北滿鐵道東部線海林の東南方約十邦里の寧安附近に建てられたもので、遼時に天福城清時寧古塔、民國二年寧安に改めた。
- (二) 海參崴はウラジオストクの滿洲名である。
- (三) 我が國史に「聖武天皇四年九月渤海使の舟出羽に漂着、同十二月渤海使節始めて入朝京に至るとあるのが之である。
- (四) 聖武天皇の朝遣唐使多治比廣成の一行は唐に到つて使命を果し、天平六年十月四艘の海船に分乘して蘇州を發したが、海上忽ち暴風に遭ひ、大使多治比廣成の第一船は幸に種子島に漂着した。副使中臣名代の第二船は再び唐に吹返され天平八年七月になつて歸朝した。判官平郡廣成の第三船は崑崙國に漂着し、乗組員百十五人は或は殺され、或は瘴病に死し廣成等四人のみが纒かに免れて唐に歸り、阿倍仲麿の斡旋によつて唐朝から船糧を給せられ、道を渤海國にかつて歸國することとし、天平十年三月山東の登州から海を渡つて五月渤海國に到つた。時に渤海王欽茂は恰も我國に使節を遣はさうとしてゐる時であつたから、これと共に渤海を發したが海上また風波に遭ひ一船は覆没して渤海史行要徳等四十人は溺死した。けれども廣成等は幸に天平十一年十月出羽に漂着した。初め蘇州を發した海船の中第四船は行方不明で遂に日本に歸ることを得なかつた。以上は當時彼我交通の如何に危険であつたかを證する一例であるが、又かゝる危険を冒してまでも日本と唐、日本と渤海は修好した適例である。今や渤海の故土たる滿洲は獨立し

吉會線の全通と朝鮮北部の海港修築とにより、日本海交通は益々便利と安全の度を進めてゐる。建國より滅亡まで二百餘年日本に對して親密恭順であつた渤海諸王は地下で會心の笑を漏らすであらう。

九 契丹の勃興

契丹本是東胡遺族在中國後魏時代其名始見於史冊。地方二千里東接高麗西接奚國南接中國的營州北接室韋約當現今西刺木倫河流域一帶。人民以遊牧狩獵爲生沒有一定的住處。分做八部各有首領若有兵事諸部皆須合議不得單獨舉行。他們的風俗人死了不作墳墓用馬駕車將屍體送入大山置於樹上。子孫死的時候父母早晚必哭。父母死的時候子孫可以不哭。

契丹は元東胡の遺族である。中國後魏時代其の名が始めて史冊に見えた。領地は方二千里で東は高麗に接し、西は奚國に接し、南は中國の營州に接し北は室韋に接しておよそ現今の西刺木倫河流域一帶の地方に當つてゐる。人民は遊牧を以て生活を爲し一定の住所は持たない。八部に分れてゐて部には各々首領があり若し兵を用ふるやうな事が起れば諸部は相會して合議の上で決行すべく、單獨行動を許さない。彼等の風俗は人が死んでも墳墓を作らず馬を用ひて車を駕し之に屍體を載せて山奥に送り之を樹上に置くのである。子や孫が死ぬると父母は朝晩

隋唐之交契丹爲中國所羈縻其後屢降屢叛。到了五代時適值梁唐構兵黃河流域民不安枕漢人多奔逃契丹。這時契丹主耶律阿保機雄武有大略率領漢人耕種並治城邑市廛。漢人竟安居契丹不欲南歸。

契丹舊制八部各有大人公推一人爲王建立旗鼓得以號令諸部但須三年一代順次輪流。阿保機當國用他的妻述律氏計策殺諸部大人遂自立爲王不再受代。到了中國後梁末帝時建牙開府置百官修宮室定都於現今熱河的臨潢遂自稱皇帝。國人叫作天皇王。這便是契丹的太祖。

太祖長於武事又好文學曾命

必ず哭くが、父母の死んだ時子や孫は哭かない方が善いのである。

隋唐の時代、契丹は常に中國から牽制せられたが、其の後幾度か中國に降り幾度か之に反した。五代の時に到つて適々梁と唐とが兵を構へたので、黃河流域の人民は枕を安んずることが出來ず、漢人にして契丹に逃れる者が多數あつた。此の時契丹主耶律阿保機は勇武にして大略あり、之等の漢人に農業商賈等の職業を與へたから、漢人は遂に契丹に安住し、南方中國に歸らうとしないやうになつた。

契丹の舊制度では八部に各大人があり、其の中の一人を公推して王と爲し、旗鼓を建立し諸部に號令する權能を與へたが、但任期は三年で順次輪番に此の任に當る定であつた。阿保機が此の任にあつた時、其の妻述律氏の

人増減中國隸書之半制定契丹文數千字。並以三牲大禮祭祀孔子廟。國內文物制度一切摹倣中國。於是規模初備。

計策を用ひ、諸部の大人を殺し遂に自ら立つて王となり再交代するやうなことは無くなつた。中國後梁の末帝の時代に到り、牙を建て府を開き、百官を置き、宮室を修め、都を現今の熱河省臨潢に定め、遂に自ら皇帝と稱したが國人は天皇王と呼んだ。是が契丹の太祖である。太祖は武事にも長けてゐたが又文學を好んだ。曾て人に命じて中國隸書の字劃を増減して契丹文字數千字を制定し、猶三牲の大禮を以て孔子廟を祭祀した。國內の文物制度一切中國を摹倣した。是で國家としての規模が初めて備はつた。

註 (一)胡、北方塞外の地をいふ。轉じて其の住民を胡、或は胡人と稱し匈奴、回紇等凡て胡人である。東胡は東方の胡の意であらう。通古斯族で鮮卑、烏桓等もこれから分れたのである。

(二)奚國、大概現今の熱河省西南部の地である。

(三)營州、大概現今の熱河省南部の地である。

- (四) 西刺木倫河、遼河の上流蒙古域内を流れる部分の名稱。
- (五) 梁、五代の後梁。
- (六) 唐、五代の後唐。
- (七) 旗鼓を建立す、一個獨立の大將國家等の表象。
- (八) 牙、主將の居城。
- (九)、(十)、住所も持たない未開人を支配するに堂々たる覇府を開いたのである。
- (十一) 臨潢、西刺木倫河の北岸で現在の林西に當る。
- (十二) 皇帝と稱したのは西曆九一六年である。
- (十三) 三牲の大禮、牛羊豕三種のいけにへの供物を以て天子の社稷を祭るのが支那の禮である。其の大禮で孔子を祭つたといふのである。

十、遼的建國

契丹太祖既改革内政復討伐四鄰。即位初年便西向征服突厥吐谷渾黨項沙陀諸部。於是内蒙古西部皆入其勢力範圍。遂乘勝南攻中國。唐亡一年他曾帶了三

十 遼の建國

契丹の太祖は内政を改革した後、復四隣を討伐した。即位の初年西に向つて突厥、吐谷渾、黨項、沙陀の諸部を征服したから内蒙古西部は皆其の勢力範圍に入つた。遂に勝に乗じて南中國を攻めた。唐亡んで一年彼は三十

十萬大兵侵擾雲州。——今山西大同縣——晋王李克用與他連和約爲兄弟。但後來他又背盟結好於梁。因此李克用子所建立的後唐便和他結下怨仇。

唐末中原騷亂太祖常有南下之志。但恐渤海乘虛襲他的後路。於是旋師東擊渤海。這時渤海王誣譖在位國勢衰。太祖攻其西南境。拔扶餘城。進圍忽汗城。誣譖出降。渤海遂亡。太祖凱旋。班師竟於歸途中病死。

太祖死後次子德光立稱作太宗。尊述律后爲皇太后。國事大半歸她取決。她恐諸酋長跋扈難制。遂對諸酋長的妻說「我今寡居。你們不可不效我。」又集諸酋長說「你

萬の大兵で雲州——現今山西省大同縣——を侵した。晋王李克用は太祖と和を結び兄弟たるの約束をしたが、後彼は又盟約に背き梁と好を結んだ。此に因つて李克用の子の建てた後唐と彼とは互に怨仇の中となつた。

唐の末葉中原は大に亂れた。太祖は常に南下の志が有つたが、但渤海が虚に乗じて彼の後路を襲ふことを恐れ、軍を東へ向けて渤海を撃つた。這時渤海王誣譖位に在つて國勢は甚だ衰へてゐた。太祖は其の西南境を攻め扶餘城を抜き、進んで忽汗城を圍んだので誣譖は出で降り渤海は遂に亡びた。太祖は凱旋して師を班したが途中病死した。

太祖の死後次子德光が立つて太宗と稱せられたが述律后を尊んで皇太后となし、國政の大半は其の決裁に歸した。皇太后は諸酋長が跋扈して制し難くなることを憂ひ

們思念先帝否。酋長回答說「受先帝大恩豈得不思。她說「你們既不忘大恩宜往見先帝於地下」遂殺諸酋長殉葬。其中有狡黠不從者道「親近先帝莫如皇后能殉死臣等亦從。」她答道「我非不願見先帝於地下不過太子幼弱國家無主不便輕死。」說畢竟自斷一腕納入墓中。世人感嘆她的狡狠剛決取名叫作「斷腕皇后」。

太宗即位第十年會中國內亂石敬瑭請救兵於契丹以攻後唐。契丹和後唐本有宿怨太宗得石敬瑭書大喜自將五萬騎大敗唐兵於是作策書自解衣冠授與敬瑭令他作皇帝國號晉。敬瑭築壇受命割燕雲十六州與契丹以爲

遂に諸酋長の妻女に對して説いていつた。

「我れ今寡居す、汝等我に倣はざるべからず」と、又諸酋長を集めて説いていつた。

「汝等先帝を思念するや否や」

と、酋長等は答へていつた。

「先帝の大恩を受く、豈思はざるを得んや」

皇太后はいつた。

「汝等既に大恩を忘れず、宜しく往きて先帝に地下に見ゆべし」

と、遂に諸酋長を殺して殉葬してしまつた。諸酋長の中に狡黠で従はない者があつて皇太后にいつた。

「先帝に親近する者皇后に如く者莫し、皇后能く殉死すれば臣等亦従はん」

皇太后は答へていつた。

報酬並歲輸幣帛三十萬匹尊之爲「父皇帝」事之甚謹。於是現今河北山西中國北部一帶地皆入契丹的版圖了。

契丹太宗既助晉滅唐引兵北歸遂改國號爲大遼。將相百官皆仿中國制也參用中國入這便是遼人建國之始。

「我れ先帝に地下に見ゆるを願はざるにあらず、太子幼弱を過ぎず、國家主無し、輕々しく死するを便とせず」言ひ終るや否や刀を取つて自ら自身の片腕を切斷して先帝の墓中に納入した。世人は彼の殘忍狡佞と剛毅決斷に感嘆して、「斷腕皇后」と呼んだ。

太宗即位の第十年中國に内亂あるに際會した。石敬瑭なる者が救を契丹に請ひ後唐を攻めた。契丹と後唐は元から互に宿怨があつたから、太宗は石敬瑭の書面を得て大に喜び、自ら五萬騎を以て大に唐兵を破つた。是に於て辭令の書策を作り、自ら衣冠を解いて敬瑭に授與し、彼を皇帝たらしめて國を晉と號した。敬瑭は壇を築いて此の命を受け、燕雲十六州の地を割いて契丹に與へ以て報酬と爲し、猶毎年三十萬匹の幣帛を送り、太宗を尊んで「父皇帝」と爲し、之に事ふること謹嚴であつた。此

に於て現今の河北省、山西省等中國北部一帯の地は皆契丹の版圖に入つた。

契丹の太祖は既に晋を助けて唐を滅ぼした。そこで兵を引いて北に歸り、遂に國號を改めて大遼と爲し、文武百官皆中國の制に仿ひ、又中國人を任用して國政に參與せしめた。是が即ち遼人建國の始である。

註 (一) 突厥、前に註す。

(二) 吐谷渾、青海四川方面に居る。

(三) 黨項、吐谷渾の東に居る。

(四) 沙陀、外蒙古西南部に居る。

(五) 晋王李克用、唐末の勇將にして河東に據る。其の子存勗後梁を滅ぼして後唐を建てた。

(六) 梁、前に註する五代の後梁で朱全忠が建てしもの。

(七) 渤海國は國を有つこと二一五年で西曆九二六年亡ぶ。

(八) 太祖は歸途扶餘城で死んだ。

(九) 西曆九〇七年後梁の太祖朱全忠が唐室を篡奪して大梁(開封)で帝と稱したが

疆域は黄河沿岸の一邊土に過ぎず。これより天下は吳、楚、南漢、閩、燕、晋等に分裂した。中にも晋王李克用の子存勗は、舊怨を抱いて屢々朱全忠の建てた後梁を侵し、遂に全忠の子末帝を殺し、洛陽で帝位に上つて後唐の莊宗となつた。
(十) 石敬瑭は後唐から晋陽に圍まれ契丹の援助を求め、其の援によつて後唐を滅ぼし大梁で即位し後晋の高祖となつたのである。
(十一) 燕雲十六州、燕州は今の河北省順天府順義縣、當時の河北道に屬す。雲州は今の山西省大同府の治下で當時河東道に屬す。即ち雲燕十六州とは太行山の東西に亘る十六州の義である。
(十二) 晋、五代の後晋。
(十三) 唐、五代の後唐。

十一、遼人滅晋

石敬瑭既因遼得國所以奉遼恭謹但國人甚以爲耻。後敬瑭憂憤成疾而死。兄子重貴即位叫做出帝。告哀於遼。稱孫而不稱臣。遼主大怒派使來責。晋人對他説先

遼人晋を滅ぼす

十一 遼人晋を滅ぼす

石敬瑭は遼に因つて國を得たから、遼を奉ずること恭謹であつたが、但し國人は是を以て甚だ耻とした。後敬瑭は憂憤快惱遂に病と成つて死んだ。其の兄の子重貴が立つて即位し、出帝と呼ばれたが、哀を遼に告ぐるの書

帝は北朝所立所以稱臣奉表今上乃中國所立因不敢忘先帝所以降志北朝稱孫便足豈有稱臣之理。若翁怒則來戰孫有十萬橫磨劍足以相待。遼主得報南侵之意才決。

遼太宗大舉攻晋出帝派兵拒守大敗遼軍於白溝。此後晋主自謂天下無虞驕侈日甚輕信臣下之言遽議大舉北伐遼主遂又派大軍迎擊大戰於滹沱河晋將先降晋主繼降遼主遂克汴梁。乃遷晋出帝於黃龍府——即今吉林農安縣——封爲負義侯晋遂亡。遼太宗既滅晋入居晋宮即皇帝位於大梁。改服中國衣冠行入閣禮百官起居皆如舊制。他對晋

に「孫」と稱して「臣」と書かなかつたから、遼主は大に怒つて使を遣して其の禮を失するを責めしめた。晋人は其の使者に對していつた。

「先帝は是れ北朝の立つる所、臣と稱して表を奉つる所以なり。今上は是れ中國の立つる所、因つて敢て先帝を忘れず、志は北朝に降るが故に孫と稱すれば便ち足る。豈臣と稱するの理あらんや。若し翁怒つて來り戦はば、孫に十萬の橫磨劍あり、以て相待つに足らん」

遼主は此の報告を受けて固く南侵の意を決した。遼の太祖は大舉して晋を攻めた。出帝は兵を派して之を拒守し大に遼軍を白溝に破つた。此の後晋主は自ら天下虞るる者無しと言ふやうになり、驕奢は日日に甚しくなつて、輕々しく臣下の言を信じ、遽に議決して大舉北伐した。遼主も又大軍を派して之を迎撃し、大に滹沱河

群臣道自今以後不修甲兵不買戰馬輕賦稅省徭役天下從此太平了遼主初到中國尙知收拾民心後來自謂無虞於是大受四方貢獻縱令胡騎四出剽掠叫做打草穀從此民不聊生内外怨憤各地盜起太宗在汴僅三月所得之地皆不能守遂決意北歸卒於殺胡林——在今欒城縣西北。

に戦つたが、晋の將軍先づ降り、次で晋主も降つた。遼主は遂に汴梁に克ち、出帝を黃龍府——現今吉林省農安縣——に遷し、封じて負義侯と爲したから晋は遂に亡びた。

遼の太宗は既に晋を滅ぼし、入つて晋の宮室に居り、大梁で皇帝の位に即き、服を中國の衣冠に改め、朝廷の儀禮、百官の起居等皆晋の舊制に従つた。彼は新附の晋の群臣に對して道つた、

「自今以後、甲兵を修めず、戰馬を買はず、賦稅を輕くし、徭役を省く。天下此より太平ならん」。

遼主は中國に到つた當初は、尙民心を收拾することを知つてゐたが、後來氣驕つて自ら虞るる者無しといふやうになり、是に於て大に四方の貢獻を受け、縱令胡騎が四出し奪掠して各地を荒しても「打草穀」といひ捨てて

取締らうともせぬ。そこで人民は生活に聊んずるにことが出来ず、内外に怨憤の聲が湧き、盜賊が諸所に起つて騒がしくなつた。太宗は汴に在ること僅に三月、所得の地を皆守ることも出来ず、遂に意を決して北に歸つたが殺胡林——今欒城縣の西北に在り——で卒した。

註 (一)漢人は塞外漢北の民族を北狄又は胡人と稱し蔑視すること殊に甚しい。其の夷狄たる遼の封冊を受けて皇帝の位にあることに對して恥辱を感じるは當然で且つ其の度合は甚大である。

(二)表、臣下より君主に奉る書面。

(三)翁、尊稱。

(四)孫、卑稱。

(五)横磨劍、磨劍を横へること。即ち十萬の精兵が研ぎすました劍を横へて待つてゐるとの義である。

(六)白溝、今の河北省保定府雄縣北方の地名。

(七)滹陀河、山西省の代州に源を發し、河北省保定府の西南正定府の東北を流れて渤海灣に入る河。

(八)汴梁、河南省開封。

十二、遼復國號契丹

遼太宗死後適值中國宋室勃興中原復歸於統一東亞大陸成爲宋遼二大帝國對峙之局。其初宋太祖用趙普議和遼修好到了太平興國四年宋太宗打算恢復幽薊遂大舉伐遼。遼景宗遣耶律修格赴援大敗宋師於高粱河。從此以後兩國時常用兵宋師屢敗河北河東等地大受遼人的蹂躪。

十二 遼又國を契丹と號す

- (九)大梁、前に同じ。
- (十)貢獻、貢物や獻上品。即ち之等のものを食ひ受けたのである。
- (十一)胡騎四出、遼主に從つて大梁に來てゐる兵士共が四方各地に出て掠奪したのである。
- (十二)打草穀、穀物を收穫するといふ意味の言葉であるが、ここでは「何でも勝手に持つて行け」といふ語勢が含まれてゐるやうである。

遼の太宗の死後、適々宋室勃興して中原は復統一に歸したから、東亞大陸は宋、遼二大帝國對峙の局面を展開した。其の初宋の太宗は趙普の議を用ひて遼と好を修めたが、太平興國四年に到り、宋の太宗は幽、薊を恢復せんと企て大舉して遼を伐つた。遼の景宗は耶律修格を遣して援に赴かしめ、大に宋軍を高梁河に敗つた。此より以後兩國は常時兵を用ひたが、宋軍は屢河北、河東等の

遼主景宗卒子隆緒立叫作聖宗。聖宗年幼太后蕭氏攝政復改國號爲契丹。蕭氏聰慧過人明達治道有善必從所以群臣均欲爲她所用。這時宋太宗輕信邊臣的話欲乘契丹主少母后專政之際恢復燕雲十六州又遣諸將分道北伐。蕭氏習知軍政親偕聖宗將大兵南下攻破深邢德三州大掠而去。自是宋只圖自守不敢再議進取了。

原來高麗女真均通好於宋相約來攻契丹。這時宋師屢敗知宋不足有爲女真遂絕宋而屬契丹。高麗就抱了騎牆態度對於兩國同時通好。

地で敗れ大に遼人の蹂躪を受けた。

遼主景宗卒して子隆緒立ち聖宗と呼ばれたが、聖宗は年齒未だ幼弱であつたから、太后蕭氏が政を攝し復國號を改めて契丹と稱した。蕭氏は聰慧人に勝れ、明達治道善あれば必ず從ふといふ有様であつたから、群臣は皆太后の爲には粉骨碎身せんことを望んだ。この時宋の太宗は輕々しく邊臣の言を信じ、契丹主が幼少で母后が専ら政務に當つてゐる時機に乘じ燕、雲十六州を恢復せんとして、又諸將を遣はし道を分つて北伐した。蕭氏は軍事にも堪能であつたから、親ら聖宗と共に大兵を率ゐて南下し攻めて深、邢、徳の三州を破つて大掠奪を執行して去つた。是より後宋は唯自ら守ることのみを圖つて、敢て再び進攻の議を立てなかつた。

以前から高麗や女真是、均しく宋に好を通じ、相約し

て契丹に來攻したこともあるが、此の時宋軍が屢々破れたので、宋の頼むに足らざることを知り、女真是宋と絶ちて契丹に屬した。高麗は首鼠兩端を持するの態度で、契丹、宋の兩國に對し同様に好を通じてゐた。

註 (一) 中原、前註「中國」の項参照。

中原の地は政治、軍事其他の中心である、中原を掌握すれば支那全國に號令することが出来る。地の利を得るからである。「中原の鹿誰が手に歸する」。「中原還鹿を逐ふ、筆を投じて戎軒を事とす」などいはれて中原とは天下、國家、王位等のことにも使はれ、後世數人競争して或ものを得んとする時其の或ものの中原の鹿などといはれるやうになつた。

(二) 趙普、宋の功臣である。太祖太宗二代に仕へ右諫議大夫、河陽節度使、太子太保、武勝軍節度等の要職に歴任し、殊に對契丹との折衝には劃策するところが多かつた。

(三) 幽州、河北省順天府の地、薊州河北省薊州の地で北平より滿洲國熱河省境喜峰口に至る順路に當る。共に後晋が遼に與へた十六州の一である。

(四) 耶律修格、耶律休哥とも書く、契丹の宗室に生れた。遼主聖宗幼なるを以て母后蕭氏と共に政局に心を用ひ庶政大に宜しきを得た。又兵を用ふること神の如く、

宋人をして大に畏れしめた。

(五)高梁河、北平の西方にあり。

(六)邊臣、國境を守り夷狄を攻めて功ある臣下。

(七)深州、河北省正定府晋州附近の地。邢州、河北省順德府。德州、山東省濟南府

中陵縣の地。當時河北道に屬す。

(八)高麗、西曆九一七年王建が朝鮮に建てた王朝で西曆九三六年遂に半島を統一す

十三、宋與契丹講和

宋眞宗時契丹蕭后復借聖宗大舉南侵。朝廷震駭大臣都請遷都以避其鋒。惟宰相冠準力勸眞宗親征。眞宗到了澶州抵禦契丹軍稍却遣使來請和要求割讓關南地眞宗不許。乃用冠準的計策遣使到契丹營約定每年贈送銀十萬兩絹二十萬匹結爲兄弟之國南朝稱兄北朝稱弟。這是宋

十三 宋と契丹との講和

宋の眞宗在位の時、契丹の蕭后再聖宗と共に大舉南侵した。宋の朝廷震駭して諸大臣は都を他に遷して契丹の銳鋒を避けんことを請うたが、唯宰相の冠準が力説して眞宗の親征を勧めたので、眞宗は澶州に到つて抵禦すると契丹軍は稍後退し、使を遣はし來つて和を請ひ、關西の地を割讓せんことを要求したが、眞宗は之を許さず冠準の計策を用ひて、毎年銀十萬兩、絹二十萬匹を送つて

和契丹第一次的和約。

遼聖宗殂興宗繼立國富兵強戶口蕃息。這時適遇宋和西夏開釁構兵。興宗想乘中國之虛取關南十縣地聚兵燕薊一帶聲言南下特先遣使求地於宋。宋仁宗遣富弼爲回謝使至契丹。富弼見契丹主說「臣願兩國和好能以久遠」契丹主說「得地則和好可久」弼說北朝既以得地爲榮則南朝必以失地爲辱。兄弟之國那可一榮一辱呢。契丹主大受感悟命弼還宋議增歲幣仁宗允增銀幣各十萬並約定三事一、兩界塘淀毋得開展二、不得無故添屯軍馬三、不得容納逃亡。這是宋和契丹第二次的和約。

契丹に與へ、結んで兄弟の國と爲り、南朝(宋)は兄と稱し、北朝(契丹)は弟と稱する。かういふ約束をした。之が宋と契丹との第一次和協條約である。

遼(契丹)の聖宗死し興宗立つて位を繼いだが、國富み兵強く戶口繁殖した。この時適々宋と西夏が争を起して兵を構へた。興宗は中國(宋)の虚に乗じて關南十縣の地を取らんと欲し、兵を燕、薊一帶に聚めて南下を聲言し、特に先づ使を宋に遣はして地を求めしめた。宋の仁宗は富弼を回答の使として契丹に至らしめ、富弼は契丹主に見えていつた。

「臣は兩國和好して、能く久遠ならんことを願ふ」

契丹主はいつた。

「地を得れば和好久しかるべし。」

富弼はいつた。

「北朝既に地を得るを以て榮と爲せば、南朝は必ず地を失するを以て辱と爲さん 兄弟の國、那ぞ一榮一辱あるを可とせんや」

契丹主大に感悟する處があつて、富弼に命じて宗に還り議して歳幣を増さしめた。仁宗は銀幣各十萬を増すことを許し、猶三件の約束を取り交はした。

一、兩國の境界たる塘、淀の線を展開して進出することは出来ぬ。

二、故無く駐屯の軍馬を増加することは出来ぬ。

三、兩國は各々彼此の逃亡者を收容する事は出来ぬ。

是が宗と契丹との第二次和協條約である。

註

(一)冠準、華州の人で累官して眞宗の世宰相となつた。西曆一〇〇四年契丹の聖宗大舉南侵するや滿廷遷都に傾きしも、冠準は親征の議を固く執つて譲らず、帝を奉じて澶州に到り遼軍を退けた。和成つて後益々眞宗の信任を得た。

(二)澶州、河北省大名府開州の地。

(三)此の條約を澶淵の盟といふ。

(四)西夏、概して外蒙古の西南部に居り、帝を稱すること十二世、二三八年で元の爲に滅ぼされた。

(五)燕、薊、前に註す。

(六)富弼、河南の人篤學で大志があつた。屢々契丹に使用して折衝宜しきを得、後樞密使に擧げられ更に相となる。其の令名は夷狄にも聞えた。

十四、女眞の勃興

女眞は肅慎の轉音元魏時稱作勿吉隋時叫作靺鞨共分七部其中黑水部和粟末部最稱強盛粟末部酋長大祚榮曾於唐時創立渤海國黑水部居混同江之東長白山鴨綠江之源當渤海強盛時隸屬於渤海及渤海既亡遂附屬於契丹女眞人戀朴勇敢公推族中豪俠作酋長僻處契丹東北隅其部内無鐵嘗用高價購買隣

十四 女眞の勃興

女眞は肅慎の轉音である。元魏の時代は勿吉と稱せられ、隋時代は靺鞨と呼ばれた。七部に分れてゐて、其中黑水部と粟末部が最強盛といはれてゐた。粟末部の酋長大祚榮は曾て唐時に於て渤海國を創立した。黑水部は混同江の東、長白山の鴨綠江の源に居つて、渤海の強盛時は渤海に隸屬し、渤海既に亡びし後は契丹に附屬した。女眞人は愚直勇敢で、同族中の豪俠なる者を公推して酋

國之甲冑因而修造弓矢置備器械兵勢漸振。歸附的人也逐漸加多了。

女眞酋姓完顏氏。世奉契丹命爲女眞節度使。當契丹主天祚帝時。女眞酋長吳雅東部下阿蘇叛而奔契丹。吳雅東向契丹要求犯人契丹不許。於是始有異志。

吳雅東卒。阿骨打即位。姿貌雄偉。有大志。召集部下。建築城堡。修理器械。以備衝要。契丹主使使者前往詰責。阿骨打對使者說。若還阿蘇朝貢。如故不然。築城未已。

女眞部民向來無徭役。壯年人悉充兵卒。平時漁畋射獵。各聽其便。有變則下令諸部徵發。頃刻可集。大凡步兵騎兵的糧餉皆由自

長としてゐた。契丹の東北隅に僻在してゐて、其の部内に鐵を産せず、高價を拂つて隣國から甲冑を買つてゐたが、弓矢を修造したり、器械を備附けなどして兵勢次第に振ひ歸附の人民も漸を追うて多きを加へた。

女眞の酋長は姓を完顏といひ、世々契丹の命を奉じ女眞節度使と爲つてゐた。契丹主天祚帝の時、女眞の酋長吳雅東は其の部下阿蘇といふ者が、女眞に叛して契丹に奔つたから、契丹に向つて犯人阿蘇の引渡を要求したが契丹主が許さなかつたので、茲に始めて異志を抱くやうになつた。

吳雅東死し、阿骨打が即位したが姿貌雄偉で大志があつた。部下を招集して城堡を建築し、器械を修理して要所に備へたから、契丹主が使者を往かせて詰責すると、阿骨打は其の使者に對していつた。

備其部長叫作「貝勒」

「若し阿蘇を還さば故の如く朝貢せん、然らざれば築城を止めざるべし」

女眞部民には以前から徭役といふものが無い、其のかはりに壯年の人は悉く兵卒に充てた。平常は川に漁し、山に獵して各其の獲物の情況を知り合つてゐたから、一朝事ある場合諸部に下命して徵發せしむれば、即刻物資を集めることが出來て、大凡步兵、騎兵の糧餉は皆自ら備はつた。其の部長を「貝勒」といふのである。

註 (一)元魏、南北朝時の後魏。

(二)混同江松花江の舊名。

(三)節度使、支那で古昔一方面的兵を都督し、且つ其の諸政を監せしめし職名を節度使といつた。契丹は女眞部鎮撫の爲便宜完顏氏を其の節度使たらしめてゐたのである。

(四)貝勒、通古斯語バイロクは君主、主領、部長の義である。後清朝では此のバイロクは帝室、蒙古王族の爵號となつた。即ち爵號十二級の中第三級で郡王の下、貝子の上である。

十五、金の建國

契丹主知女真將叛乃發渾河北岸諸軍增防東北。阿骨打對他部下道契丹對我生疑我必先發制人不可爲人所乘於是下令徵兵共得二千五百人。會拉林水射殺契丹大將契丹軍大敗。死者十分之七八乃進迫寧江州填塹攻城不久城爲女真所破。

契丹主天祚帝聞寧江已陷乃發契丹奚軍三千和京中禁兵七千屯出河店。阿骨打率衆抵禦渡混同江和契丹軍相遇適大風暴起滿天塵埃女真乘風奮擊契丹軍大敗將士生還者僅十七人。契丹人嘗說女真兵若滿萬便不可

十五 金の建國

契丹主は女眞の將に叛せんとするを知り、乃ち渾河北岸の諸軍を發して東北の防備を増した。阿骨打は其の部下に對していつた。

「契丹は我に對して疑を生ず、我れ必ず先に發して人を制せん。人の乘ずる所となるべからず。」

と、是に於て令を下して兵を徵し二千五百人を得た。

契丹軍と拉林水に會戰して其の大將を射殺した。契丹軍は大敗して死する者が全軍の十分の七八である。女眞軍は猶進んで寧江州に迫り、塹を填めて城を攻め、久しからずして之を破つた。

契丹主天祚帝は寧江の己に陥つたことを聞き、契丹軍奚軍合せて三千と、京中の禁兵七千を發して出河店に屯

敵到了這時女真兵果然滿萬數了

阿骨打屢勝契丹軍將士勸進遂即皇帝位於愛新水上定都於今朝鮮會寧附近。他對部下說道契丹嘗以賓鐵爲號取其堅硬的意思但賓鐵雖堅終有變壞。惟金色白與完顏尙白適合且不變不壞於是建國號爲金。阿骨打改名旰旻就是金國第一代的太祖。這是公元一一一五年的事距今約有八百多年。

した。阿骨打は集を率ゐて抵禦し、混同江を渡つて契丹軍と遭遇した。適々大風俄に吹き起つて天空悉く塵埃に満ちた。女眞軍は風に乗じて奮撃突進した爲に、契丹軍は大敗して將士の生還者僅かに十七人であつた。契丹人は嘗て言つてゐた。

「女眞兵若し萬に満たば、便ち敵すべからざるなり。」

と、這の時女眞の兵は果して一萬以上に達してゐた。阿骨打は屢契丹軍に克ち、其の將士に勸められて愛新の水上で皇帝の位に即き、都を今の朝鮮の會寧附近に定め其の部下に對していつた。

「契丹は嘗て賓鐵を以て號と爲す、其の堅硬の意思を取るなり。但賓鐵は堅しと雖も終には變壞することあり唯金色は白く完顏の白を好むに適合し、且つ不變にして不壞なり。」

と、是に於て國を建て金と號した。阿骨打は名を改めて旻と呼んだ。是が金國第一代の太祖である。是は西曆一一一五年の出來事で今を去る約八百年の昔である。

註

(一) 拉林水、滿洲國交通部が軍事、産業、及對外的政策上早急に計畫起工し、今秋開通すべき拉賓鐵道(吉敦鐵道吉敦鐵道拉法驛より哈爾賓東郊に至る)の沿線の一都邑拉林南方の拉林河で松花江に注いでゐる。

(二) 寧江州、吉林省松花江の東岸。

(三) 奚軍、奚國は前に註す、當時契丹の驛糜州であつた。

(四) 出河店、珠赫店とも書く吉林省伯都訥(扶餘)の南方。

(五) 愛新の水、松花江の支流牡丹江の水上であらう。

(六) 會寧、我國の史家は會寧府は哈爾濱の東南方阿汗河附近にあつて其の遺跡を白城と呼ぶと主張して、本書記する處の朝鮮會寧とは位置に非常なる懸隔あり、又

宋の徽宗、欽宗の金人から幽閉された五國城は松花江畔三姓(依蘭)附近なりといはれる説と、一方五國城は朝鮮會寧の西方雲頭山城なりとの説がある。又金の

故國から朝鮮會寧地方への通路に當る間島の北方哈爾巴嶺の險道を徽宗皇帝一行が引かれていつたといふ傳説が残つてゐる。記して讀者の參考に供する。

(七) 賓鐵、賓鐵の字義は譯者は淺學でよく解らぬが、良質の鐵の意であらう。契丹

は鐵の堅いのにあやかつて號としたといふのである。

十六 宋金聯合夾攻契丹

這時中國宋徽宗在位很久國內無事遣宦官童貫等經略西方稍有成功貫遂志得意滿以恢復幽燕爲已任宰相蔡京等附和其議徽宗遂遣使使金約定夾攻契丹其條件如下。

- 一、金取中京太定府兵自平地松林趨古北口。宋取燕京折津府兵自白溝夾攻彼此兵不得過關。

二、事定後以太行山前後十七州歸宋。

三、歲幣之數同於契丹。

於是金主出兵攻克契丹的中

宋金聯合して契丹を夾攻す……

十六 宋金聯合して契丹を夾攻す

這の時中國は宋の徽宗位に在ること頗る久しく、國內は無事であつたが、宦官の童貫等を遣して西方諸國を經略して稍成功を収めたので童貫は得意滿面、幽、燕を恢復するは己の任なりと自負するやうになつた。宰相蔡京等も童貫の議に附和したから、徽宗は遂に使を金に遣はして契丹夾擊の約を定めた、其の條件は次の通りである。

- 一、金は中京太定府を取り、其の兵は平地松林より古北口に進むべし。

宋は燕京折津府を取り、其の兵は白溝より夾擊す。

彼此の兵は關を超ゆることを得ず。

二、事定つて後、太行山の前後十七州は宋に歸す。

京大定府並西京大同府。宋遣童貫蔡攸出兵相應。竟爲契丹所敗。再舉又敗。金主遂自塞北三路進兵。契丹人以勁兵守居庸。金兵趨關下。厓石自崩。戍卒多壓死。契丹人不戰而潰。金主直取燕京。契丹之五京六府悉爲金有。

至是金主責宋出兵失期。遂背前約。祇與宋燕京及其他六州地。宋以原約有山前山後十七州。遣使往爭。並求平營。欒三州。金主不許。並對宋使說。若宋必欲索平營等州。則並燕京亦不能與。且燕京爲金的兵力所取。其租稅仍當歸金。宋使力爭不可。乃許金以歲幣四十萬。外加燕京代稅錢百萬緡。並置榷場互市。金人大喜。始以燕

三、歲幣の數は契丹に同じ。

是に於て金主は兵を出して契丹の中京大定府並に、西京大同府を攻めて克つた。宋は童貫、蔡攸を遣はし兵を出して相應じたが、契丹の爲に敗れ、再舉して又敗れた。金主は遂に塞北三路から兵を進めると、契丹人は勁兵を以て居庸關を守り、金兵は關下に迫つた。此の時厓石自然に崩壞して戍卒の多くは壓死してしまつたから契丹人は戦はずして潰えた。金主は直ちに燕京を取り、契丹の五京六府悉く金の有に歸した。

是に至つて金主は宋の出兵の期を失するを責め、遂に盟約に背き、宋には唯燕京及其他六州の地のみを與へることとした。宋は前約の山前山後十七州と猶平、營、欒三州をも求めんとして使を遣はして争つたが、金主は之を許さずして宋の使に對していつた。

京及六州之地來歸。但京城裏的金帛子女早爲金人所掠。宋人所得不過七座空城。

金人既定燕京。契丹主天祚帝走奔西夏。後又至應州。被金將所獲。契丹遂亡。於是關南關北皆入於金。金國勢強大。開始南向侵犯中國。

「若し宋が必ず平、欒等の州を求めんとすれば燕京も亦與ふる能はず、且つ燕京は金の兵力の取る所なり。其の租稅も仍當に金に歸すべし」

宋使力爭したが其の主張を通すことが出來ず、金に既定の歲幣の外四十萬匹、燕京の代稅錢百萬緡を與へ、猶貿易場を置き互市を許したから、金人大に喜び燕京及六州の地を宋に與へた。但し京城内の金帛子女は夙に金人の掠むる所となつて、宋人の得る所は唯七座の空城に過ぎなかつた。

金人は既に燕京を定めたから、契丹の天祚帝は西夏に奔つたが、後又應州に至り金將の爲に捕はれ契丹は遂に亡びた。是に於て關南關北皆金に入り、其の國勢強大、直ちに鋒を南に向けて中國侵犯を開始するやうになつた。

註 (一) 宦官、支那や朝鮮で宮中の奥むきに仕へる男子である。多くは或る特種の生理

機能缺如者を採用する。故に容貌、音聲、性質等も婦人に近い。彼等は時に跋扈して専恣横暴、宮中より府中及び遂に國政を誤らしむることが多い。支那の歷朝で宦官の禍を受けぬものは殆ど無い。

(二)童貫、徽宗の内侍で在つたが邊軍に従事するやうになつた。性行表裏あり後罪せられて南雄に追斬せられた。

(三)蔡京、徽宗の時宰相となつた。内政外交多く失敗し、欽宗の時儋州に流された。

(四)中京大定府、後に註す。

(五)平地松林、位置不明なり、但這般の日滿軍熱河討伐の行進路を見る時は、當時金軍の進路の如きも、概して同一であらう。

(六)古北口、虎北口とも書く。河北省密雲縣の東北熱河省境にあり長城の重要關門で兩崖壁立して下は深澗、僅かに一車を通ずるの路があつて險絶の要所である。

皇軍は熱河討伐に際し空陸呼應して此の難關を突破した。歴史を顧みる時油然として感慨の湧かない者があらうか。

(七)燕京折津府、後に註す。

(八)白溝、前に註す。

(九)關、此の關は古北口、松亭關、平州、榆關を繋ぐ一線で大體長城の線である

(十)歲幣の數、從來宋より契丹に與へてゐた數を契丹滅亡後は其のまま金に贈るといふのである。

(十二)居庸關、河北省順天府昌平州にあり、兩山夾峙して懸崖峭壁の絶險であるから天下九塞の一に數へられてゐた。

(十三)五京、(1)上京臨潢(熱河省林西)、(2)東京遼陽(奉天省遼陽)、(3)中京大定(熱河省喀喇沁王府附近)、南京燕京(今の北平)、西京大同(山西省大同)、

(十四)平州、河北省永平府。

(十五)營州、熱河省の一部。

(十六)樂州、河北省道化州の南沙峪の地。

(十七)天祚帝は金の策動により西夏に留まることを得ず黨項に投ぜんとして應州に至りし時金將婁室に捕へられた。

十七、金人逼宋

宋金締盟未到兩月而金將忽以平州降宋。這時金太祖卒弟吳乞買嗣位就是金太宗。太宗派粘沒喝韓離不等率大軍南下並遣使詰宋渝盟納叛之罪要求割讓

十七 金人宋に逼る

宋、金盟約を結んで未だ二月に到らない時、金の一將忽然として豹變し、平州を以て宋に降つた。此の時金の太祖死し、其の弟吳乞買位を嗣いだ金の太宗が是である。太宗は粘沒喝、韓離不等を派し大軍を率ゐて南下し、使

河北河東兩道以大河爲界然後罷兵。

金兵日逼宋徽宗不知所爲不得已下詔罪已。禪位太子而自稱道君皇帝。太子卽位就是欽宗。金將粘沒喝連陷朔代兩州進攻太原。翰離不自燕山南下將渡河宋軍在河南者竟無一人拒敵。金兵直逼汴京這是金兵初次犯宋。欽宗召群臣計議李邦彥主和李綱主戰欽宗依違兩可毫無定見。後卒割地償金求和於金金兵始退。後宋廷復思背約結納契丹亡命徒以抗金。金主大怒再命粘沒喝翰離不等分道南寇。翰離不自直定趨汴僅二十日至京城下粘沒喝自河陽來會屯於青城。這是

を宋に遣はし盟約に背いて叛人を納れた罪を詰り、河北河東の兩道を割譲し大河を以て界と爲し然る後兵を罷めようと要求した。

金兵は日に逼まるが宋の徽宗は狼狽して爲す所を知らず、止むを得ず詔を下して己を罪し、位を太子に譲つて自ら道君皇帝と稱した。太子は卽位した。欽宗が是である。金の將軍粘沒喝は朔、代の兩州を連續して陥れ、進んで太原を攻めた。翰離は燕山より南下し、將に黄河を渡らうとするに、河南に在る宋軍は遂に一人として拒守する者が無い。金兵は直ちに進んで汴京に逼つた。是が金兵初次の宋侵犯である。欽宗は群臣を召して御前會議を開いた。李邦彥は和を主張し、李綱は戰を主張した。欽宗は無定見で此の兩説の採否に迷うたが、後遂に地を割き、金を償うて金主に和を求めたから、金兵は始

金兵二次犯宋。此時中國勤王之

師竟無一人至者京師遂破。欽宗親赴青城奉表請降。二帥見帝告以金主欲別立一人以主中國。遂以寶冊封宋宰相張邦昌爲中國皇帝。同時廢徽宗欽宗爲庶人。強令携眷北行居於五國城北宋遂亡。

めて退いた。

後宋廷は復約を破らんことを企て、契丹亡命の徒と結託し金に對して敵意を示した。金主大に怒つて再粘沒喝翰離不等に命じて南寇せしめた。翰離は直定より汴に趨くに僅かに二十日で京城下に至り、粘沒喝は河陽より來り會し青城に屯した。是が金兵の二次宋侵犯である。此の時中國勤王之師一人として難に赴く者無く京師は遂に破れた。欽宗は親しく青城に赴いて表を奉つて降を請うた。金の二將は欽宗に見えて、金主は別に一人を立てて中國の主たらしむる旨を告げ、遂に寶冊を以て宋の宰相張邦昌を封じて中國皇帝と爲し、同時に徽宗、欽宗を廢して庶人に下し、強ひて眷族を携へて北行せしめ、五國城に居らしめた。これで北宋は亡びた。

註 (一)平州の守將張毅平州を預かつたまま宋に降つた。平州は河北省永州府の地。

- (二)大河、黄河をいふ。
- (三)朔州、山西省大同府に属す。
- (四)代州、山西省太原府に属す。
- (五)燕山、唐に幽州と稱し、契丹は之を燕京と稱し、宋は改めて燕山府とした。今の北平の地。
- (六)李邦彦、欽宗の相。
- (七)李綱、滿延悉く柔弱の宋朝唯一の硬骨愛國者である。高宗立つに及び第一に擧げられて相となつた。
- (八)直定、眞定の誤植か、河北省正定府の地。
- (九)汴、前にも註した。宋の首都今の河南省開封。
- (十)河陽、山西省大原の地？
- (十一)青城、汴京の封邱門外の北郊。
- (十二)張邦昌、宋の宰相である。汴京陥り、徽、欽二帝強いて北行せしめられし後金人に封ぜられて皇帝となり、國號を楚と號す。邦昌順逆の道を悟り、宋の孟太后を迎へて簾を垂れて政を聽かしめ、退いて臣下の列に居つた。位を僭すること三十三日、高宗立つに及び潭州に貶せられ遂に死を賜はつた。
- (十三)五國城、前に註す。
- (十四)北宋の亡びたのは西歴一二二七年である。後欽宗の弟康王南京（河南省歸德）

に即位し高宗と稱す。金の銳鋒を避けて揚州に遷り、更に都を浙江省臨安（杭州府）に定めた。之を宋室の南渡といひ、之より以後を南宋といふ。

十八 金の文化

十八、金の文化
 金人既得契丹全土又得宋の北部成爲東亞大國。遂於境內建立五京就是上京會寧府中京大定府東京遼陽府西京大同府南京大興府。女眞舊無文字金太祖始命人仿漢字楷書因契丹字制度創造女眞字。世宗的時候創設國語學校用女眞文翻譯論語孟子五經唐書等書。

女眞文字雖經創製但流行範圍甚小任用官吏純以漢文爲標準。金的君主亦多從事於漢學提

金人は既に契丹の全土を得、又宋の北部を得たから堂たる東亞の大國と爲つた。そこで領域内に五京を建設した。上京會寧府、中京大定府、東京遼陽府、西京大同府、南京大興府が是である。女眞には元文字が無かつたから、金の太祖始めて人に命じて漢字の楷書に仿ひ、契丹文字の制度を參酌して女眞文字を創造した。世宗の時代には國語學校を創設し、女眞文字を用ひて論語、孟子五經、唐書等の書籍を翻譯した。

女眞文字は創製せられたが、但し普及の範圍は甚だ陝小で、官吏を任用するにも偏に漢文を以て標準とした。

倡甚力。現今所存金人的著作例如全金詩和金文最等其文字非常光華流麗實足以代表金代漢文學的發達。

金的領土都是契丹和宋的故土。民間流行的貨幣盡屬契丹和宋的銅錢其後金人收買銅器並開採銅山自鑄大銅錢以一當百民間亦有私鑄銅錢和濫發錢票的均未加嚴禁以致經濟大受影響。

中國唐時盛行佛教宋時道教漸興金人受中國的影響佛道二教風行一時。遼陽的白塔相傳是金代的遺跡。

金の君主も亦多く漢學に従事して提唱最も力めた。現今存する所の金人著作の例として全金詩と金文最の如きは其の文章非常に光華流麗、實に金代漢文學發達の代表たるに足るものである。

金の領土は都て契丹と宋の故土であるから、民間流通の貨幣も皆契丹と宋の銅錢であつたが、其の後金人は銅器を購求し銅山を開採して自ら大型の銅錢を鑄造し、其の大銅錢一を以て舊來の銅錢百に當てた。民間に又銅錢を私鑄する者があつたことと、紙幣の濫發を嚴重に取締らなかつたことから、經濟界は大なる影響を受けた。

中國の唐時代は佛教が盛んに行はれ、宋時代から道教が漸次興つた。金人は中國の影響を受けて、佛道の二教が一時に流行した。遼陽の白塔は金代の遺跡であると傳へられてゐる。

- (一)金の五京、(1)上京會寧府(朝鮮會寧か吉林省阿什河か前註の如き疑義あり。(2)中京大定府(熱河省喀喇沁王府附近)(3)東京遼陽府(奉天省遼陽)(4)西京大興府(山西省大同)(5)南京大興府(河北省北平)。首都は會寧府であつたが、後大興府(北平)に遷り汴京(開封)にも定鼎したことがある。
- (二)金人漢文學の一例。

商士談

簌簌天花落不_レ休 寒梅疎竹共風流、

江山一色三千里、 酒力消時正倚_レ樓。

廸古乃

萬里車書合_ニ混同、 江南豈有_ニ別提封、

移_レ兵百萬西湖上 立_レ馬吳山第一峰。

前者は詩人高士談が雪に對する感懷で、後者は金國第四代の主廸古乃が鬱勃たる宋討伐の宿望の表現であつて、南宋たるもの正に顔色なしと評したい詩である。現在我國で有名な某政治家は好んで此の詩の結句「立馬吳山第一峰」を到る處で揮毫してゐる。

(三)道教、老子を祖とする支那の一種の教義、慾を制し心を養ふを法とする。秦、漢の頃神仙、方士の徒によつて養生を講じ、長壽を求め、祈禱、呪咀などを行ふものと變じた。漢の景帝は老子の書を道德教と名づけ、武帝は其の爲に寺を建て

た。唐代になつて皇室と老子は同姓の李なるを以て高宗は之を尊びて玄元皇帝と稱し、これを祀れる所を觀と呼び、その教を奉ずる人を道士といふやうになつた。

滿洲國史教本

第二册

一、蒙古的勃興

從來蒙古民族的根據地在今貝加爾湖以南氣候寒冷空氣乾燥多生樹木不產五穀土人體魄強健長於騎射對於中國本部和亞洲南部諸國常有侵略之意。唐時的蒙古居士謝圖汗部斡兒汗河流域宋時的蒙古移古不兒罕山——此山爲斡難河怯綠連河的發源地。——蒙古人在此附近經營遊牧生活世世奉貢於遼金而受他們的支配。

當中國南宋時蒙古酋長也速該併合諸部勢力漸強也速該生

蒙古の勃興

滿洲國史教本 第二册

一 蒙古の勃興

從來蒙古民族の根據地は、今の貝加爾湖以南であつて氣候寒冷、空氣乾燥、多く樹木を生ずるも五穀を産せず、土人は體力氣力共に強健で騎射に長け、中國本部和亞細亞南部の諸國に對して、常に侵略の意をもつてゐた。唐時代の蒙古は土謝圖汗部の斡兒汗河流域に居住し、宋時代の蒙古は不兒罕山——此の山は斡難河、怯綠連河の發源地である。——に移住した。蒙古人は此の附近に在つて遊牧生活を經營し、世々遼、金に奉貢して彼等の支配を受けた。

中國南宋時代に當り、蒙古の酋長也速該が諸部を併合して、勢力漸次強大となつた。也速該一子を生んで鐵木

六五

子名叫鐵木眞就是後來以兵力橫行歐亞的大偉人。當也速該被人所害時鐵木眞年方十三歲由其母月倫一手撫養。這時部下諸族因主幼叛去四鄰強敵又想壓迫。於是他藏身深林裏甚至九日不食不飲。下山時曾被敵人所獲身首加以重鐐夜中竟打倒守監人而遠逃至河邊恐敵人來追遂沈身於水中。出水以後又曾隱身於一老人的牛車覆以羊皮雖被敵槍刺傷脛部他也未動遂免於難。

鐵木眞漸次長成勇敢有爲把部衆分做十三翼和族人泰赤烏大戰。泰赤烏地廣人衆而無規律鐵木眞厚結他的部下使他們附

眞と名づけたが、此の鐵木眞こそ後日兵力を以て歐亞の大陸を橫行した大偉人である。也速該が人に害せられた時は鐵木眞はまだ十三歳であつたから、其の母月倫氏の手一つで撫養せられた。部下の諸族は首領が幼弱なるが故に叛し去り、四隣の強敵が壓迫を加へんとした。是に於て彼は身を深林中に藏し、飲まず食はずで九日を過した。下山の時又敵人の爲に捕へられ、身に重鐐を加へられた。夜中監守人を打倒して逃げ去ると敵人は追跡して來た。彼は水中に身を投じて敵を行り過し、水を出た後今度は一老人の牛車に隠れて羊皮で身を覆うた。敵が試みに突いた槍で脛部を刺傷せられたが、彼は微動もせなかつたから遂に發見せられず、難を免れた。

鐵木眞は漸次成長して、勇敢で有爲の人物となり、部衆を分つて十三翼と爲し、族人泰赤烏と大に戦つた。泰

已所以泰赤烏大敗。不久鐵木眞又遭乃蠻部的侵略乃大會屬部拒戰擊殺其部長。因此蒙古諸部悉降鐵木眞至是聲勢浩大大會諸部長於斡難河源建白旗九游自號曰成吉思汗就是蒙古第一代太祖。

這時正當宋寧宗開禧二年金章宗泰和六年距今約七百餘年。

赤烏は地廣く人は多かつたが、紀律は無かつた。鐵木眞は厚く彼の部下と結んで、彼等をして自己に附かしめたので泰赤烏は大敗した。久しからずして鐵木眞は又乃蠻部の侵略に遭うたから大に屬部を集めて拒ぎ戦ひ、其の部長を擊殺した。此に因つて蒙古の諸部は悉く鐵木眞に降り、聲名非常に高くなつた。鐵木眞は大に諸部長を斡難河の源に會合せしめ、白旗九旒を建て自ら號して「成吉思汗」といつた。是が蒙古第一代の太祖である。この時は正に宋の寧宗開禧二年、金の章宗泰和六年に當り、今を去ること約七百餘年である。

註 (一) 斡難河、今のシルカ河。

(二) 怯綠連河、今のアルゲン河。

(三) 重鐐、鐐子ともいふ。刑具であつて枷、桎梏の如きものである。

(四) 泰赤烏、バイカル湖畔の強族。

(五) 乃蠻部、アルタイ山の北方に居つた。

(六)汗、君長の義。我國語のカミと同語原なりといふ。成吉思汗とは強盛なる君長の義であらう。

(七)西歴一二〇六年。

二、成吉思汗の武功

成吉思汗從會合各部於斡難河建國稱汗以後。就首先舉兵伐西夏其主出降他又舉兵伐乃蠻降畏吾兒部。於是漠北和阿爾泰山附近一帶之地悉歸蒙古。這時金室承平已久武備廢弛。成吉思汗乘機進攻勢如破竹凡破九十餘郡盡取河北山東地金勢遂大衰。

西方有西遼和花刺子模兩大國會虐殺蒙古商百餘人。成吉思汗與師問罪先使哲伯滅西遼乃

二一 成吉思汗の武功

成吉思汗は各部を斡難河に會合せしめ、建國して汗を稱してより後、兵を擧げて先づ西夏を伐ち其の主を降したが、又兵を擧げて乃蠻を伐ち、畏吾兒部を降した。是に於て漠北と阿爾泰山附近一帶の地は悉く蒙古に歸した。這時金室は承平久しく武備は弛んでゐた。成吉思汗は此の機に乗じて進攻し、其の勢は破竹の如く、凡そ九十餘郡を破り、悉く河北、山東の地を取つたから、金の勢は遂に大に衰へた。

西方に西遼と花刺子模の兩大國があつて、花刺子模は曾て蒙古の商賈百餘人を虐殺したことがあつたから、成

自領大軍西向滅花刺子模。花刺子模遺衆遠奔印度成吉思汗復入印度追擊屠殺一百六十餘萬人然後班師。

這時哲伯和速不臺兩勇將既破花刺子模復由裏海南經高加索山攻欽察部破俄羅斯俄人到歐洲各國乞援歐洲諸侯合兵會攻又爲蒙古軍所敗全歐人民無不震駭二將更轉東北陷不里阿爾及聞成吉思汗東歸乃大掠俄羅斯東南部而還。這是我亞洲黃種人兵力深入歐洲的第一次。

成吉思汗凱旋班師復順道滅西夏謀再伐金至六盤山患病而卒年七十三歲。太祖深沈有大略用兵如神且長於政治功業的偉

吉思汗は問罪の師を興し、先づ哲伯をして西遼を滅ぼさしめ、自ら大軍を率ゐて西に向ひ、花刺子模を滅ぼした。其の遺衆は遠く印度に逃げたから、成吉思汗は之を追擊して印度に入り、一百六十餘萬人を屠殺して、然る後師を班した。

這時の哲伯と速不臺の兩勇將は、既に花刺子模を破り又裏海より南高架索山を経て欽察部を攻め、俄羅斯を破つた。俄人が歐洲に至つて各國に援を乞うたから、歐洲諸侯は兵を合して來り攻めたが又蒙古軍の爲に破られた。全歐の人民にして震駭せざるは無い。二將は更に東北に轉じて不里阿爾を陥れた時、成吉思汗の東歸せるを聞き俄羅斯の東南部を大に掠奪して還つた。是が我が亞細亞の黄色人種が兵力を以て深く歐洲に入つたことの第一次である。

大震燦中外古今無匹真可算做一位空前絶後的大英傑了。

成吉思汗は凱旋して師を班す道すがら、復西夏を滅ぼし、金を伐たんことを謀つたが、六盤山に至つて病の爲に卒した。時に年七十三歳。太祖は深沈にして大略あり、兵を用ふること神の如く、且つ政治にも長け、功業偉大にして中外に雷名を轟かした。真に古今無比、第一位に推すべく、空前絶後の大英傑である。

註 (一) 西夏、前に註す。

(二) 乃蠻、前に註す。

(三) 畏吾兒部、現今の新彊省の一地方に居つた。

(四) 漠北、萬里の長城以北を塞外又は漠北といふ。

(五) 西遼、遼の金に滅ばされた時皇族耶律大石といふ者、其の遺衆と共に西に走り中央亞細亞に至りサマルカンドを取り、今の露領セミレチエンスク附近に都を定め西遼と號してゐた。

(六) 花刺子模、裏海東岸の地方に國を建ててゐた。

(七) 欽察部、およそ黒海、高架索山脈、裏海、アラル海を繋いだ一線を南境とし北は俄羅斯に至る地區。

(八) 俄羅斯、ロシヤ。

(九) 俄人、ロシヤ人。

(十) 不里阿爾、ウラル山麓でシベリヤ鐵道の沿線附近。

(十一) 六盤山、甘肅省にあり、最高峯青涼山は海拔七〇〇〇フィート其の最高頂に名實共に拔山蓋世の英雄成吉思汗の墳墓がある。

三 蒙古宋と約して金を滅ぼす

成吉思汗は危篤に陥つた時、遺言して諸將に告げて言つた。

「金の精兵は皆潼關に在り、南は連山に據り北は大河を限る。以て遽に破り難し、道を宋に假るに若かず、宋と金とは世々仇なり。必ず能く我れに許さん、此の如くすれば兵を唐、鄧に下して直ちに大梁を擣くに、之を破ること疑無かるべし。」

成吉思汗死するの後、子の窩闊臺が立つた。是が太宗

三、蒙古約宋滅金

成吉思汗彌留之時曾有遺囑告諸將說「金精兵皆在潼關南據連山北限大河難以遽破不若假道於宋宋金世仇必能許我如此則下兵唐鄧直擣大梁破之無疑」他死了之後子窩闊臺立就是太宗。太宗遵太祖取金遣策遣使求假道於宋。宋室召集群臣會議皆謂可乘勢滅金以雪仇耻遂許蒙古助兵攻金。蒙古許事成以後河

南地歸宋。

宋理宗紹定六年遣大將孟珙率師會蒙古伐金。這時金主守緒使人來宋乞糧且說「蒙古滅國四十已及西夏夏亡及我我亡必及於宋唇亡齒寒自然之勢。若與我連合所以爲我者正是爲彼」使者至宋議拒而不許。

金主先棄汴京奔河北復走歸德未幾又自歸德奔蔡州但將士憤怒還軍一戰蒙古兵奔潰不久蒙古帥塔察爾再領數百騎駐蔡州城東金兵攻破之。自是蒙古軍不復敢攻城但築長圍以坐困金人。

這時宋孟珙及副將江海率師二萬運米三十萬石赴蒙古之約

である。太宗は太祖の金を取るの遺策に遵つて、使を遣はして宋に道を求めしめた。宋室では群臣を召集して會議を開いたが、衆口一致して、天下の大勢に乗じて金を滅ぼし、歴代の仇恥を雪ぐべきであるといふことに決定し、遂に蒙古に助勢して金を攻むることに同意したから蒙古は金を滅ぼした後、河南の地を宋に與へることとした。

宋の理宗紹定六年、大將孟珙を遣し、師を率ゐて蒙古軍と會し金を伐つことになつた。此の時金主守緒は使を宋に遣はして糧食を乞ひ、且つ説いていつた。

「蒙古は國を滅ぼすこと四十、已に西夏に及び、夏亡んで我に及ぶ。我亡ぶれば必ず宋に及ばん。唇亡んで齒寒きは自然の勢なり。宋若し我と連合せば、我が爲となり、又正に宋の爲とならん」。

塔察爾大喜益修攻具。孟珙自南

門攻入蔡州編樹宋幟俄頃四面鼓譟聲震天地蒙古兵一躍而入。金帥胡沙虎以精兵一千巷戰不能抵禦。金主知事不可爲遂自縊。胡沙虎亦投水而死金亡。

宋の朝議は此の金の提言を拒んで納れなかつた。

金主は先づ汴京を棄てて河北に奔つたが、復歸德に走り、未だ幾くならずして歸德から蔡州に奔つた。但し金の將士は奮怒し軍を還して一戦すれば、蒙古兵は潰えて奔つた。久しからずして蒙古の將塔察爾が、再數百騎を率ゐて蔡州城の東に駐まつたが、金兵は之をも攻破つた。是より蒙古軍は敢えて進撃せず。唯長圍を築いて坐ら金人を困めた。

這の時宋の孟珙、及び副將江海が兵二萬を率ゐ、糧米三十萬石を運んで曩に蒙古と結びし約を履んだ。蒙將塔察爾大に喜び、益々攻具を修めて進撃の機を狙つた。孟珙は南門より攻めて蔡州に入つて宋の旗幟を編ね樹てると、時を移さず蒙古軍は俄然として四面鼓譟、其の聲天地を震はし、躍進して入城した。金將胡沙虎一千の精

兵を以て抵禦し猛烈なる市街戦を演出したが、金軍は遂に敗れた。金主は事の爲すべからざるを知つて自ら縊死し、胡沙虎も亦自ら投じて水死し、金は亡びた。

註 (一) 潼關、陝西省華陰縣の東方にあり、陝西、山西の省境を一直線に南流し來れる黄河の流向を、更に東に轉ぜしむるものは潼關の險絶である。關門の守備は古來歷朝の最も力を盡した處である。

(二) 唐、鄧、共に今の河南省南陽府に屬す。金の京大梁を圍るに便宜の地である。

(三) 大梁、前に註す。

(四) 河南の地、現在の河南省といふ意にあらざりて當時金の屬地は、淮水、漢水までに及んでゐたから、金が亡びた後は、黄河以南の地を宋に與へようといつたのである。

(五) 守緒、哀宗。

(六) 汴京、前にも註する如く汴京は大梁ともいひ現在河南省開封府である。金の首都は燕京即ち現在の北平であつたが、蒙古に近きが故に當時汴京に遷つてゐた。

(七) 歸德、河南省歸德府。

(八) 蔡州、河南省汝寧府。

(九) 金の亡びしは西曆一二三四年。

四、元世祖の開國

蒙古自太祖勃興以後再享大名的是第五世忽必烈。他重用金の遣臣姚樞待以上賓的禮姚樞陳說治國平天下之大經大法分做八目就是修身力學尊賢親敬天愛民好賢遠佞。同時又有許衡亦以儒學事忽必烈和姚樞同心詡贊紀綱大定。

蒙古自太祖以來三世五朝定都和林。一向以漠北爲根本。而看做中國爲附庸。到了忽必烈即位遷都於燕——現今的北平——始純然做了中國的君主。同時他建國號爲元改元中統史稱做元世祖。從此以後元勢逐漸南逼不

四 元の世祖の開國

蒙古は太祖勃興より以後、再雷名を轟かせたのは第五世忽必烈である。彼は重く金の遣臣姚樞を用ひ、待つに賓客の禮を以てした。姚樞は治國平天下の大經大法を説いて八目とした。即ち修身、力學、尊賢、親親、敬天、愛民、好賢、遠佞が是である。同時に又許衡なる者があつて儒學を以て忽必烈に仕へ、姚樞と同心して翼賛したから、國家の綱紀が大に定まつた。

蒙古は太祖以來三世五朝、都を和林に定め専ら漠北の地を以て根本とし、中國を附庸と見做してゐた。忽必烈の即位するに到り、都を燕——現今の北平——に遷したから、始めて純然たる中國の君主となつた。同時に彼は國を建てて元と號し、中統と改元した。史家は彼を元の

到五年竟把南宋恭帝捕去。宋張世傑陸秀夫等立端宗。越三年端宗在礪州憂死。明年陸秀夫負宋帝昺蹈海。於是元統一中國了。

世祖既兼併中國。又想耀兵海外。以成大一統之業。先以兵力扶助高麗王歸國。嗣位高麗。遂舉國內屬。因高麗之役。遂又大發蒙漠兵十萬。往征日本。航海至平壺島。遇颶風。爲日人所敗。生還者只有三人。此後世祖令沿海各處大造海船。招募水手。積貯糧餉。以備再舉。圖日。但終未能達其志願。

世祖好大喜功。根於天性。日本之役。既告失敗。尙未逾年。又有安南之役。安南既服。於是降緬甸。臣占城。破爪哇。南洋諸國相繼入貢。

到了此時。世祖春秋已高。雄心漸息。不像以前的窮兵黷武了。

世祖といふ。此より以後元の勢漸を逐うて逼り、五年に到らずして竟に南宋の恭帝を捕へ去つた。宋の張世傑、陸秀夫等は端宗を立てたが、三年の後端宗は礪州で憂死し、明くる年陸秀夫は宋帝昺を負うて海に投じた。是に於て元は遂に中國を統一した。

世祖は既に中國を兼併したが、又兵を海外に耀かし以て一大統一の事業を成さんことを想ひ、先づ兵力を以て高麗王を扶助し、歸國して位を嗣がしめたから、高麗は遂に國を舉げて内屬した。高麗の役に因り遂に又大に蒙漢の兵十萬を發して日本を征めんとし、海を航して平壺島に着いたが、颶風に遇ひ日人の敗る所と爲つて生還者は僅かに三人であつた。此の後世祖は令を沿海各地に下し、大に船舶を造り、水夫を招募し、糧餉を貯積し、以て再舉に備へ、日本を圖らうとしたが、但し遂に其の志

を達することが出来なかつた。

世祖は天性大事業を好み、大功績を喜んだ。日本の役が失敗に歸したにも拘はらず、未だ年を逾えざるに、又安南の役を起した。安南が服すると今度は緬甸を降し、占城を服し、爪哇を破つたから、南洋諸島は相繼いで入貢した。此の時に到り世祖も己に老境に入り、偉大なる雄心も漸く息み、以前の如く兵を苦しめ、武を煩はすやうなことは無くなつた。

註 (一)三世五朝、親、子、孫と代を嗣ぐことを世といふ、即ち忽必烈は太祖の孫で三世に當るが朝は太祖、太宗、定宗、憲宗を経て五朝目に當る。

(二)和林、外蒙古オルホン河の東に其の遺跡があるといはれる。

(三)恭帝、恭宗をいふ。度宗の子即位の翌年元軍南攻して首都臨安に入り、宋人は帝を以て降る。元人は之を北に送つて瀛國侯に封じた。これで事實上宋は亡びたのである。

(四)端宗、恭宗の庶兄で名は昺、宋の遺衆是を擁して立てて端宗といつた。

(五)礪州、廣東省高州府南方海上の島。

(六) 昺、端宗の弟である。僅かに八歳で統を継ぎ、元軍の爲に福州を追はれ陸秀夫に負はれて水死した。従死する者が甚だ多数であつた。

(七) 高麗は高宗の時、契丹(遼)の遺衆が遼東に建てた大遼國の侵略を受けて困つてゐたが、元の太祖の兵力の扶助に依り遼を亡ぼすことが出来た。後高麗は元の意に反する行爲あり、元の征討を受け和を乞うて太子を質として蒙古に送つてゐた。高宗死するや太子還つて位に即く、之を元宗といふ。元宗は權臣林衍の爲に廢せられた。是に於て元の世祖は使を遣して元宗の位を復し、また其の女を元宗の子忠烈王に妻あはせ以て高麗を元の外藩とした。後世祖は忠烈王を介して使節を我國に送り朝貢を促した。此の時鎌倉の執權北條時宗、元の國書の非禮なるを怒り、其の使を斬つたから世祖は高麗と共に我國に入寇した。

(八) 元寇は文永、弘安の兩度であるが本書には弘安の役のみ記載し、文永の役は省略したのである。

(九) 平壺島、平戸島か。壺、戸共に古音コ、現代に於ても平壺、平戸は同音であるさうである。

(十) 占城、印度支那半島の東南の地方

五、元代的東西交通

從成吉思汗到忽必烈即位。約八十年之久元的版圖東至朝鮮

五 元代の東西交通

成吉思汗より忽必烈の即位に到る間は、約八十年の久

西至東歐北至西伯利亞南至安南建設了世界無比空前絶後の一大帝國。因此各地商賈互通行旅無阻遂令東西洋交通之局嶄然一新。凡從西方東來者陸路從中亞出天山南路或由西伯利亞出天山北路遠達和林燕京等地。海道從波斯經印度至中國閩廣一帶。而福建的泉州福州諸港遂稱爲當時世界最大商埠外國人來居該地的不下萬數。

元世祖拔用人材不問種族藉着東西交通的便利所以阿剌伯及波斯的學者軍人意大利法蘭西的畫家職工等到元朝來作官的很多。西方的天文算學藝術因此得以傳入中國。而中國的羅盤

しきを経た。この時元の版圖は東は朝鮮に至り、西は東歐に至り、北は西伯利亞に至り、南は安南に至る、世界無比空前絶後の一大帝國を建設した。此に因つて各地の商人等は互に往來するやうになつたが、旅行は極めて安全、一の遮ぎるものなく、遂に東西兩洋交通の局面を嶄然一新せしめた。凡そ西方より東來する者は、陸路にあつては中央亞細亞より天山南路に出で、或は西伯利亞より天山北路に出で、遠く和林、燕京等の地に達し、海路にあつては波斯より印度を経、中國の閩、廣一帶に到るのである。而して福建の泉州、福州の諸港は遂に當時世界の最大商埠地と稱せられ、外國人の該地に來つて居住する者萬を下らなかつた。

元の世祖は人材を拔用するには種族を問はなかつた。

東西交通便利となつた爲に、阿剌伯及波斯的の學者、軍人、

針活版術等亦於這時傳到西方去了。

歐洲人屢受回教徒的壓迫一面法蘭西德意志諸侯王等正謀再興十字軍和他們抵抗一面耶蘇教徒打算聯絡蒙古以削回教勢力所以羅馬教皇屢遣教徒東來遠至和林修好世祖既立且遣使西謁教皇請派教士來中國傳教並許建教會於燕京爾後耶蘇教徒陸續東來不可勝數。

意大利人馬哥孛羅東遊至燕京得世祖的信任在元作官二十餘年徧探東亞各地回國時路經中國海渡麻刺甲海峽達印度沿海入波斯灣而西歸他著有「東方見聞記」一書述蒙古之強盛與中

意大利、法蘭西の畫家、職工等元朝に到り官途に就くものが非常に多かつた。西方の天文、數學、砲術等は、之等西人に依つて中國に傳へられ、中國の羅針盤、活版術等は亦この時彼等に依つて西方諸國に傳へられたのである。

歐洲人は屢回教徒の壓迫を受けたから、一面に於ては德意志、法蘭西の諸侯王等は十字軍の再興を謀り、彼等と共に回教徒の壓迫に抵抗しようとし、又一面耶蘇教徒は蒙古と聯絡して以て回教徒の勢力を削がんことを企てた。そこで羅馬法王は屢教徒を遣はして東來し、遠く和林に至つて好を修めしめた。元の世祖立ち、先づ使を西に遣はして法王に謁し、教士を派し中國に來つて傳教せせんことを請ひ、猶教會を燕京に建つることを許した。爾後耶蘇教徒は陸續として東來し、其の數は擧げて算ふ

國之富庶歐洲人讀了這書之後非常羨慕東土。於是西人東來者更多。

るに勝へない。

意大利人馬哥孛羅は、東方を游歴して燕京に至り世祖の信任を得、元に在官すること二十餘年、専ら東亞各地の事情を探つた。歸國の際は支那海を経て麻刺甲海峽を渡り、印度沿海に達し、波斯灣に入つて西に歸つた。彼の著に「東方見聞記」の一書があつて、蒙古の強盛と中國の富庶を述べた。歐洲人は此の書を讀んで非常に東方諸國を羨望した。是に於て西人の東來する者が更に多くなつた。

註 (一) 閩廣一帯、閩は福建省、廣は廣東省。

(二) 回教、西曆六一〇年亞刺比亞メツカの人マホメット四十歳の時、ヒラ山上に天啓を受けたりと稱して創めし宗教。

(三) 十字軍、土耳其族の一派がサラセン人を逐うて基督教徒の聖地とするパレスチナを奪つて、宗教的熱情の旺盛な西歐人を怒らせたのみならず夥しい巡禮者を虐待した。そこで異教徒征伐、聖地回復の機運動き東羅馬皇帝の請により羅馬法王

が、諸國の僧侶武士等をクレルモンに會し東方遠征を決議した。一〇九六年獨、佛等の武士四十萬、各十字の布片を着け勇躍して聖地に向つた、之を十字軍といふのである。第一十字軍は陸路コンスタンチノープルに向ひ、非常な艱難苦闘を経て漸くイエルサレムを恢復し（一〇九九年）ここにイエルサレム王國を建てて聖地の守護に任じやがて師を回へした。十字軍は我平安朝末期から鎌倉時代の中頃まで約二百年に互り數回の遠征があつて西洋歴史中の重大事件の一であるが、第一回に成功せる外第二回以後は多くは失敗に歸した。是が爲羅馬法王昔日の權威は漸く失墜するやうになつたのである。

(四)東方見聞記、日本が初めて西歐諸國に紹介せられたのも本書である。其の文章の大意を次に擧げて見よう。

「ズイバング（日本國といふ支那の轉訛）は支那の東方千四百里の海中にある一大島である。國王が之を統治してゐる。人民は顔色白く動作は閑雅である。黄金が多いが商賈の到る者が少ない。輸出を嚴禁してゐる。王宮は黄金を以て屋根を葺き、寺院には鍍金の窓と金の床とがある。宗教は偶像を崇拜する。元の艦隊は之を征して暴風に遭ひ多く覆没した云云。

六 滿洲の崛起

滿洲は元女眞部の屬である。世々長白山附近に居つた。

六 滿洲の崛起

滿洲先本女眞部屬世居長白

山附近。相傳有三天女浴於池有神鵲銜朱果置於季女の衣内季女把朱果含口中忽而遂有孕。既而產一男生而能言姓愛親覺羅氏名布库里雍順就是滿洲開基的始祖。後數傳至覺昌安者在中國明末時有兄弟六人築城分居建國於滿洲覺昌安父子因事爲尼堪外蘭及明的總兵所殺。其孫努爾哈赤年二十五奮志報仇竟滅尼堪外蘭。越數年用兵滿洲各部皆爲所敗疆土大拓遂於明末萬歷四十四年稱帝就是太祖高皇帝。國號大金建元天命定都興京滿洲國從此立基。按滿洲取義相傳二說一說「滿洲」是印度語音和「曼珠」相近譯言「妙吉祥」因爲愛

傳説に依ると、三天女があつて池で水浴をしてゐると、神鵲が赤い果實を銜へて來て季女の脱いだ衣服の上に置いた。彼女が其の果實を口に含むと忽ち腹中に入つてしまつた。同時に妊娠して後一男子を産んだが、此の兒は生れた時から能く言語を發した。姓は愛親覺羅、名は布库里雍順といふ。是が滿洲開基の始祖である。始祖から數代傳へて覺昌安に至つた時は、中國明の末葉であつた。兄弟六人の者が城を築いて分居し、國を滿洲に建てた。覺昌安父子が事に因つて尼堪外蘭なる者と明的總兵の爲に殺された。其の孫奴爾哈赤は時に年二十五、奮起して仇を報じ尼堪外蘭を滅ぼした。越えて數年兵を用ひて滿洲各部を攻め、皆之を破つたから疆土大に開け、遂に明末萬曆四十四年帝と稱した。是が太祖高皇帝である。國を大金と號し、元を建てて天命とし、都を興京に定め、

親覺羅氏向來崇信佛教所以採用佛語又一說滿洲爲古肅地舊稱珠申就是肅慎的轉音由珠申改稱滿珠又由滿珠訛爲滿洲。

天命三年蒙古諸部已歸滿洲太祖定計攻明親率步騎二萬人直趨撫順出發的時候以七大恨告天(一)明邊吏輕信尼堪外蘭之言無故啓衅殺其祖父(二)明不守盟約逞兵越界衛助葉赫(三)明邊民每歲踰境行竊依法當殺而明又以擅殺爲詞脅取十數人抵罪邊境(四)明助葉赫以其許字滿洲之女改適蒙古(五)不許滿洲人民於駐牧之地耕種刈獲(六)遣使滿洲肆行侮慢(七)哈達既被征服又脅我復其國土。

滿洲國の基を建てた。按ずるに滿洲なる名稱を取つた由來に就ては相傳へて二つの説がある。其の一説、「滿洲」は印度語の「蔓珠」譯して妙吉祥と音が近い、元來愛親覺羅氏は佛教を崇信してゐたから佛教語を取つたのである。他の一説、「滿洲」は古肅慎の地であつて舊稱を「珠申」といつた。是は肅慎の轉音であるが、後「珠申」を「滿珠」と改稱し、又滿珠は訛つて滿洲となつた。天命三年蒙古の諸部は已に滿洲に歸した。太祖は計を定めて明を伐たんとし、步騎二萬人を親ら指揮して直ちに撫順に趨き、出陣の首途天に向つて七つの大恨を告げた。

(一) 明の邊吏は輕々しく尼堪外蘭の言を信じ、故無く血を流して我父祖を殺した。

(二) 明は盟約を守らず、逞兵界を越えて葉赫を衛助す

太祖出兵圍撫順明將李永芳

出降。廣寧總兵張承蔭率師往援又被金兵打敗士卒生還の十無一二。於是金兵進攻清河堡清河在四山的中間東接寬甸南距震陽北抵瀋穆清河既失全遼大震。

る。

(三) 明の邊民は毎年境を踰えて竊を爲すを以て之を殺した。然るに明は又之を擅に殺したのだといふ口實を設けて我人民數十人を捕へて邊境で所刑した。

(四) 明は葉赫を助け、滿洲への許婚の女を蒙古に嫁せしめた。

(五) 滿洲の人民に牧畜農耕の地を與へない。

(六) 使を滿洲に遣はし侮蔑暴慢な行動をする。

(七) 哈達は既に征服せられた。しかるに又我を脅して其の國土を回復しようとする。

太祖が兵を出して撫順を圍と明將李永芳は降參した。

廣寧の總兵張承蔭が兵を率ゐて援に赴いたが、金兵の爲に打敗られ士卒の生還者十の一二にも足らざる有様であつた。是に於て金兵は進んで清河堡を攻めた。清河は四

面山で圍まれた地で、東は寬甸に接し、南は靉陽を距だて、北は瀋穆に抵る要所である。此の清河は既に金軍の手にあり、遼河一帯大に震駭した。

註 (一) 總兵、守備隊長の如きもの。

(二) 明朝は女真人宣撫の爲之を三部に分けた。(1)は建州衛であり長白山地方から北へ牡丹江谷地に居た者。(2)は海西衛であり現今の扶餘(伯都訥)地方から哈爾濱方面へかけての松花江流域に居た。(3)は野人衛であり黒龍江の下流域に居た。奴留哈赤、尼堪外蘭共に建州衛より出づ。

(三) 大金の建國、西曆一六一六年、我が關が原の役に後ること十六年。

(四) 葉赫は海西衛の一部屬。

(五) 哈達は海西衛の一部屬。

(六) 撫順、炭礦都市撫順は、昔撫順關と呼び軍事上の要地である。明治三十八年二月川村大將の鴨綠江軍は不意に清河城に現はれ、直ちに撫順を攻撃した。露軍總司令官クロバトキン大將の狼狽一方ならず、最左翼指揮官リネウイチ將軍をして極力拒守せしめたが、日本軍の猛撃にたへずして退却し、遂に奉天戦に大敗した。要するに撫順を失へば瀋陽(奉天)の運命は定まる、太祖は此の撫順を略取して奉天を陥れ、長驅して遼陽を占領して明の勢力を滿洲から驅逐したのである。

- (七) 廣寧、奉天省廣寧縣、打虎山の西方にあり。
- (八) 清河、撫順の東南方約二十里の處にあり。
- (九) 寬甸、安東の東北方二十五里の處にあり。大蒲石河に望む小城市で明代の長甸城、永甸城を統轄する司令官の所在地、地方一帯農耕の好適地であるから早くより朝鮮人と支那人との雜居地となり、物資の集散場である。
- (十) 靉陽、靉陽邊門？
- (十一) 瀋穆、瀋陽？

七、太祖大破明兵

明神宗用楊鎬爲經略使合朝鮮葉赫兵共四十七萬集中瀋陽分四路出師以抵禦金兵一、馬林出開原攻北一、杜松出撫順攻西一李如柏出清河攻南一、劉健出寬甸擣後預約萬歷四十七年三月一日會於二道關同時並進。杜松打算立首功先期渡渾河連克三小砦遂乘勝趨薩再濟谷口以

太祖大に明兵を破る……

七 太祖大に明兵を破る

明の神宗は、楊鎬を用ひて經略使と爲し、朝鮮兵、葉赫の兵を合して四十七萬人、瀋陽に集中し、之を四路に分つて出師し、以て金兵に抵禦せんとした。一は主將馬林、開原を出で北を攻む。一は主將杜松、撫順を出で西を攻む。一は主將李如柏、清河を出で南を攻む。一は主將劉健、寬甸を出で後を擣く。豫め萬歷四十七年三月一日、二道關に會し同時に行動を開始して、並進すべき作

三萬衆屯薩再濟山而自引兵二萬攻界藩。

太祖聞杜松軍到預先埋伏精兵於谷口。杜松軍過伏兵齋發明兵不利。於是太祖自率八旗兵直逼再濟山大營。兩軍交戰忽遇大霧咫尺不辨。明兵大燃火炬太祖從暗擊明萬矢齋發無不中的。明兵由明擊暗銃礮皆中樹林。薩再濟山遂被金兵佔領。杜松聞耗來援山上兵據高馳下和山下兵相應夾攻竟把松軍衝爲數隊。松中流矢而死全軍盡覆。

薩再濟之役明延傾全國之力和朝鮮葉赫的精銳同時深入號四十七萬人。太祖兵不過數萬人既竭盡全力先破杜松一路其他

戰部署であつた。しかるに杜松拔駢けの功名を立てんと企て、先づ渾河を渡らんことを期し、續いて三小砦に勝つたので、勢に乗じて薩爾濟の谷口に軍を進め、三萬の大軍を薩爾濟山に駐め、自ら二萬の兵を率ゐて界藩攻撃に向つた。

太祖は杜松軍の進路を探知し、豫め精兵を谷口に埋伏させて置き頃合を計つて一齊に打ちかかつた。明兵は非常に不利な戦である。時刻は良しと太祖が、自ら八旗の兵を提げて、眞一文字に薩爾濟山の本營に逼り、茲に兩軍烈しく交戦する中、忽ち大霧が襲うて來て咫尺も辨せぬ有様となつた。明軍は大に炬火を燃やしたが、之が又反つて明軍に禍した。太祖の軍は暗い處から明るい處を撃つので、萬矢齊しく發して中らざる無しといふ善戦であるが、明軍は明るい處から暗い處を撃つので、銃砲は

三路相繼潰敗。滿洲士卒損傷不過數百人而明之宿將猛士一朝俱盡。由此太祖得以克遼東取瀋陽王基開帝業定。可見薩爾濟一役真是金明興亡的關鍵了。

徒らに樹林中に中るのみである。遂に薩爾濟山は金兵の占領する處となつた。界藩に向つた杜松が急を聞いて來援した處を、山上の金兵は高きに據つて馳せ下り、山下の金兵は之に應じて夾撃した。明兵は中央を突破されて切れぐの數隊に衝き爲され、杜松も流矢に中つて戦死し全軍盡く覆つた。

薩爾濟の役は、明廷が國を擧げて全力を傾け、更に朝鮮兵、葉赫の兵も加はつて進攻し、堂々四十七萬と號せられた。太祖の兵は數萬人に過ぎない。既に全力を盡した戦に杜松の一路軍先づ破れ、其の他の三路軍も相繼いで潰敗した。滿洲の士卒の損傷は數百人に過ぎないのに明の宿將猛士一朝にして陣歿した。此に因つて太祖は後日遼東に克つて瀋陽を取り、王基茲に開け、帝業茲に定まつた。實に薩爾濟の一戦は、金、明興亡の關鍵であつた。

(一)揚鎬、萬曆八年の進士、同二十五年朝鮮軍務となり。豊臣秀吉の朝鮮の役日本軍と戦つて大に敗れ罷免せられた。清の太祖の勢熾なるに及び、再び起用せられ萬曆四十六年遼東の經略使となつたが翌年渾河畔に大敗して、神宗の爲に罪せられた。

(二)薩爾滸山、撫順の東方十餘里の處にある丘陵状の山で山下に戰勝記念碑がある。明の萬曆四十七年三月一日に於ける薩爾滸の戰勝は滿洲人の最も誇りとする處で、今回の滿洲國獨立宣言も此の吉辰を卜し大同元年三月一日滿洲國政府の名で行はれた。

(三)三界藩、渾河畔の一城である。曩に太祖の軍によつて占領せられてゐた。

(四)八旗の兵、清の太祖が其の親兵として編成したのであるが、後蒙古八旗、漢人八旗を増設せられ最初のを滿洲八旗といふ。旗と稱するは每旗の都統に旗を授くるからである。一旗の兵數は七千五百人八旗の總數は六萬人である。清の中國統一後は京師の警備と各地の駐屯にあてられた。

八 大清の建國

太祖は薩爾滸に大勝してより後、兵を移して葉赫を滅ぼしたから、凡そ民の邊外の地は盡く金の有となつた。

八 大清の建國

太祖自薩爾滸大勝之後移師滅葉赫凡明之邊外地盡爲金有。天命六年又發兵克瀋陽取遼陽。

於是分兵四路遼河以東的堡寨營驛及海蓋金復諸州大小七十餘城以次俱下。遂由興京徙都於遼陽明年渡遼河進取廣寧又連陷四十餘城。明兵退入山海關。遂由遼陽遷都於盛京——就是現今奉天省瀋陽縣。

天命十一年太祖率大軍攻寧遠

明將袁崇煥用葡萄牙式大砲抵禦金兵太祖不能克且受傷因嘆道朕從二十五歲起兵以來戰無不勝攻無不克何以只此寧遠一城不能攻下呢他就撤兵歸瀋途中駕崩葬於福陵——俗稱東陵在瀋陽東三十里。

太祖既崩傳位於第八子皇太極改元天聰就是太宗文皇帝。太

天命六年又兵を發して瀋陽に克ち、遼陽を取つた。是に於て兵を四路に分ち、遼河以東の堡、寨、營、驛及海、蓋、金、復の諸州大小七十餘城を相次で下し、遂に都を興京より遼陽に徙した。明くる年遼河を渡り、進んで廣寧を取り、又四十餘城を連續して陥れたから明兵は退いて山海關に入つた。遂に都を遼陽より盛京——是は現今の奉天省瀋陽縣である。——に遷した。

天命十一年太祖は大軍を率ゐて寧遠を攻めた。明將袁崇煥は葡萄牙式大砲を用ひて金兵に抵禦したので、太祖は克つこと能はざるのみならず、反つて負傷し嘆じていつた。

「朕二十五歳兵を起してより以來、戰つて勝たざる無く、攻めて克たざる無し、何ぞ此の寧遠一城のみ攻め下す能はざるか」

宗即位再向遼西出兵又敗於寧遠不得雪耻原因由於金軍雖然勇敢但只憑着弓箭不如明軍用葡萄牙式的大砲能够便於防範的緣故以後金軍由明的降將手裏得來許多葡萄牙式的大砲遼西的經略纔告成功了。

太宗後來又平定內蒙古降服朝鮮舉前代遼金元舊部悉歸統一根本既固乃得一意從事於中原天聰九年諸王貝勒以太宗功德隆盛奉表勸進恭上尊號改元崇德建國號爲大清。

太宗在位曾五次伐明都不得利崇德六年六次伐明築長圍以困錦州明將洪承疇及總兵吳三桂率援師十三萬駐札松山竟被

流石の太祖も止むを得ず、兵を撤して歸瀋の途中遂に崩じた。福陵に葬る。俗に東陵と稱し、瀋陽の東三十里（支里）に在り。

太祖は既に崩じたから位を第八子皇太極に傳へて天聰と改元した。是が太宗文皇帝である。太祖は即位の後、再遼西に向つて出兵したが、又寧遠に敗れて恥を雪ぐことが出来なかつた。戦敗の原因は外では無い、金軍は勇敢ではあるが、但憑むに足るべき武器は弓箭のみであるから、明軍の用ふる葡萄牙式大砲の、より多く、より能く威力を發揮するに及ばないからである。後日金軍は明の降將の手に依つて葡萄牙式大砲を、多數入手するを得たので、遼西の經略が漸く成功を告げた。

太宗は後日又内蒙古を平定し、朝鮮を降伏せしめたから、前代の遼、金、元の舊部を擧げて悉く統一に歸した。

太宗所敗明兵死者五萬八千餘人自薩爾滸戰後以此役爲最烈從此明的元氣大傷不久就要滅亡了。

根本既に固まり一意中原の事に従ふことが出来るやうになつた。天聰九年、諸王、貝勒は太宗の功德隆盛なるを以て、表を奉つて勸進し、恭しく尊號を上り、崇德と改元し、國を建てて大清と號した。

太宗の在位中、曾て五度明を伐つて都て利を得なかつたが、崇德六年六度明を伐ち、長圍を築いて錦州を困めた。明將洪承疇及總兵吳三桂が援軍十三萬を率ゐて松山に駐札したが、竟に太宗の敗る處となり、明兵の死する者五萬八千餘人、薩爾滸の戰以後此の役が最激烈であつた。此より明の元氣大に衰へ久しからずして滅亡した。

註 (一) 葉赫、前に註す。

(二) 堡、土石を積んで作つたトリデ。

(三) 寨、木柵を以て圍んだ山砦。

(四) 營、住居を作る意より轉じて軍壘の義。

(五) 驛、行旅の宿場。

堡、寨、營、驛の外滿洲には、街（四通の道路、町の義）、屯（聚り守る義）、店（物品をならべて賣買する義）、站（宿場の義）、甸（京より五百里以内の天子直屬の地又は郊外の義）等の文字を附したる地名が非常に多いが、聚落發達の沿革を考察するには良い資料であらう。

(六)、(七)、海城、蓋平、軍事上の要衝で隋唐時代より中國の東方經略の記事に現はれ、近くは日清戰爭の際第三師團の古戰場である。

(八)金州、乃木大將の山川草木轉荒涼の詩によつて名高い、明朝時代倭寇防禦の爲に築城せられたと傳へてゐるが、起原は更に古いらしい。

(九)復州、滿鐵瓦房店驛の西方にあり、鐵道沿線に遠ざかつた爲に一時衰へたが、三國時代の魏の平州で、後高句麗に屬し、更に唐の辰州となつた。此の附近一帯日本人の指導に依り水田農業盛んとなり、果樹の栽培、養蠶、工業等も益々發展し、地方民は著しく裕福となつた。

(十)廣寧、前に註す。

(十一)寧遠、奉天省興城縣、錦州、綏中兩地の約中央にあり、明が太宗抵禦の爲築城したのである。

(十二)貝勒、前に註す。

九 清的統一中國

九 清の中國統一

清崇德八年即明崇禎十六年太宗崩葬在瀋陽城城昭陵——俗稱北陵有石碑記載他的功業用滿漢蒙三種文字刻成。——皇太子福臨即位就是世祖章皇帝改元順治。世祖時年六歲由叔父睿親王多爾袞攝政。這時明政益亂盜賊蜂起賊魁李自成直逼燕京崇禎帝自縊。山海關的守將吳三桂便投降清廷借兵入關削平流寇。世祖便由瀋陽遷都北京。下薙髮令命漢人一律薙髮編辮並爲崇禎帝發喪以禮改葬收服人心。

世祖定鼎北京黃河流域已在清廷掌握之中。江南一帶雖有明

清の崇德八年即ち明の崇禎十六年太宗は崩じた。瀋陽城の北昭陵に葬る。——俗に北陵と稱し、石碑があつて彼の功業を記載するに滿、漢、蒙三種の文字を用ひて刻成してある。——皇太子福臨が即位した。是が世祖章皇帝で順治と改元した。世祖は時に年六歳、由つて叔父睿親王多爾袞が政を攝した。この時明の朝政益々亂れ、盜賊蜂起し、賊將李自成が直ちに燕京に逼つたから、崇禎帝は自ら縊れた。山海關の主將吳三桂は清廷に投降し、清の兵を借つて入關して流賊を平げた。世祖即ち瀋陽より都を北京に遷し、薙髮の令を下して漢人に命じて一律に髮を薙つて辮を編ましめ、猶崇禎帝の喪を發して禮を以て改葬し、人心を收服した。

世祖は北京に定鼎した。黃河の流域は已に清廷の掌握の中に在り、江南一帶には明の子孫があつて、匡復を稱

朝の子孫號召匡復苟延殘喘可
是大勢已去無法挽救了。後來明
裔桂王被吳三桂絞死於雲南魯
王和延平王鄭成功也病死在臺
灣明朝所存的一些殘餘勢力至
此便已摧毀殆盡。

明朝的子孫雖不足慮但是那
時候還有一個臺灣的鄭經仍舊
奉明正朔與清抗衡並且那降將
吳三桂等依然是分鎮封土握着
兵馬財賦之權。這事都使清人於
防禦上不得有所戒備。到了聖
祖康熙帝即位後果然「三藩之亂」
便發生了。

鄭經本想乘機進取至此便出
兵助攻和清爲難。但是三藩到底
都被聖祖先後平定。不久臺灣也

へて暫餘喘を延してゐたが、大勢は已に去り明室挽救の
方法は盡きてしまつた。後日明の末裔桂王は、吳三桂か
ら雲南で絞殺せられ、魯王と延平王鄭成功は臺灣で病死
したので、明朝の僅かなる殘餘の勢力も、此に至つて殆
ど摧き盡された。

明の子孫は考慮するに足らないが、但し其の時ひとり
臺灣の鄭經なる者があつて、從來の如く明の正朔を奉じ
て清に對抗してゐるのと、且つ明の降將吳三桂等は、依
然として封土を分鎮し、兵馬財賦の權を掌握してゐる。
この事は都て清人をして防衛上警戒する處あらしめねば
ならぬのであつたが、果せるかな聖祖康熙帝即位後、所
謂三藩の亂が発生した。

鄭經は平素から機あらば乗じて進取せんと待構へてゐ
た處であつたから、此に至つて兵を出して吳三桂等を

爲他所收服。當時清廷便把所有
的藩產入官充餉又把藩兵撤回
京師。復擇定衝要的處所設官駐
防。從此清朝便統一中國而用全
力注在邊境的經略了。

助け清に仇をした。但し此の三藩は結局聖祖の爲に相前
後して平定せられ、臺灣も久しからずして彼の收服する
處となつた。當時清廷は藩の財産を國庫に收納して糧餉
に充て、又藩兵を京師に撤回した。復樞要の場所を選定
して駐防の官を設けた。此より清朝が中國を統一し、全
力を用ひて邊境の經略に集注した。

註 (一)李自成、米脂の人狡黠で騎射を善くした。崇禎帝毅宗の世河南山西地方を寇掠
し西安で王と稱して國を大順と號し永昌と改元した。遂に進んで京師に逼る。帝
は萬歲山に登つて自ら縊れた。後清朝中原を統べ自咸を辰州に攻め其の衆を盡く
滅ぼす。自咸は窘窮して村落に出で食を求めると遂に村民の爲に殺された。

(二)入關、支那には長城の關門を始めとし、關と稱するものが蓋想像以上に多から
う。しかし近代支那史及當今の時局用語で關といへば直ちに山海關を指すことは
多少の例外はあるが殆ど常識となつてゐる。又關内といへば支那本土を指し、關
外といへば滿洲を指すことも同前であるが、滿洲國獨立の今日に於ては早急に自
主的用語に改むべきであらう。

(三)雜髮の令、滿洲の俗を支那本土に移したもので怨嗟の聲が高かつた。

(四)定鼎、鼎は支那に於て王位繼承の寶器である。定鼎は都を定め天下に君臨すること。

(五)桂王、明の遺衆に依りて肇慶に即位し、一時大に振ひ明室中興の望があつたが、後聲威次第に衰へ、雲南に奔りビルマに逃れたが、ビルマ王が吳三桂に降を請ひ桂王以下を引渡した。西歴一六六二年吳三桂は雲南に於て桂王を殺した。

(六)魯王、明の太祖十世の孫。

(七)鄭成功、延平王に桂王から封ぜられた。父は鄭芝龍母は日本人田川氏である。我國に於ては戯曲「國性爺」で名高い。父芝龍は清軍に降つたが成功は明に對して孤忠を守り、一時勇名を轟かした。

(八)鄭經、鄭成功の子。

(九)正朔、正は年の始、朔は月の始よつて曆の義となる。古昔支那に於ては王者が革命すると、必ず曆を改めた。故に其の曆の行はるる處は其の統治權の行はるる處である。

(十)三藩の亂、清朝は明を蕩平するに就いて明の降將の功績も亦著大であつた。そこで彼等を選することも厚く、降將の雄吳三桂を雲南に、尙可喜を廣東に、耿繼茂を福建に封じて藩王となし、明の遺衆を鎮定せしめたが彼等は封内の兵馬財政の權を握り其の勢甚大なるものがあつて、就中吳三桂は其の尤なるもので、恰も一敵國の如き觀があつた。しかし天下が平定すると清朝では、此の三藩を何とか

十、清的隆盛時代

聖祖世宗高宗三朝正是清朝全盛之秋而高宗藉着祖父積下的餘勢尤其盛極一時。高宗嘗分兩路出師把準噶爾蕩平便乘勝戡回部綏緬甸鎮臺灣封安南。廓爾喀又先後平定大小金州。因此高宗晚年嘗以十全武功自矜。那時東北拒俄於外興安嶺西北收地於伊犁以外朝鮮既久服中國而暹羅又遣使來貢版圖遼廓遠過漢唐。並且那三朝的力征經

處分せねば國家に不利である。聖祖即位の後三藩廢止の志があつたから、三藩は自ら安んぜず、康熙十二年に至り、廣東の尙可喜藩撤廢の事から、吳三桂先づ兵を擧げ、遠近に飛檄して侵掠に着手した。従つて耿精忠(福建の耿繼茂は死し其の嗣)も兵を擧げ、廣東の尙之信も父可喜を幽して吳三桂に通じた。

十 清の隆盛時代

聖祖、世宗、高宗の三朝は正に是清朝の全盛時代である。就中高宗の代は、父祖蓄積の餘盛を藉つて其の隆盛一時に極まつた。高宗嘗て兩路に分つて師を出し、準噶爾を蕩平し、勢に乗じて回部を戡め、緬甸を綏んじ、臺灣を鎮め、安南を封め、廓爾喀を征し、又前後して大金川、小金川を平定した。此に因つて高宗は晩年十全の武功を稱へて自ら矜つた。此の頃東北は俄を外興安嶺に拒ぎ、西北は伊犁以外に地を収めた。朝鮮は既に久しく中國に服し暹羅も又使を遣はして朝貢したから、版圖の廣

營更替漢滿蒙回藏五種民族建立了個混合的基礎這也要算民族混合史上最重要的一頁了。

以上就武功而言。若論文化三朝也有重大的供獻。聖祖時先後編成佩文韻府淵鑑類函數理精蘊康熙字典子史精華等數十種。世宗時輯成古今圖書集成一萬卷高宗時陸續編成通鑑輯覽皇朝通考三禮義疏大清一統志等巨冊在學術上關係甚大。

其尤爲著名的鉅作就是四庫全書。高宗乾隆三十八年開四庫全書館以紀昀爲總纂官積學之士都羅致入內徵求天下書籍歷十餘年而成。分爲經史子集四部共三萬六千餘冊。分鈔七部特建

大なること漢、唐にも優つた。猶且つ此の三朝の力征經營は、漢、滿、蒙、回、藏五種の民族を更改して、打つて一丸としたる混合の基礎を建立したが、是は又民族混合史上に最も重要な一頁として、算入すべきである。

以上は武功に就いてのみの説明である。若し文化的面を論ずれば、此の三朝は又重大な功獻がある。聖祖の世佩文韻府、淵鑑類函、數理精蘊、康熙字典、子史精華等數十種を前後して編成し、世宗の世古今圖書集成一萬卷を輯成し、高宗の世通鑑輯覽、皇朝通考、三禮義疏、大清一統志等の巨冊を陸續として編成し、學術上に甚大なる關係を及ぼした。

其の最も著名なる鉅作は、實に四庫全書である。高宗乾隆帝三十八年四庫全書館を開き、紀昀を總纂官となし、積學の士は都て羅致入内せしめ、廣く天下の書籍を徵求

七閣藏貯此書就是內廷的文淵閣圓明園的文源閣熱河的文津閣奉天的文溯閣楊州的文匯閣鎮江的文宗閣杭州的文瀾閣這書對於保存東亞固有文化極有價值。後經亂事破損不全惟藏在奉天文溯閣內一部完全無缺不獨是我國的至寶並可稱做世界的珍品。

し、十餘年を経て功を遂げた。分つて經、史、子、集の四部と爲し、共に三萬六千餘冊、七部に分鈔し、特に七閣を建てて此の書を貯藏した。是は內廷の文淵閣、圓明園の文源閣、熱河の文津閣、奉天の文溯閣、楊州の文匯閣、鎮江の文宗閣、杭州の文瀾閣である。這の書は東亞固有の文化保存上、極めて有價値のものであるが、後日變亂に遭ひ破損して全からず、惟奉天の文溯閣内の一部のみは完全無缺、獨我國の至寶たるのみならず、世界的珍品と稱すべきである。

註 (一) 準噶爾、大概イリ河の南方天山北路地方。

(二) 回部、西藏の北方。

(三) 廓爾喀、西藏の南方印度との境界附近。

(四) 金川、今の四川省金沙江の上流地方、分れて大金川、小金川となつてゐた。山に金鑛あるを以て此の名が起つた。

(五) 十全の武功、準噶爾、金川、廓爾喀各一回平定、回部、臺灣、緬甸、安南、各

- 一回平定、計十度の武功をいふ。
- (六) 外興安嶺、スタノボイ、ヤプロノイの兩山脈をいふ。清俄の交渉は第十二課に詳かである。
- (七) 乾隆二十二年伊犁を定めた。
- (八) 紀昀、乾隆十九年の進士、傳記の一節に、儒籍に貫徹し、百家に傍通す、凡そ六經傳注の得失、漢史記載の異動、子集の支分派列、奥を扶し細に徹せざるなし、撰定する處總目提要多きこと萬餘種に至ると。以て如何に大家であつたかを知る事が出来よう。
- (九) 經、聖人の著作又は其の編纂する書籍、四書、五經の類を輯めた。
- (十) 史、歴史、記録、地理に關するものを輯めた。
- (十一) 子、學術に關する著書、老子、孟子、諸子百家の類を輯めた。
- (十二) 集、詩、賦等文學に關するものを輯めた。

十一、清的滿蒙政策

滿洲は清朝發祥之地向來不許外人深入。其封鎖の理由不外乎(一)保護清室陵墓。(二)防備私掘黃參。(三)恐蒙人私入圍場。清朝以

滿洲は是れ清朝發祥の地であるから、從來外人の深く入るを許さない。其の封鎖の理由は外では無い。(一)清室の陵墓を保護すること。(二)黃參の私掘を防ぐこと。

十一 清の滿蒙政策

爲滿洲是滿洲人の滿洲不許漢人蒙人和其他種人竄入所以稱做「禁地」至於封禁的方法就是修葺柳條邊牆。

邊牆本是明代爲保護漢人移居南滿各地而設。到了清朝就把明代的舊牆址稍稍擴張並重新修理其修築法和明代邊牆不同之點如下。(一)外面設邊壕內側築土堆土堆上列植柳樹設爲柵欄現在昌圖附近有許多老柳樹行就是當時所植的。(二)北部自開原附近經過吉林長春直達松花江增加邊牆一條。(三)東部稍爲擴張將興京劃入牆內。這是邊牆的東邊所以防漢人和朝鮮人的潛入至於邊牆西邊則自山海關繞過

(三) 蒙古人の私に圍場に入るを恐れた。清朝は「滿洲を以て是れ滿洲人の滿洲なり」と爲し、漢人、蒙人、其の外他種人の竄入を許さない、「禁地」と稱する所以である。封禁の方法は是れ柳條邊牆の修葺である。

邊牆は元明代に漢人の南滿に移居するを保護せんが爲に設けられたものである。清代に到つて明代の舊牆趾を稍擴張し、猶重ねて新に修理した。其の修築法の明代の邊牆と同じからざる點は次の通りである。(一)外面に邊壕を設け内面に土堆を築く、土堆の上に柳樹を列植し、柵欄を設置する。現在昌圖附近に老柳の並樹となつてゐるのが多いが、是は當時植ゑられたものである。(二)北部は開原附近より吉林省長春を過ぎ、直ちに松花江に達すを邊牆一條を増加した。(三)東部は稍擴張し興京を其の牆内に劃入した。是が邊牆の東邊であつて漢人と朝鮮人

遼河北部至法庫門北達松花江和蒙古劃界以防蒙人的狩獵。清朝對蒙古政策可分五點第一、獎勵喇嘛教。康熙帝曾親率大軍援助第一代活佛討滅異族又勅令在蒙古各地建築大廟崇信活佛優待喇嘛。現在北平的喇嘛廟和奉天城東西南北所建的喇嘛塔就是尊崇喇嘛教的證據。第二、限定旗界。清政府將蒙古廣漠無限的草地設立各旗更劃分爲小區禁止蒙人越境遊牧使他們不得互相聯絡交通。第三、懷柔示惠。清朝嘗以近支宗室公主下嫁蒙王而歷代帝王選立后妃滿蒙女子均有優先權。第四、禁止漢化。凡蒙古人不准學習漢文漢語不

との潜入を防いだわけである。邊牆の西邊は山海關より遼河北部を繞り、法庫門に到り北方松花江に達して蒙古との境界を劃し以て蒙古人の狩獵を防いだ。清朝の蒙古に對する政策は、分つて五點とすることが出来る。第一、喇嘛教を獎勵する。康熙帝は曾て親ら大軍を率ゐる第一代活佛を援助して異族を討滅し、又勅して蒙古各地に大廟を建築して活佛を崇信せしめ、喇嘛を優待した。現在北平の喇嘛廟と奉天の諸所に建てられた處の喇嘛塔とは、喇嘛教尊崇の證據である。第二、旗界を限定する。清の政府は蒙古の廣大無邊の草地に各旗を設立し、更に小區に劃分し、蒙人の境を越えて遊牧するを禁止し、彼等をして互に連絡交通するを得ざらしめた。第三、懷柔して恩惠を施す。清朝は嘗て連枝や宗室の公主を蒙王に降嫁せしめ、又歴代の帝王が后妃を選立する

得與漢人結婚並限制漢族商人入境。第五、保護牧畜。蒙人均由政府指定相當牧地每旗並設有公共牧地漢人不得移入以保護他們的牧畜事業。

場合は滿蒙の女子には、均しく優先權を有せしめた。第四、漢化を禁止する。凡そ蒙古人には漢文、漢語を學習するを准さず、漢人と結婚するを得ざらしめ、猶漢族の商人の入境を制限した。第五、牧畜を保護する。蒙人は均しく政府の指定する相當の牧地に因り、猶每旗には公共の牧地が設けられてあつたが、漢人の移入するを得ざらしめ以て彼等の牧畜事業を保護した。

註 (一)黃參、人蔘である。滿洲語で額爾私多といひ最も貴重な植物の義である。敦化

附近の特參で、高山植物に屬し成長極めて遅く百年の樹齡で長さ僅かに半メートル、化學的成分は不明であるが、古來起死回生補腎強壯無比の靈藥とせられる。

老爺嶺溪谷の天然人蔘は小なる物でも一根數百圓、稍大なる物は千金を以て賣買せられる。清朝では特に吉林總督に命じ毎年二三十本を朝貢せしめてゐた。又此の亂掘防止に就いては警戒極めて嚴重であつた。

(二)喇嘛教、佛教の一派で西藏に起り、現在西藏、伊犁、蒙古地方に盛んである。清朝は慄悍なる蒙古族の性情緩和の爲に之を契勵して成功したが、現在蒙古人を觀察すれば稍成功し過ぎた觀がある。

(三)西曆一七七二年西藏喇嘛の擁立に就いて内紛あり、聖祖康熙帝兵力を以て新寧に於て蒙古族等によつて新に擁立せられたる新達頼喇嘛を拉薩に迎へて立てて封冊を與へた。

(四)活佛、喇嘛の教主で兼ねて政權をも掌握してゐる西歐古昔の羅馬法王の如きもの。

(五)喇嘛、本文中の喇嘛は喇嘛教の僧侶の義である。

(六)旗界、清朝の地方官制で内外蒙古、青海地方は通例之を盟に分ち、更に之を旗に分つ、内蒙四十九旗、外蒙八十六旗、青海二十九旗であつた。

(七)公主、支那では皇女を公主といふ。

十二、清俄的交渉

俄羅斯自明中葉以後大敗蒙古把欽察汗國推翻自行建國。趁滿人注力中原逐漸南移無暇北顧之際他們派出遠征隊東來乘隙而取得西伯利亞並越外興安嶺直達黑龍江下游便在雅克薩

十二 清露の交渉

露國は明の中葉より以後大に蒙古を敗り、今まで自國が制御せられてゐた欽察汗國を滅ぼして、疆土に入れて大國を建て、清が全滿人を駈つて中原に力を注ぎ、漸を逐うて南に移り、北方を顧みる暇無き際彼等は遠征隊を派出して東來し、隙に乗じて西伯利亞を取り、猶外興安

河口駐兵希圖久占。後經康熙帝派兵出征擊破俄人。雙方各派代表會議於尼布楚俄使表示讓步議定兩國の疆界東自黑龍江支流格爾必齊河沿外興安嶺至海凡嶺南諸水入黑龍江的都屬於清嶺以北都屬於俄西以額爾古納河爲界河以南屬清河北屬俄。後來又訂立恰克圖條約以劃分俄蒙的交界。

當尼布楚條約訂立的時候俄人在東方的實力還未充足清人又把兵力做外交的後盾所以頗獲勝利後來他們積極侵略便向南發展努力尋求海口。東部西伯利亞總督慕勒福乘清朝被英法聯軍戰敗和洪楊作亂之際脅迫

嶺を越えて、直ちに黑龍江の下流に達し、雅克薩の河口に駐兵して永久占領を企圖した。後康熙帝が兵を派して出征し露人を擊破するに及んで、雙方代表者を尼布楚に派して會議し、露使が讓步を表示して兩國の境界を、東は黑龍江の支流格爾必齊河より外興安嶺に沿ひて海に至る、凡そ嶺南の諸水にして黑龍江に流入する河川の流域は都て清に屬し、嶺以北は都て露に屬す、西は額爾古納河を界とし河以南は清に屬し、河北は露に屬することを議定した。後又恰克圖條約を訂結して露蒙の交界を劃分した。

尼布楚條約訂結に當り、露人の東方に在る實力は未だ充分で無く、清人は又兵力を以て外交の後盾としたが爲に頗る勝利を獲得したのであるが、後日彼等は積極的に侵略し南に向つて海口の尋求に努力した。東部西伯利亞

黒龍江將軍在璦琿訂約盡奪黒龍江以北之地。這就叫做清俄的璦琿條約。

清咽豐十年時英法同盟軍攻陷北京。後得俄使伊格那提夫的調停和議告成。俄使以調停有功遂索厚報於清廷在北京續增專約十五條其中最關重要的就是舉烏蘇里江以東地悉讓於俄這就叫清俄的北京條約。自此約訂定後俄人不費一兵不折一矢得地數千里建置阿穆爾省和沿海省。同治初年俄人又設遠東海軍於彼得大帝灣築海參崴港黒龍江下流一帶保砦林立壓迫滿洲而清國的東北邊防從此益加吃緊了。

總督慕勒福は、清朝が英佛聯合軍に戰敗せると、洪楊が亂を作すに際し黒龍江將軍を脅迫して璦琿に於て條約を訂結し、盡く黒龍江以北の地を奪つた。是が清露の璦琿條約である。

清の咸豐十年中、英佛聯合軍は北京を攻陥したが、後露國公使伊格那提夫の調停で和議が成立した。露國公使は調停に功有りとなし、遂に清廷に厚く報酬を索め、北京に於て專約十五條を増結した。其中最も重要な點は烏蘇里江以東の地を舉げて悉く露國に讓つたことである。之を清露の北京條約といふ。此の條約訂結後、露人は一兵を費さず、一矢を折らずして地を得ること數千里、阿穆爾省と沿海省を建置した。同治の初年露人は又遠東海軍を彼得大帝灣に設け、海參崴港を築いたから、黒龍江下流一帶、保砦林立して滿洲を壓迫する情勢を示し、清國

東北の邊境此より益々吃緊を加へた。

註 (一) 欽察汗國、元の太祖の孫拔都の建國した地である。第二課成吉斯汗の武功の註参照。

(二) 露國の東方侵略は十五世紀以降の傳統的政策である。即ち十五世紀の終に於てウラル山麓に最初の植民地を建設せしより益々其の版圖を擴張し、一五八七年にはトボルク市を、一六一九年にはイエニセイスクを、一六三二年にはヤクーツケを、一六三八年オホツク市を建設し、一六三九年コサツクの一隊はオホツク海に達した。一六五八年尼布楚河に一砦を建てた。之がネルチンスク府の濫觸である。これより清露の交渉が漸く繁くなつた。

(三) 雅克薩、露名アルバジン城。

(四) 尻布楚、露名ネルチンスク。支那名ニブチウ。

(五) 恰克圖條約、西曆一七二八年訂結、要項(1)逃亡人は兩國共に搜索して還し、(2)恰克圖に貿易場を開設する。(3)アルゲン河岸よりリチクタランに至るまではチウク河を以て界とし、以西はボモシヤナイ嶺を以て界とし、ウチを中立地とする。(4)通商の規定を改め、(5)北京に露西亞人の教會堂設立を許可する。

(六) 英佛聯合軍、鴉片戰爭の後清國は五港を開いて外國との交通頻繁となりし結果有罪の徒で外國船に投ずる者が多くなつた。一八五六年廣東に於て英吉利船アロー一號に清兵が闖入して清人十二名を捕へ英吉利の國旗を遺棄した事件と、廣西

で佛蘭西人が清人の爲に殺された事件が突發した。一八五七年英佛聯合軍は廣東城を陥れ翌年北進して直隸灣に入り、太沽砲臺を占領するに及び、清廷大に驚き一八五八年天津條約を結んで和議が成立した。

(七) 洪楊、長髮賊の首魁洪秀全と揚秀清。

(八) 英佛聯合軍、天津條約を結んで英佛聯合艦隊の南歸するや、清朝又不信の行動があつたから、英佛聯合艦隊は再び北行して太沽沖に着いた。しかるに太沽砲臺より清兵に砲撃せられて多大の損害を受けた。一八六〇年英佛は援軍の來着と共に太沽を下し、天津を取り遂に北京に入つて城外の圓明園を焼き清室の重寶珍器を掠奪した。

(九) 海參崴港、前に註す。

(十) 堡砦、前に註す。

十三、清の滿洲實邊策

清朝向來以滿洲爲禁地不准漢人出關耕墾以致有用之地拋棄如遺。到了咸豐以後因俄人勢力日漸南下清廷爲抵制起見始

十三 清の滿洲實邊策

清朝は、從來滿洲を以て禁地と爲し、漢人の出關して耕墾するを准さず、立派な土地を拋棄して遺れたやうであつたが、咸豐以後に至つて露人の勢力が、日に漸を

實行移民實邊策招民實邊以多數民力去維持邊防。這時河北山東一帶生齒日繁聽到關外土地肥沃爭來耕墾。人口之數年年增加。此種移民最初住在粗的窩棚裏大都被人僱傭逐漸積蓄財產繼而變爲細戶結果成爲大地主的也不在少數。

滿洲農業的發達實以山東移民爲主要分子而河北山西的移民爲次多數。其開發的歷史可分爲三期。

(一) 官屯期——雍正十二年至咸豐九年。雍正十二年設置呼蘭城有少數旗兵駐防屯墾這時滿洲尙爲封禁之地不准漢人出關開墾所以稱做官屯期。但滿人向

追うて南下するに鑑み、清廷は禁地抵制より後始めて移民實邊策を實行せんとして、人民を招致し邊境を充實させ、是等多數の人民を以て邊境の防備を維持することにした。この時河北、山東一帶は人口増加に苦んでゐた際であつたから、關外の土地の肥沃なることを聽き、争うて耕墾の爲に來住し、人口の數は年々増加した。此の種の移民は最初は粗陋な小屋や窩のやうな處に住んでゐて、大概人に僱傭せられて働いてゐたが、漸次財産を蓄積し、變じて小作人となり、更に進んで大地主と爲つた者が少數で無い。

滿洲の農業の發達は、實に山東移民を以て主要分子とし、河北、山西の移民が之に次で多數である。其の開發の歴史は分つて三期とすることが出来る。

(一) 官屯期——雍正十二年至咸豐九年——雍正十二年

來慣於騎射性很驕惰在此期中實際事開墾的仍是漢人——這種漢人大都是因罪謫戍於關外者的子孫——到了這期末漢人越關私墾的日漸增多道光末年呼蘭城約有旗人一萬漢人二萬餘。

(二)民墾前期——咸豐十年至光緒十三年。咸豐末年俄人南下侵略。這時黑龍江省人稀地曠。清廷鑑於內外情勢的變遷纔以招民實邊爲急務。山東河北正患人滿所以出關謀生非常踴躍。自同治七年至光緒十三年相距十九年之間呼蘭城旗營戶口增加二倍漢人則增加四十五倍。

(三)民墾後期——光緒十四年

呼蘭城を設置し、少數の旗兵が駐防屯墾した。此の時は滿洲は尙封禁の地であるから、漢人の出關して開墾するを准さなかつたから官屯期と稱するのである。但し滿人は從來騎射に慣れ、性質は至つて驕惰であるから、實際開墾に従事したものは漢人である。此の種の漢人は大概罪に因つて關外に謫戍せられた者の子孫である。此の期の末に到つて漢人の關を越え、私に開墾する者が漸次多くなつて、道光の末年には呼蘭城に約一萬の旗人と二萬の漢人が居住した。

(二)民墾前期——咸豐十年至光緒十三年——咸豐の末年露人が南下して侵略した。這の時黑龍江省は人少く土地は曠い。清廷は内外の情勢の變遷に鑑み、漸く人民を招致して邊境を充實させることを急務とした。恰も山東、河北は正に人口充滿して困つてゐた時であつたから、關

至現今。這一期的初年黑龍江省已架設電線到了光緒中葉俄人修築中東路吸收移民尤多。當該路起初建築時北滿人口不到二百萬過了二十五年竟增至一千二百萬人。新式工業也次第興起

哈爾濱附近一帶有麪粉廠、榨油廠、釀酒、製油各種工業發展甚速

以上單就是黑龍江方面而言至於吉林方面因爲墾殖關係又發生間島問題。原來長白山的周圍爲清朝發祥重地向不許內地移民所以到處人煙稀少。至咸豐時韓人至圖們江北私墾者漸衆和滿漢人雜居間島原是圖們江沿岸灘地的稱號歷年既久清韓墾戶常因耕種發生爭執。到了宣

外に出て生活を計らんとする者は勇躍して滿洲に移住した。同治七年から光緒十三年に至る十九年間に呼蘭城の旗營の戶口は二倍に増加し、漢人の増加は驚くべし四五倍に達した。

(三)民墾後期——光緒十四年至現今——這の一期の初年には黑龍江省には已に電線の架設を見るまでに進んでゐた。光緒の中葉になつて露人が中東路を修築するので移民を吸収することが最も多かつた。此の中東路起工の當初北滿の人口は二百萬に足らなかつたのが、二十五年後には一千二百萬人に激増した。新式の工業又次第に勃興し、哈爾濱附近一帶には麪粉廠、榨油廠、釀酒、製油等の各種工業が甚速に發展した。

以上は單に黑龍江方面に就いて説いた。吉林方面に至つては、開墾殖民の關係で又間島問題を發生した。元來

統元年日清雙方訂立間島協約
内載間島一帶作爲滿鮮人民雜
居區域法律上須同様受地方官
的管轄。

長白山の周圍は清朝發祥の重要地と爲し、内地の移民を固く許さなかつたから、至る處人煙稀薄であつた。咸豐の頃韓人の私に圖們江の北に至つて開墾する者が次第に多く、滿、漢人と雜居した。間島は元圖們江の沖積地帯の名稱で、久しい以前から、清韓の農家の間に耕種の事に就いて争執が絶えなかつた。宣統元年に到り日清雙方間島協約を訂結し、間島一帶は滿鮮人民雜居の區域と爲し、法律上同様に地方官權の管轄を受くることとなつた。

註 (一)出關、滿洲と支那本土との境界線たる長城には多くの關門があるが、前にも註する如く單に關といへば主として山海關を指すのである。

(二)雍正十二年至咸豐九年我が中御門天皇享保十九年(吉宗將軍職にあり)より孝明天皇安政六年(水戸齊昭蟄居を命ぜられ、吉田松陰等處刑の年)に至る凡そ百三十年間。

(三)呼蘭城、哈爾濱の北方呼海鐵道の沿線松花江の左岸にある。人口七八萬輸出の大豆、小麥等が頗る多量である。

(四)旗兵、所謂八旗の兵のことである。清朝が支那全土を統一した後、其の軍に従

つた滿洲八旗蒙古八旗、漢人八旗、等の兵を平等に特待して世襲せしめたが之等の者の中北京に在る者と、地方に在る者とがあつて地方にある者を駐防旗人といつた。其の子弟が丁年に達して操銃の試験に合格すれば、兵士に採用して俸録を給せられた。

(五)道光の末年、西歷一八五〇年頃で我が孝明天皇嘉永の初葉に當る。

(六)咸豐十年至光緒十三年、我が孝明天皇萬延元年(櫻田門外の變のありし年)より明治十六年に至る二十四年間。

(七)同治七年、我が明治元年に當る。

(八)光緒十四年至現今、明治十七年より現在まで。

(九)光緒の中葉、光緒は我が明治八年より明治四十一年に至る三十四年間續いた。

(十)中東路、現在北滿鐵道と稱せられてゐる綏芬河(ボグラニーチナヤ)滿洲里間の鐵道線路と其の支線。

(二)間島問題、間島は朝鮮の東北境界たる圖們江(豆滿江ともいふ)と其の北方の支流の間に挟まれた地方の名である。昔の金王國の發祥地であり、又渤海國の要地であつたが、二百年以前から此の間島が支那領であるか、朝鮮領であるかの問題が未解決のままで日露戰爭後まで残された。明治四十年伊藤公が韓國統監時代間島の龍井村に出張所を設けて其の地方の韓民(朝鮮人)を保護することにしたところ、清國政府は狼狽して出張所設置に抗議を提出し、猶在住の韓民に壓迫を

加へた。明治四十二年（宣統元年）日清雙方間島協約を結び、間島を支那領なることを公認して、我國は此の地方に鐵道敷設の權利を得て間島問題を解決した。其の鐵道といふのが現今有名な吉會線である。

十四、清日戦争の起因和結果

清同治年間朝鮮人鑑於清朝抵禦英法聯軍の失敗頗抱鎖國主義那時適有日艦被朝鮮擊日便和朝鮮訂約申明朝鮮爲獨立自主國家並令與各國修好於是英美德諸國相繼和朝鮮立約朝鮮的鎖國主義既破國內遂分「事大」和「開化」兩黨事大主依清國開化主依日本兩黨對抗各不相下因此國內常有亂事發生後來日本派伊藤博文到天津和清朝

清の同治年間朝鮮人は、清國が英佛聯合軍に抵抗して失敗せるに鑑み、頗る「鎖國主義」を抱くやうになつた。適々日艦が朝鮮人から砲撃された事件が起つた。そこで日本は朝鮮と條約を訂結して、朝鮮は獨立自主の國家であることを明かにし、猶各國と好を修めしめた。是に於て英、米、獨の諸國も相繼いで朝鮮と條約を結んだ。朝鮮の鎖國主義は既に破れ、國內は遂に「事大」と「開化」の兩黨に分れ、事大は主として清國に依り、開化は主として日本に依り、兩黨對抗して各相下らず、是が爲に國

大臣李鴻章議朝鮮事約定兩國均不得在朝鮮境內駐兵倘不得已派兵時必須互相通知這就叫做清日的天津條約。

清光緒二十年朝鮮有東學黨之亂到清國來告急李鴻章一面發兵一面依照天津條約照會日本告以保護屬邦之意同時日本也派兵以保護居留官民爲辭直達韓京和清兵對峙兩國兵隊就互相衝突造成清日戰爭那時清國雖新創海軍然而窺敗不堪一

内は常に亂事發生して和かで無かつた。後日日本は伊藤博文を派して天津に到り、清朝の大臣李鴻章と朝鮮に關する事を議し、「兩國は均しく朝鮮に兵を駐むることを得ず、若し止むを得ず兵を派する時は、必ず互に通知すべきである」といふ約を結んだ。是を日清天津條約といふのである。

用陸軍又沒有紀律海陸兩方完全失利日軍節節進攻北至九連安東大連旅須威海衛南迄澎湖群島數月中陷地十餘處清庭大震後得美公使的調停派李鴻章

清の光緒二十年、朝鮮に東學黨の内亂が起り、清國に到つて急を告げた。李鴻章は一面兵を發すると共に、一面天津條約の條文に照らして日本に照會し、屬邦を保護するの意を表示した。同時に日本も又兵を派して居留官民を保護するの辭とし、直ちに韓京に達して清兵と對峙し、兩國の軍隊は互に相衝突して、遂に日清戦争を造成した。其の時清國は新に海軍を創設してゐたが、脆弱で一の用にも堪えず、陸軍も又嚴たる規律が無いので、海

到日本在馬關開和議議定清日馬關條約十一條最重要的如下。
(一)清國認朝鮮爲獨立國。(二)割讓遼東半島臺灣及澎湖列島給日本。(三)償日本軍費二萬萬兩。

陸兩方共完全に利を失ひ、日軍は節々として進攻し、北は九連、安東、大連、旅順、威海衛に至り、南は澎湖群島に至るまで十餘所の地を陥れ、大に清廷を震駭させた。後米國公使の調停で、李鴻章を派して日本に到り、馬關に於て和を議し、日清馬關條約十一條を議定した。其の最も重要な條項は次の通りである。

- (一) 清國は、朝鮮の獨立國なることを認める。
- (二) 遼東半島、臺灣及澎湖列島を割讓して日本に與へる。
- (三) 日本に軍費二億兩を償ふ。

註 (一)明治八年九月我が海軍少佐井上良馨(後の大將)が軍艦雲揚號に搭乗して朝鮮南海岸を測量し、清國牛莊に赴かんとして薪水の缺乏を補はんが爲め、朝鮮漢江口に錨を投じ、端艇を出して江を溯るや、忽ち江華島(仁川の北方にある島)砲臺より激しく發砲され、我水兵二名負傷した。井上艦長大に怒り、上陸して其の不法を詰らうとしたが、彼の砲撃益々急になつたから止むを得ず之に應じて發

砲し、第一、第二砲臺を抜き、進んで永宗城を陥れ韓兵三十人を殺し、大砲三十八門及び其の武器を奪つて歸朝し政府に報告した。政府は陸軍中將黒田清隆を全權辦理大臣とし、井上良馨を副大臣として朝鮮に遣はし、不法を詰つて談判を開始し曲折を経て修好條約を結んだ。之を日韓江華條約といひ、其の最も注目すべき要點は、朝鮮が自主獨立の國家であることを明かにし、以つて清國が朝鮮を屬邦視することを否認した點である。

(二) 事大黨、明治十五年以後清の李鴻章は朝鮮の内政に干渉し、以て半島より日本の勢力を驅逐しようとして、袁世凱に兵二千を附して京城に駐在せしめ商務總辦陳樹堂等を遣はして韓廷を操縦させた。是に於て閔氏の一族は日、清兩國勢力の輕重を量つて策を定め、清國に頼つて社稷を保たんとした。大國に事うるの黨派であるから之を事大黨と稱して保守的であつた。

(三) 開化黨、獨立黨ともいふ。朴泳孝、金玉均等、官命を帯びて明治十五年日本に來り、其の滞在の間日本朝野の名士と往來し、又各國使臣と交はり大に得る所あり、朝鮮に歸り國王に説いて「日本人の義侠に富みて依頼すべき」を以てし、著著として進歩の方針を取り、宇内の大勢に順應して制度の改革を行はうとした。其の進歩せる意見を有する黨派であるので開化黨と稱した。

(四) 天津條約、明治十八年我が伊藤博文、西郷從道、清の李鴻章、吳大澂等に依つて議定せられた。

(五)東學黨、開化、事大兩黨の争は常に事大黨の政權を掌握するに歸し、開化黨は壓迫せられがちであつた。しかも政權を握る王妃閔氏の一族の專横甚しく、批政百出して怨聲四方に起つた。明治二十七年四月、東學黨なるもの全羅道古阜縣に起り、兵力を以て現政府を倒し、惡吏を一掃して弊政を改革せんとした。所在爲に騷擾し四方の暴民之に加はつて至る處、官衙を毀ち官吏を殺し、鎮撫の兵も克つこと能はず、朝鮮政府は呆然自失の状態であつた。袁世凱は之に乗じ、閔氏に勸めて清國に援を乞はせた。

(六)韓京、今の京城。

十五、清俄密約和旅大租

借條約

清日失和清廷多主聯俄。到了光緒二十一年李鴻章以全權議和於日本臨行之際俄使喀希尼對他說吾俄能以大力反拒日本。保全清國的疆土但清國須舉軍防上及鐵路交通上之便利以爲報酬李鴻章暗中默許。不久馬關

十五 清露密約と旅大租借條約

日清和を失した際、清廷は多く主として露國に憑つてゐた。光緒二十一年に到り、李鴻章全權に任じ、日本と和を議する爲將に出發せんとするに當り、露國公使喀希尼は李鴻章に對していつた。

「我露國は能く大力を以て日本に反拒し、清國の疆土を保全すべし、但し清國は須らく軍防上、及鐵路交通上

條約公布俄人遂起反對並聯合德法兩國和日人開交涉說遼東半島關係中國京畿的危險應請退還中國日本不得已許中國以銀三千萬兩贖還遼東。

俄人所以迫日退還遼東其原因有二、一、因遼東扼滿鮮中樞倘歸日領俄就不得伸手於滿洲又不得逞志於朝鮮將阻其勢力的東漸。一、因借此見好於清國以爲他日要求報酬的地步。後來俄皇加冕清國派李鴻章去祝賀俄政府即舉遼東事向李鴻章索酬並示以喀希尼預先擬就的草約勒令畫押此約共十二條最重要的許俄人建設滿洲鐵路租借膠州灣並將黑龍江和吉林長白等處五

の便利を舉げて以て報酬と爲すべきなり。」

李鴻章は暗々裡に之を默許した。久しからずして馬關條約公布せらるるや、露人は遂に起つて反對し、猶佛獨の兩國と聯合して日人と交渉を開いていつた。

「遼東半島は、中國の京畿の危險に關係す、應に請ふ退いて中國に還すべきなり。」

日本は已むを得ず銀三千萬兩の贖を以て中國に遼東を還した。

露國が日本に迫つて遼東を還附せしめた所以は、其の原因が二つある。一、遼東に因れば滿、鮮の中樞を扼する。若し日領に歸する時は、露國は滿洲に手を伸すことが不可能になる。又朝鮮に志を逞うすることも不可能である。猶其の勢力の東漸を阻止される。一、此の恩義に借口して他日清國に報酬を要求する地歩とすることであ

金礦許俄開採又爲保護鐵路計派兵駐紮這就是哄動一時的清俄密約。

膠州灣本於密約中租借俄國後來因事爲德人所佔俄人翻然變計忽以兵力襲據旅順、大連灣二軍港迫清廷改訂新約九條。其重要者有三(一)租借旅順、大連灣二港於俄國期限二十五年(二)以此二港爲西伯利亞鐵路經過滿洲的尾閘(三)凡鐵路經過地方許俄人駐兵保護。這是叫做旅大租借條約。從此滿洲主權幾全歸俄人掌握了。

る。後日露國皇帝が戴冠式を舉行されるに就いて、清國は李鴻章を露都に派して祝賀の意を表した。其の際露國政府は、遼東還附の事を舉げて李鴻章に向つて報酬を索め、前の駐清公使喀希尼をして豫め認めておいた草約を示し、強制して調印させた。此の條約は十二條から成立つてゐるが、最も重要な條項は、露國に滿洲鐵道建設を許すこと。膠州灣を租借させること。黑龍江、吉林、長白山等五箇所の金礦を露人に採掘させること、鐵道保護の爲に兵を派し駐紮するを得ること、是が一時に世人を哄動せしめた清露密約である。

膠州灣は密約中では露國が租借することになつてゐたが、後日事情に因つて獨逸の占むる處となつた。露人は翻然として計を變へ、忽ち兵力を以て襲うて旅順、大連の二軍港に據り、清廷に迫つて新約九條を改訂した。其

の中重要な條項が三つある。

(一) 旅順、大連の二港を二十五箇年の期限で露國が租借する。

(二) 此の二港を以て西伯利亞鐵道の滿洲を經過しての終驛とする。

(三) 凡そ鐵道の經過する地方には、露國に其の鐵道保護の爲に駐兵を許す。

是が旅大租借條約と呼ばれるものである。此より滿洲の主權は、幾ど全く露人の掌中に歸した。

註 (一) 戴冠式は我が明治三十九年に行はれた。

(二) 現在の北滿鐵道の建設權である。露國が之を清國に承諾させるについては、將來日本が清國を攻撃せんとする際は露國は清國救援の爲出兵し、迅速に滿洲に輸送する必要があることを理由として、清國を説き伏せたといはれてゐるが、清國としては自縛自縛に陥り、ほとんど滿洲全土を露國から奪はれたも同様であつた。此の露國の勢力を驅逐して清國の權力を主張せしめるに至つたのは日本の努力の

賜物である。露國は西曆一八九六年（清の光緒二十二年、我が明治二十九年）九月條約成立と同時に測量を開始し、一九〇一年我明治三十四年には早くも開通せしめたのである。

(三)獨逸は以前から膠州灣に目を着けてゐて、密に自國人技師に命じて調査を遂げ時機を窺ふ中、自國宣教師が支那人から殺されたのを理由として、明治三十一年十一月不意に山東省膠州灣に侵入して占領し、翌三十一年三月の條約で九十九年の期限で租借した。

(四)露國は明治三十年十二月不意に旅順口を占領し翌三十一年三月の條約で二十五年の期限で租借した。

十六、日俄戦争の起因和

結果

清廷正在多難的時候忽然起了義和團的事變俄人野心正濃便借題發揮大肆活動。一面和七國聯軍合攻京津一面又單獨進兵佔據齊齊哈爾後陷吉林而入奉天竟把滿洲看做他的屬地了

十六 日露戦争の起因と其の結果

清廷は正に多難の時期に際會し、忽然として義和團事變が勃發した。露人の野心は飽くまで濃厚である。便ち口實を設けて利權を貪る例の手段を發揮して傍若無人に活動した。一面七國と聯合して京津を攻め、一面又單獨に兵を進めて齊々哈爾を佔據し、後吉林を陥れて奉天に

後來清國和聯軍議和俄人又藉口和清國有特別關係要求另開談判。於是日本聯合英美各國出來抗阻。俄人迫於公論允許三期撤兵退出滿洲。

俄國雖然佯爲允許退出滿洲但是並無誠意當撤兵的第一期不過略減兵數到第二期不但全未撤退反在吉林省增了許多的兵額。這時候清國積弱已久無力抵抗。日本却迫不及待便和俄國直接交涉。於是滿洲問題由清俄兩國的問題一變而爲日俄兩國的問題了。

日俄磋商條件俄人態度強硬經久不決交涉因而決裂。日政府遂和俄國斷絕外交關係公布宣

入り竟に滿洲を自己の屬地の如く看做した。後日清國は聯合國と和を議するに、露人は又清國と特別なる關係あるに藉口して、別に談判を開かんことを要求した。是に於て日本は英米各國と聯合して之を抗阻し、露人も又公論に迫られ、三期に分ちて撤兵し、滿洲より退去すべきことを允許した。

露國は佯つて滿洲退出を允許したとはいへ、但し猶無誠意である。撤兵の第一期に當つては、僅かに兵數を減じたに過ぎない。第二期に到り撤兵せざるのみならず、反つて吉林省に於ては多數の兵員を増加した。この時清國は積弱已に久しく、抵抗の力は全く無いから、日本は清國を待たずして露國に迫つた。是に於て滿洲問題は清露兩國の問題より一變して日露兩國の問題となつた。

日、露條件を磋商するに、露人の態度強硬で、久しき

戦。光緒二十九年十二月兩國開戦把遼東一帶做戰場。清國不得已割遼河以西爲中立地宣布嚴守中立。那時俄國原有充分準備聲勢極盛。不料開戰後艦隊被殲日軍節節進攻連陷旅順奉天。戰爭結果俄國大敗。遂由美總統出來調停兩方才罷兵議和。重要的條件是(一)把東省鐵路支線從長春以南割讓日本。(二)旅順大連都轉租於日本。(三)承認日本單獨經營朝鮮。(四)把庫頁島的南半割給日本。(五)俄國撤退駐紮滿洲的軍隊。

日俄戰爭以後日本又和清國訂立滿洲善後協約由清國承認將旅順大連轉租於日本長春以

を經るも決せず、交渉は決裂して、日本政府は遂に露國と外交關係を斷絶し、宣戰を公布した。光緒二十九年十二月兩國は開戦し、遼東一帶を戰場とした。清國は止むを得ず遼河以西を中立地と爲し、中立嚴守を宣布した。其の時露國は軍事に關しては豫め充分の準備を有し、聲勢極めて盛んであつたが、料らずも開戦して見れば、其の艦隊は殲滅せられ、日軍は節々として進攻し、旅順、奉天等連續して陥り、戰爭の結果は露國の大敗に終つた。遂に米國大統領の調停により漸く兵を罷め和議が成立した。其の重要な條項は次の通りである。

- (一) 東省鐵道支線の長春以南を日本に割讓する。
- (二) 旅順、大連は都て日本に轉租する。
- (三) 日本の單獨朝鮮經營を承認する。
- (四) 庫頁島の南半を日本に割給する。

南的鐵路轉讓於日本於是日本設立南滿洲鐵道株式會社並把租借地稱做關東州。

(五) 露國は滿洲に駐紮する軍隊を撤退する。
日露戰爭以後、日本は又清國と滿洲善後協約を訂結し、旅順、大連を日本に轉租すること、長春以南の鐵道を日本に轉讓することを清國に承認せしめた。是に於て日本は南滿洲鐵道株式會社を設立し、猶租借地を關東州と稱した。

註 (一) 義和團、我が國にては普通北清事變といはれる。明治三十三年山東省内に起り耶蘇教の撲滅と、外國人の清國壓迫を憤り之を排斥するを目的としたもので、義和拳といふ一種の拳法を習つてゐた團體であるから、義和團又は拳匪ともいふ。鐵道を毀ち、家屋を焼き外國人を殺し、暴虐の限りを盡した。皇族端郡王等は反つてこれを保護し、更に獎勵する様子があつたから暴徒の勢益々猖獗を加へ、遂に北京に入り列國の公使館を攻撃し、我が外務書記生杉山彬、獨逸公使ケットレル等は凶刃に斃れた。

(二) 七國、日、英、米、獨、佛、奧、伊の七國である。露國を加へて八國の聯合軍を我が福島安正少將が指揮し、先づ天津を略取した。北京は猶重圍にあつて事態甚だ急であつたが、我が第五師團を引率して山口素臣中將來着し聯合軍を指揮し

て北京に向ひ、同年八月十四日我が軍先頭して諸門を破つて突入し城中の各國人を救援した。獨逸はワルデルゼー元帥を派して聯合軍總指揮官たらしめようとしたが、同元帥到着の時は既に各國人は救援されてゐた。

(三) 京津、北京と天津。

(四) 露國が北清事變の混亂を好機として單獨に滿洲各地を占領せし地名は本文中の齊々哈爾、吉林、奉天の外環輝、呼蘭城、琿春、三姓、寧古塔、鐵嶺、熊岳城、安東、遼陽、鞍山、金州、牛莊、錦州等で其の如何に大膽且つ傍君無人に行動せるかがうかがはれ、眞に驚くの外は無い。

(五) 露國が滿洲より撤兵すべき條約は、明治三十五年四月成立した。即ち條約調印後六ヶ月以内に盛京省(今の奉天省)西南部の撤兵。次の六ヶ月以内に盛京の殘部と吉林省内に在る軍隊の撤兵。最後の六ヶ月に黑龍江省内の軍隊の撤兵。

(六) 此の時朝鮮の北境附近にまで兵を移動し、朝鮮(當時韓國)政府及宮中に勢力を扶植して恰も日清戦争以前の支那の如き状態となつた。

(七) 我が國は駐露公使栗野愼一郎をして、露國と交渉したが、數次の折衝も效なく露國は我が要求に應じなかつた。

(八) 清國は大陰曆を用ふ。日露戦争は明治三十七年二月開戦せられた。

(九) 米國大統領ルーズベルト氏の調停により、米國ニューハムプシア州のポーツマスに於て我國の小村壽太郎、高平小五郎、露國のウキツテ、ローゼン等によつて

條約が成立した。時は明治三十八年九月で、之をポーツマス條約といふのである。

(十) 朝鮮は此の條約成立後、明治四十三年併合に至るまで日本の保護國となつた。

(十一) 庫頁島、樺太島。

(十二) 滿洲善後協約、北京條約ともいふ。明治三十八年十二月我國の小村壽太郎、内田康哉、清國の慶親王、袁世凱等によつて成立す。

(十三) 關東州、此の名稱はロシアが此の地を統治した時の政治的地名の踏襲である。遼東半島の先端北緯三八度四二分の線から三九度二八分の地點に及び、東經一二一度七分から一二三度一六分の線に達し、長さ一二〇キロ幅四〇キロ強、面積三四八六平方キロ(二二〇方里)で事實上猫額の地で臺灣の約十分の一、しかも千山脈の餘勢が半島の脊梁をなしてゐるから一般に稜嶺の地で農耕地としての價値は無い。

十七 清の變法と遜位

近代歐洲の白色人種勃興してより後、全世界の有色人

種の國家は、日本が維新の大業を恢弘して獨力强盛を矜

るの外、一國として漸次衰弱するか、或は覆亡的狀態に

趨かない國は無い。清國も此の情勢下に在つて危亡の絶

十七、清的變法和遜位

自從近代歐洲白色人種勃興

以來全世界有色人種的國家除

日本因維新而自強之外沒有一

國不是漸趨於衰弱或覆亡的。清

國在這種情勢之下自然瀕於危

亡の絶境了。到了光緒三十一年因爲日本戰勝俄國於是日以立憲而強俄以專制而敗的議論大盛清廷才派大臣出洋考察憲政考察的結果一致贊成立憲德宗光緒帝銳意革新遂於三十二年下詔預備立憲同時廢科舉立學堂裁汰舊軍改革官制變法之令聯翩而下。

不幸德宗蓄志未償忽然駕崩立侄兒溥儀爲皇帝便是宣統帝。其時他只有三歲生父載灃攝政監國於京師設資政院於各省設諮議局以爲實行代議政治的初步。清廷雖汲汲於立憲的設施但是親貴用事政治殊少進步。各省人民請求早日實行立憲速開國

境に瀕した。光緒三十一年に到り、日本は露國と戦つて勝を得たことから「日は立憲を以て強し、露は專政を以て敗る」といふやうな議論が盛んに唱へられた。清廷は大臣を派して諸外國の憲政を考察させたが、考察の結果一致して立憲に賛成した。德宗光緒帝は革新に銳意し、三十二年詔を下して豫め立憲に備へ、同時に科舉を廢し、學校を立て、舊軍を裁汰し、官制を改革するなど變法の令が續々として下つた。

不幸にも德宗の宿志未だ償はざるに、忽然として崩じたから、其侄溥儀を立てて皇帝とした。是が宣統帝である。其の時彼は僅かに三歳であつたから生父載灃が攝政となつて國務を見、北京に資政院を設け、各省に諮議局を設け、以て代議政治實行の初步たらしめた。清廷は立憲の施設に吸々たる有様であつたが、但し尊貴の人々の

會清廷不許。到了宣統三年清政府打算實行鐵路國有政策大遭四川人民的反抗竟成熟了革命的機會。

宣統三年十月十日革命黨人和軍隊聯合在武昌起事建立中華民國軍政府推黎元洪做都督。後來各省次第響應革命軍佔領南京。選舉孫文爲臨時大總統在南京就職。設立中華民國臨時政府。這時清廷用袁世凱做內閣總理大臣遣使和民國政府議和兩方因爭執國體問題日久不決。忽有北方各將領段祺瑞等通電勸告清廷退位。清隆裕太后知道大勢已去乃率宣統帝下詔書三道宣統遜位。其一說國體一日不決民

する仕事であるから、政治方面の能率は一向擧がらなかつた。各省の人民は一日も早く立憲を實行し、國會を速開せんことを請求するが、清廷は之を許さなかつた。宣統三年に到り、清國政府は鐵道國有策を實行せんと企畫し、大に四川省民の反抗に遭ひ、竟に革命の機會を成熟せしめた。

宣統三年十月革命黨人は、軍隊と聯合して武昌に於て事を起し、中華民國軍政府を建て、黎元洪を推して都督とした。後來各省次第に響應し、革命軍は南京を佔領し、孫文を選舉して臨時大總統と爲し、南京に於て就職し、中華民國政府を設立した。この時清廷は袁世凱を內閣總理大臣と做し、使を遣はして民國政府と和を議し、兩方國體問題を執つて争ひ、日を久しうするも決せなかつた。忽ち北方將領に段祺瑞等があつて、通電して清廷に退位

生一日不安特將統治權公諸全國定爲共和立憲國體其二就是宣布民國優待皇室及皇族諸條件其三是退位後維時京師內外秩序及告誡各省疆吏文此詔既下清祚告終了。

を勸告した。清の隆裕太后は大勢の己に去るを察知し、宣統帝をして三通の詔書を下さしめ、宣統は位を遜れた。其の一に説はく、國體一日決せざれば民生一日安からず、特に統治の權を將つて諸れを全國に公けにし、定めて共和立憲國體と爲す。其の二は、民國が皇室及皇族を優待すべき諸條件を宣布したのである。其の三は、退位後京師内外の秩序を維持するの件と、各省等の地方官吏に誠告する文である。此の詔既に下り、清祚は終を告げた。

註

- (一) 支那の積弱を救ひ、國權伸張を計らんとする考へは北清事變後支那國民中の有識者に萌してゐたが、日露戦争の後急に盛んになつたのである。
- (二) 五名の委員を任命し、其の五名が日、英、米、獨、佛諸國に赴いて約八ヶ月を費して歸朝した。我明治三十九年である。
- (三) 我が明治四十一年八月憲法大綱が發布された。それには君主の大權と人民の權利義務との要領を示し、併せて議院法を附加し、議院開設まで九年間に實施すべき政治の要目をも併せて發表した。
- (四) 科擧、支那では唐、宋以後清の末葉即ち本課に説く所の廢止令の出るまで、官吏を登用する爲の試験を科擧といつてゐた。科目に應じて選舉せらるるの意である。

五) 載灃、光緒帝の弟醇親王。

六) 明治四十三年北京に資政院が開かれた。資政院は將來の國會の基礎となるべきもので、議員は或る種の制限で選舉されたものである。

七) 諮議局、明治四十二年各省に設けられた。日本の府縣會の如きものであつて、地方自治を實施する趣旨から此の諮議局が開かれた。議員は前と同じく選舉されたものである。

八) 鐵道國有策、宣統三年(明治四十四年)鐵道幹線國有令を出したが、其の國有計畫の中に、四川省と湖北省とを連ぬべき川漢鐵道(成都から漢口に至る)が含まれてゐた。この一線は曩に民營とする許可を得たものであるから、四川省民は自分等の利益を侵害されるものと考へ、種々の不安もともなひ國有反對を叫んだのである。

九) 革命黨、主唱者は孫文(字は逸仙)で廣東人、協力したのは黃興で湖南人である。この二人の外革命運動に参加したのは多く右の二省出身者である。

十) 黎元洪は當時武昌駐屯の第三十九旅長(旅團長)であつたが、革命黨に推されて其の指揮者となつた。

十一) 袁世凱、彼は當時支那第一流の政治家であつたが、清朝の忠臣ではなかつた。

革命黨人の團結強固ならざると、財政の困難なるに乗ずれば、其の討伐は袁氏の力を以てすれば、容易ならざるまでも不可能事ではなかつたと考へられる。しかるに之を取上げてしなかつたのは自己の野望を達せんが爲である。彼は後日孫文と妥協し中華民國臨時大統領となり、更に再び共和制を覆して帝制を布き帝位に即かんとまで企てたのである。

(二)段祺瑞等四十六將領は袁世凱に嫉かされて清廷に退位を迫つたのである。即ち袁世凱は清朝の宰相となり、最も悪辣な手段を以て清朝を倒したのである。

(三)隆裕太后、先帝德宗(光緒帝)の皇后。

(四)宣統帝の退位は我明治四十五年二月で、明治天皇崩御に先つこと五ヶ月、太祖愛親覺羅氏より十二代、太宗の明を滅ぼしてより約二百七十年である。

(五)本詔書の文面によれば、民國共和政府は清帝の認可によつて成立したもので、法理的には革命とは關係は無いわけである。

(六)清室優待條件、退位後も皇帝の尊號を廢せず、民國は待つに各國君主に對する禮を以てし、歳費四百萬元を民國より贈る。猶舊城(紫金城)に住することが出来る。その他清室の私有財産保護のこともあつたが、しかし約束など何とも思つてゐない南方政府の要路の人々は四百萬元の年金を給したのは、僅かに一回きりで、そのみでなく非常な壓迫を宣統帝に加へた。民國十三年(大正十三年)北方軍閥の巨頭馮玉祥は「宣統帝が皇帝の稱號を有して、北京城内に居るのは共和

十八 最近の滿洲

滿洲本爲清朝發祥之地不料清宣統帝遜位以後竟入張作霖的勢力範圍了。緣由革命變亂的時候趙爾巽總督東三省駐在奉天召洮南巡防統帶張作霖做自己的羽翼到了民國初年改變陸軍張作霖任二十七師師長。五年他驅逐了段芝貴而任奉天督軍。後又陞任爲東三省巡閱使及蒙疆經略使。那時滿洲全部和東蒙一帶的主權都落在他的掌中了。張作霖既據滿蒙地盤便想覬覦中原。民國七年時奉天已派兵

十八 最近の滿洲

政治に害がある」として脅迫したので、宣統帝は父祖三百年の皇居を退出して、天津日本軍司令部附近に佗住居をされた。

滿洲は元清朝發祥の地である。料らずも清の宣統帝遜位の後、竟に張作霖の勢力範圍に入つた。革命變亂の時期に當り、趙爾巽が東三省を總督して奉天に駐在してゐたが洮南の巡防統帶張作霖を招き自己の羽翼とした。民國初年に到り陸軍を改編して、張作霖は二十七師の師長に任じた。民國五年段芝貴を驅逐して奉天督軍に任じ、後又東三省巡閱使及蒙疆經略使に陞任した。此の時から滿洲全部と東蒙一帶の主權は、都て彼の掌中に落ちた。張作霖は既に滿蒙の地盤に據つて、便ち想は中原の覬覦にあつた。民國七年己に奉天の兵を派して入關せしめ

入關及九年直皖戰起張作霖通電助直便再派兵皖軍敗後又陸續添派前後共有二師多人。至民國十年他利用梁士詒組閣操縱中央。直系軍人當然不滿乃攻擊梁閣對奉示威。十一年一月張作霖通電爲梁辯護一面藉口換防陸續增兵。不久便把入關的兵定名爲鎮威軍通電以武力促進統一爲名和直軍宣戰。四五月間兩軍交戰奉軍大敗。張作霖不得已退守灤州繼又退出山海關。這便是第一次直奉之戰。

民國十二年曹錕賄選成功浙江督軍盧永祥和張作霖都表示反對。直系的吳佩孚竭力主張武力統一。先使江蘇督軍齊燮元出

たが、民國九年に及び直皖戦が起ると、張作霖は通電して直隸派を助けて再び兵を派し、皖軍敗れし後も陸續として増派し前後二師の多きに達した。民國十年に到り彼は梁士詒の組閣せるを利用して、中央政府を操縦して我意を遂げた。直隸系の軍人は當然不滿である。乃ち梁内閣を攻撃して奉天派に對して示威した。民國十一年一月張作霖は通電して梁の辯護を爲すと共に、一面換防に藉口して陸續として増兵した。久しからずして入關の軍隊の名を定めて鎮威軍と爲し、通電して以て武力統一の名と爲し、直軍に對して宣戦した。四、五月の間兩軍交戦して奉軍は大敗した。張作霖は已むを得ず退いて灤州を守り、次いで又山海關を退出した。是が便ち第一次奉直戦である。

民國十二年曹錕は賄して大總統選舉に成功した。浙江

兵解決浙局於是十三年九月間齊盧兩軍便在上海黃渡一帶開釁。當戰爭起時張作霖便趁勢報復也派兵入關攻直。作戰甚力竟占領山海關吳佩孚方謀全力對付奉天而馮玉祥暗與奉方妥協忽班師回京發電主張和平吳佩孚不得已回師天津終於敗走。這便是第二次直奉之戰。

張作霖既聯馮攻吳打倒直系就把勢力伸張到江蘇安徽等省並掌握北京政府的實權。但不久他又和馮不睦部下郭松齡竟附馮而背叛大局危迫祇在旦夕。後來幸得舊部努力攻滅郭氏。民國十五年他又進兵京津。十六年稱大元帥。這時國民革命軍蔣中正

督軍盧永祥と張作霖は都て反對を表示した。直隸系の吳佩孚は力を竭して武力統一を主張し、先づ江蘇督軍齊燮元をして、出兵して浙江の局を解決せしめた。是に於て民國十三年九月の間、齊、盧の兩軍上海黃渡一帶に於て開戦した。此の戦争の起つた時、張作霖は大勢の趨くに乘じて報復せんとし、又兵を派して入關して直隸軍を攻め、奮戦力闘竟に山海關を占領した。吳佩孚方も全力を傾倒して奉天軍に應戦したが、しかし馮玉祥が暗に奉天方と妥協し忽ち師を班して北京に回り、通電して和平を主張した爲に、吳佩孚は已むを得ず師を天津に回へし、敗走に終はつた。是が便ち第二次奉直戦である。

張作霖は既に馮と聯合して吳を攻め、直隸系を打倒して勢力を江蘇、安徽等の省に至るまで伸張し、猶北京政府の實權を掌握したのである。但し久しからずして彼は

崛起於南方聯絡閻錫山馮玉祥直逼京津張作霖不得已於十七年退回奉天在途中被炸而死。

張作霖死後他的兒子學良繼承父業稱東北保安總司令後來和國民政府妥協改任東北邊防司令長官十九年他因幫助蔣中正攻擊馮馮做了中華民國陸海空軍副司令二十年他久住北京不回奉天。竟於九月十八日發生空前絕後的事變。他的勢力完全被逐於滿洲以外。二十一年二月間東北各省長及蒙古王公等會議於奉天議決建立新國家國號滿洲年號大同三月九日推戴清遜帝溥儀爲執政。建都長春定名新京。從此新國建立物歸故主世

又馮と睦じからず。部下郭松齡が馮に附いて叛軍を起し大局危急なること唯旦夕の觀があつたが、幸にして舊部將の努力を得て郭氏を攻滅した。民國十五年彼は又兵を京津に進め、十六年には大元帥と稱した。この時國民革命軍蔣中正が南方に崛起し、閻錫山、馮玉祥と聯絡して直ちに京津に迫つた。張作霖は己むを得ず民國十七年退いて奉天に回つたが、其の途中に於て爆撃せられて死んだ。

張作霖の死後、其の兒子學良が父業を繼承し東北保安總司令と稱した。後日國民政府と妥協し改めて東北邊防司令長官に任じた。民國十九年彼は蔣中正を幫助して閻馮を攻撃したことに因つて、中華民國陸海軍副司令と做つた。民國二十年彼は久しく北京に住して奉天に回らず、竟に九月十八日空前絶後の事變發生し、彼の勢力は完全

界歴史上又添了重要の一頁了。

に滿洲以外に逐はれた。民國二十一年二月の間東北各省長及蒙古王公等、奉天に於て會議し、新國家建立を議決した。國を滿洲と號し、年を大同と號する。三月九日清の遜帝溥儀を推戴して執政と爲し、都を長春に建て名を新京と定めた。此より新國建立せられ山河民人故主に歸し、世界の史上に又重要な一頁を添へた。

註 (一)直皖戰、皖は安徽省一帶の古名である。直皖戰とは直隸派と安徽派との權力爭奪の爲の戰爭をいふ。何れも政派的軍閥で各其の首領の出身地の名を冠したものである。當時直隸派は曹錕、吳佩孚等に率ゐられ、安徽派は段祺瑞、徐樹錚等が統べてゐた。

(二)梁士詒、當時政界の一派交通系と呼ばれた勢力の中心人物である。張作霖は自己の勢力伸張の爲に、靳雲鵬内閣を倒し梁士詒に代らせたのである。

(三)直隸系軍人、吳佩孚、馮玉祥、齊燮元、陳光遠等。

(四)直隸軍は保定附近に集注し、奉天軍は北京、天津の線に在り、四月二十七日より砲火を交へ、五月五日長辛店附近の戰鬪に於て奉天軍は撃破された。

(五)黎元洪が直隸派の壓迫で大總統を辭した後、直隸派は種々陰謀を廻らし、買収その他で漸く合法の定員を集めて國會を開き、其の選舉會で曹錕が當選した。

(六)此の戦争では廬永祥が破れ、一時日本に亡命した。

(七)直隸軍總司令吳佩孚の命に依り、熱河方面に出動中の馮玉祥は、豫てから吳と好くなかつたが、此の時直隸派の有力者王承斌、胡景翼等と通謀して俄かに北京に乗り込んで之を占領し、反つて吳佩孚の背後を脅した。之が爲に直隸軍は大に動搖して奉天軍の進路を遮ぎることが出来ずして敗走した。吳佩孚は船に乗つて遼く揚子江を遡り岳州に落ちた。馮玉祥が宣統帝を北京から追出したのは此の戦の直後である。

(八)奉天系の勢力、李景林を直隸督理に、張宗昌を山東督理に、楊宇霆を江蘇督理とした。

(九)郭松齡は奉天軍の一部を率ゐて山海關内に居たが、馮玉祥に内通して張作霖に叛き、民國十四年十一月二十四日山海關を占領し、十二月上旬には軍を東北に向け、直ちに奉天を指して進撃したので、流石の張作霖も極度に狼狽し、將に奉天を脱出せんとするまでになつてゐたが、郭松齡は滿鐵沿線で兵火を交ゆるを得ずといふ日本の警告があつた爲に、専ら遼河以西の地區に軍事行動を制限せられ、且つ糧食彈藥の補充意の如くならず窮境に立つた。十二月二十四日、昔は張作霖の朋友であり今は其の配下となつてゐる黑龍江省督辦吳俊陞の力戦に敗られ、其騎團の爲に捕へられて殺された。日本が鐵道附屬地警備の爲に出兵したのは、郭氏戦歿に先つこと僅かに九日であつた。しかも支那の内争不干渉を堅持する日本は、出兵發令の當日まで時の在野黨政友會の質問に對し、宇垣陸相は未だ其の時機にあらずとの答辯を與へた位である。

(十)張作霖は郭氏討滅後、滿洲内政の整理に没頭し、關内不進出を標榜してゐたが、反對派である馮玉祥の國民軍を掃蕩せんとして又々出兵した。

(十一)昭和二年六月北京に中華民國軍政府を建てて其の大元帥となつた。

(十二)蔣中正、蔣介石である。彼は前後二回主として張作霖打倒の爲に北伐を決心した。第一回は民國十六年四月南京に於て部署を定め、揚子江を渡り津浦線に沿うて北上し、五月に山東に侵入して濟南を突かんとする形勢であつたから、我田中内

閣は山東に出兵した。しかし蔣介石も後方に於て南京派、武漢派の軋轢の爲に後顧の憂があつて北伐を中止し、一時下野して日本に來遊した。我山東派遣軍も濟南の危機去つて八月下旬撤退した。第二回は南京派、武漢派の妥協合同があつて、民國十七年(昭和三年)一月蔣介石は再び國民革命軍總司令に復職し、二月蔣、馮、閻三軍の協同作戰の計畫成立、四月中旬蔣介石は北軍を壓迫して山東に進出し、馮軍の一部は四月十六日濟南に迫つて來た。我が田中内閣は在留邦人現地保護の爲、第二次山東出兵を執行し、熊本第六師團が青島に上陸したのが四月二十五日である。四月三十日北方派の張宗昌、孫傳芳等は濟南を捨て北に奔り、五月一日革命軍は濟南に入城した。不幸にして我が派遣軍と革命軍との間に衝突を生じ、濟南事件を惹起したのが五月三日である。濟南の陥落は北軍に大動搖を與へ、張作霖も遂に滿洲へ、退去を決心したのである。

(十三)民國十七年(昭和三年)六月三日張作霖を乗せた列車は北京を發して京奉線(民國政府は北寧線といひ、現在は山海關以東を奉山線といふ)を走つて六月四日早朝奉天に到着の直前、即ち滿鐵本線との交叉點(京奉線は高架)にさしかかつた際、轟然たる大音響と共に列車は爆發せられ、黑龍江省督辦吳俊陞も張作霖と共に斃れた。

(十四)我が政府は滿洲が支那内地の戦亂に捲込まれるのを好まなかつたのみならず、支那内地に蔓る國民革命の氣運の滿洲侵入を喜ばなかつたから、張學良に對して國民政府との妥協を中止さすべく屢々勸告を試みたのであるが、學良は日本の勸告に耳を藉さず、民國十七年十二月二十八日東三省邊防總司令に就任し、翌二十九日國民政府に服従する旨を發表し、東三省に於て青天白日旗を掲揚すべきことを發令した。即ち五色旗を廢したので之を學良の易幟といふのである。

(十五)閻と馮は曩に蔣と聯合して張作霖を北京より驅逐したが、後日蔣介石の獨裁的處置に憤慨して、蔣介石打倒を聲名し、且つ實行に着手したから蔣が之を攻撃したのである。

(十六)閻、馮の勢力を驅逐した後は、學良の勢力が山東、河北の要地に伸張したから、政治的にも必要であつたであらうが、

一面學良の遊蕩的性行も加はつて久しく北京に滞留したのだといはれてゐる。

(七)支那の根底深き排日は近時は變じて毎日行爲となり、最近に於ては挑戰的態度すら現はすに至り、帝國を輕侮すること甚しく、既締の條約に悖り之を無視し、或は不合理なる國內法に依り陰かに條約の效力を殺ぎ、或は國情の不定に藉口し在再日を過して實行を爲さざる等、實に其の不誠意不信行爲は言語に絶するものがあつた。事變勃發以前まで懸案として残つたものが、鐵道に關するもの、居住權に關するもの、商租權問題、不當課税に關する問題等、三百餘件の多きに達すると謂はれるが、其の根本は皆我國を輕侮するの念が増長したからである。民國二十年(昭和六年)九月十八日夜、奉天北郊柳條溝に於ける支那正規兵の我南滿鐵道の爆破事件は、正に是等諸懸案の根本的清算の時機が到來したのかも知れない、隱忍に隱忍を重ねた我國は權益擁護の爲に敢然として起つた。我皇軍一たび立てば實に神兵の如く、果敢なる行動は電光石火、間髪を容れずして暴戻なる張學良政權を粉碎し、舊軍閥の勢力を奉天省内各地及び滿鐵沿線から一掃してしまつた。

(六)省民の怨府となつてゐた各地支那軍の敗退は從來抑壓されてゐた地方人民に暴虐なる軍閥を排除し、政治を其の手中に奪回する好機を與へたのであつた。舊軍閥から獨立した各省各地の勢力者を中心にして發生した自治運動は、次第に滿洲を支那本土から完全に分離し、ここに新たな獨立政權確立の要望と化し、この要望は事變の進展につれ漸次具體化し、更に再轉して獨立國家創設の方向に進化するに至つた。かくて東北三千萬民衆安住の樂土建設の建國運動は進展し、昭和七年二月十七日に至り東北新政權たる東北行政委員會の成立を見、翌十八日早くも獨立宣言を發するに至つた。

◎獨立宣言、東北に事變發生以來、瞬息の間に既に數月を経たり、人民は平和の治を望むの情熾んなること、飢渴に食水を求むるが如し、この更始一新の際に當り、愈々復活蘇生の願切なるものあり、景惠等は忝けなくも推舉せられ省區の領袖となる。舊を革め新を洗ふの責任は他にかす能はず、ここに大計を協議するため一堂に會合せるが、皆曰はく、磊固な

る國體にあらざれば、以て全面を策るに足らず、人民の公意に基くにあらざれば、以て新猷を樹つるに足らずと。ここに於て東北四省と一特別區及び蒙古各王公により一機關を組織し、東北行政委員會と命名したり。本會成立と共に内外に通信を發し、これより黨國政府と關係を離脱し東北省區は完全に獨立せり。よつて獨立の精神を以て努めて行政の改善を計るべし。先には軍閥が政を敷き横暴誅求これつとめ、爲に民衆は熱火除水の中に在るが如く、殆ど生命さえ保持し得ざる状態にて、鄉村に普き痛苦の涙未だ乾かず、虎狼に等しき爪牙の餘毒尙存在す、これは將に徹底的に根絶すべき所にして、再び枝節を生じ蔓延せしむべからず、古教に曰く、民を撫するもの之を后といひ民を安んずるもの之を王といふとあり、一般民衆は蘇生して安息を得ば、善良の政治は即ち完了するものとす。これ本會の第一使命なり。近來良民を虐げ專制政治は利を肆にし、恨を集め、社會の道德は日に漸く消耗せんとす。社會は即ち國家の基礎なり、道德は政治の本源に繋れり、古書に忠信篤敬なれば蠻貊の國と雖行はるべしとあり。排外の政治を持せず、ここに國際の戦をやめ、更に門戸開放と機會均等主義を以て、世界の民族と共に共存共榮を計らん。これ本會第二の使命なり。

内を安んじ外に睦くするは政治の根本なり。既に根本の強固を圖る、宜しく枝幹の繁榮を講ずべし。従つて職業を精勵勸進し農工商を發展せしめ、利を生ずる者をして日に多からしめ、業を失ふ者をして日に少からしめば、社會の利益均霑され階級闘争は日に滅びん。斯くの如くんば赤化は行はれず、民生は期して得らるべし。これ本會第三の使命なり。景惠等は以上の三大使命を完成する爲即ち此の會を作り我が東北各省の人民の爲幸福を求めんとす。これ一面に我が東亞各種族人民の爲に幸福を求むる所以なり。天日は天にあり、この宣言を照鑑さる。邦人君子夫れ興起して我等を助けよ。

二月十八日

張景惠 臧式毅 熙洽
馬占山 湯玉麟 凌陞

齊 王

越えて三月一日に至り奉天、吉林、黒龍江、熱河の四省及呼倫貝爾、東省特別區は一團となつて新國家満洲國を建設し、同日建國宣言を満洲國政府の名で發布した。

◎建國宣言、我が滿蒙の地は邊陲に屬し開國縣遠なり、これを往昔に徵するに分併稽ふべし、地質膏腴にして民風は樸茂なり、解放を経るに及んで生聚日に繁く物産豐饒實に奥府となす。しかるに辛亥革命後共和國成立して以來、東省の軍閥は中原變亂の機に乗じて政權を攫取し三省に據りて己れの有となし、龜縮相繼ぎて竟に將に二十年ならんとす。狼厲貪婪驕奢淫佚を逞うして民生の休戚を顧みることなく唯々私利をこれ圖る、内は暴斂横征を恣にして揮霍し、其の結果幣制紊亂し百業凋零するに至れり、且つまた時に野心を逞くして兵を關内に進め、地方を擾害し、民命を傷殘す、一再敗衄するもなほ悛悔せず、外は信義を蔑棄して釁を隣邦に開き悉く親仁の規に昧く、専ら排外を事とし、加ふるに警政修らざるを以て盜匪横行して四境に遍く、到るところ擄掠焚殺して村里は一空となり、老弱は溝壑に陥り、餓殍は途に載す、我が滿蒙三千萬の民衆が、命をこの殘暴無法なる區域の内に託するは死を待たんのみ、何ぞ能く自ら脱せんや、今や何の幸ひぞ、手を隣師にかりてこの醜類を驅り、積年軍閥盤踞し秕政萃聚せる地を一旦にして廓清す、これ天わが滿蒙の民に蘇息の良機を與へしなり。吾人の當に奮然として興起し邁往勇進、以て更始を圖るべきなり、唯是れ内中原を顧みれば、改革以來はじめは群雄角逐して頻年戰爭、近くは一黨專横にして酷政を恥ぢず、何をか民生と曰ふ、實にこれを死に置くなり、何をか民權と曰ふ、惟利を専らにするなり、何をか民族と曰ふ、惟黨あるを知るのみ、既に天下公と爲すといひ、又黨を以て國を治むといふ、矛盾乖謬にして自ら欺き人を欺く種となる。詐僞は窮詰するに勝へず、近來内訌しばしば起り疆土分崩し、黨すら自ら存すること能はず何ぞ能く國を顧みんや、是に於て赤匪は横行し災禍はしきりに起る、毒は海内を痛ましめ、民怨沸騰し政體の不良に痛心疾首して曩昔に於ける政治清明の時代を追思し、唐虞三代の遠きは幾んど及ぶ

べからず、これ我が友邦のともに目睹し同じく感歎を深くするところなり。夫れ二十年試験の得る處を以てすれば其の結果ここに至る、亦廢然として返るべきなり、しかるに猶疾を諱み醫を忌み其の舊惡を怙み、民意は新に抑遏すべからざるに詞を藉らんか、然らば其の往く所をほしいままにすれば、共產に至り自ら亡國滅種の地に陥るにあらざれば已まざらんとす、今にして我が滿蒙民衆は天賦の機縁に於て、萬惡なる政治國家の範圍外に振拔して自ら脱することを求めざれば勢必ず皆溺れ、同じく盡くるに至らんとす、數箇月來しばしば奉天、吉林、黒龍江、熱河、東省特別區、蒙古各旗盟の官紳士民の集合を経て、詳に研討を加へたる結果、意思既に一致し、思へらく爲政は多言を取らず、ただ實行如何を見るのみ、政體は何等を分たず、ただ安居集團を主と爲す、滿蒙は舊時本國と別に一國たり、今や時局の必要により自ら樹立を謀らざる能はずと。即ち三千萬民衆の意向を以て即日中華民國と關係を離脱し、滿洲國を創立することを宣言し、ここに特に建設綱要を中外に昭布し咸聞知せしむ。窃かに維ふに政は道に本づき、道は天に本づく、新國家建設の旨は一に天に順ひ民を安んずるを主とす、施政必ず真正の民意に徇ひ、私見を存すことを容さず、凡そ新國家の領土内に居住する者は皆種族の岐視尊卑の分別無し、原有の漢族、滿族、蒙族及び日本、朝鮮の各族を除くの外、即ち其の他の國人と雖長久に居住を願ふ者は亦平等の待遇を享くることを得、其應に得べき權利を保障し其れをして絲毫の侵損あらしめず、並びに極力往日の黑暗政治を剷除し法律の改良を求め、地方自治を勵行し、廣く人材を收めて賢俊を登用し、實業を獎勵し、金融を統一し、富源を開墾し、生計を維持し、警兵を訓練し、匪禍を肅清す、更に進んで言へば教育の普及は當に禮教を崇ぶべし、王道主義を實行して必ず境内一切の民族をして熙々皞々として春臺に登るが如くならしめ、東亞永久の光榮を保ちて世界政治の模型と爲さんとす。其の對外政策は信義を尊び力めて親睦を求め、凡そ國際間の舊有の通例は謹みて遵守せざることを無く、其の中華民國以前各國と定むる所の條約にして債務の滿洲新國家領土内に屬するものは、皆國際慣例に照らし繼續承認す。商業を創興し利源を開拓するため、我が滿洲國に投資を希望するものあれば、何國に論なく一律に歡迎

し、以て門戶開放機會均等の實際に達せんとす、以上宣布せる各節は新國家の立國に關する主要の大綱なり。新國成立の日より始め新に組織せる政府に於て其の責任を負ひ、極めて誠懇なる表示を以て三千萬民衆の前に向ひ實行を宣誓す。天地昭鑒す此の言渝ること無し。

大同元年三月一日

滿洲國政府。

◎執政の宣言、人類は須らく道德を重んずべきに、種族の別あり即ち他を抑制して己れを稱揚す、其の道德たるや甚だ薄し。人類は須らく仁愛を重んずべきに、國際間の争あり即ち人を損じて己を利す其の仁愛たるや甚だ薄し。今我國を建設するに當り、道德を以て主と爲し、種族の別及び國際間の争を除去せば、應に王道樂土の發現を見るべし、凡そ我國民たる者努めて之を勉勵せよ。

(尤)執政溥儀氏、「皇帝にして平民の、溥儀氏、現に又推されて滿洲國の第一次元首となる矣」とは嘗て滿洲國自治指導部員が、執政を傳した一節であるが、吾人は三歳にして皇帝、七歳にして退位、二十七歳にして又更めて新國家の元首になられた溥儀氏の運命の數奇なるに感嘆すると共に、他の一節に「氏は深く歴年の戰亂を嫉み、國內の災禍頻りなるを談ずる毎に、自ら修むること能はざるを以て、民をして災に罹らしめたりとて自ら責めて嘘啼す、其の仁慈高風、斯の如きものあり」とある如く氏の元首としての大徳の所有者なることは滿洲國の爲に欣快に堪えない。茲に重複を壓はず溥儀氏の前半世を略述して、如何に新國家に相應しい元首なるかを祝福すると共に、同情と敬慕の情を表したいと思ふ。

溥儀氏即ち宣統帝の即位は、清國光緒三十四年(明治四十一年)十一月で、此の時帝は僅かに三歳、父醇親王が攝政と

して銳意國運の發展に努力せられたが、國家多事内憂外患交々到るといふ状態であつた。宣統三年の秋揚子江の沿岸武昌に起つた所謂辛亥の革命で、大勢に抗し難く遂に共和政府を認めて帝は退位し、清朝は終り告げたが、記憶すべきは此の革命に際し、革命黨が其のモットーとしスローガンとして高く掲げ、大に叫んだのは實に「滅滿興漢」の四字であつた。いふまでも無く滅滿とは滿洲民族を滅ぼせ、興漢とは漢民族を興して其の天下とせよ、支那は漢民族の支那である。夷狄たる滿洲民族の支配は受けぬ。といふのである。此の滅滿興漢の標語は四億の支那民衆に異常の衝動と興奮を與へ、革命の氣運四百餘州に漲り、遂に清朝を倒すことに成功した。事實革命の指導者等は清朝を滅ぼし支那の天下を漢民族の手に握れば、滿洲などは歴史の昔に歸つて放棄してもよいと考へてゐた。考へてゐるばかりで無く口にしてゐた。之を思ふと現在滿洲國の獨立に文句はいへないわけである。辛亥革命當時譯者は東京の陸軍の某學校に學生として在學してゐたが、日日の新聞紙を通じて亡び行く清朝の有様を、まのあたりに想像して無量の感に打たれたのである。又忘れんとして忘れることの出来ないのは宣統帝の幼い可憐な姿であつた。中にも某紙に載せた一つの風刺畫である。小さい宣統帝は侍臣に抱かれて玩具の喇叭を吹かれてゐて、喇叭からは「上諭」の二字が出てゐる。一方には嚴めしく武装した大きな兵士が、素晴らしく大きな大砲を發射してゐて、砲口から「革命」の二字が大きく現はれてさきの上諭の二字が消された形になつてゐる。つまり上諭即ち皇帝が人民に對して靜かにせよ、とのお諭しも革命といふ大聲に吹飛ばされて四億の民衆に徹底せぬことを表はしたのである。其のいたけな幼帝の境遇に對し他國人たる譯者も、一掬悲憤の涙を禁ずることが出来なかつた。昔唐の玄宗皇帝は安祿山の反亂の時、河北一帶の敗報頻々たるを聞かれて「河北二十四郡、中に一人の義士無きか」と嘆かれたが、やがて忠臣諸所に起り唐の社稷を完うすることを得たが、宣統帝の場合には此の頽瀾を既到に回す程

の英雄は遂に出なかつた。

宣統帝退位の時は僅かに七歳、北京は紫金城の奥深く侍臣を相手に淋しい生活をされてゐたが、民國六年(大正六年)張勳、康有爲等の遺臣が一度復辟運動即ち再び清朝の世にしようといふ運動を起したが、失敗に終つた。斯かる重苦しい境遇の中にも十七歳となられた帝は、清朝時代直隸省北東道臺といふ官職にあつた道源の女、鴻秋といふ姫君を迎へて妃とし依然として紫金城に住居し、暗い中にも學問に精進せられ、内外の學者について歴史、地理、語學、哲學等を學ばれた。民國十三年(大正十三年)馮玉祥に逐はれ、皇居を妃と共に退出した時は、北京の西方煤山にある父醇親王邸に逃れ次いで義侠なる日本公使館に入り、ここに在ること約三ヶ月であつたが、身に迫る危険を感じて民國十四年(大正十四年)二月天津に脱出、日本租界に入られた。其の時の帝は人目を避けろ爲軍服擬ひのカーキ色の詰襟に烏打帽といふ至つて粗末な服装で、三臺の自動車を連ねて大和ホテルの一室に移られたのは夜半を過ぎた午前三時であつた。間もなく日本租界軍司令部の附近に居所を定めて更に淋しい生活を續けることになつた。嘗ては四百餘州に君臨した帝を慰める者は唯一人の鴻秋妃のみである。滿洲の遺臣達は斯くも變り果てた帝の生活を見て、今昔の感に堪えず唯泣くばかりであつた。前にも述べたやうに革命政府が清室優待條件を實行しないから、清朝三百年の遺物や寶物を賣つて生活の資にあてられた。侘住居の一室には逃れて來た時の剝きかけた林檎が其の後長い間一隅に置かれたままになつてゐたといふ程、如何に慌しかつたかがしのばれて見る者をして、涙を流さしめたといはれてゐる。これから後が天津に於ける閑居生活である。南を受けた閑靜な書齋で讀書に一日を過す日が多く、英語は流暢に、思想方面の研究も深奥にまで進まれ、支那の田園詩人陶淵明の詩は特に愛誦せられるさうである。また新聞などで見る帝は瘠型で弱さうに見受けられるが、健康に注意され元氣

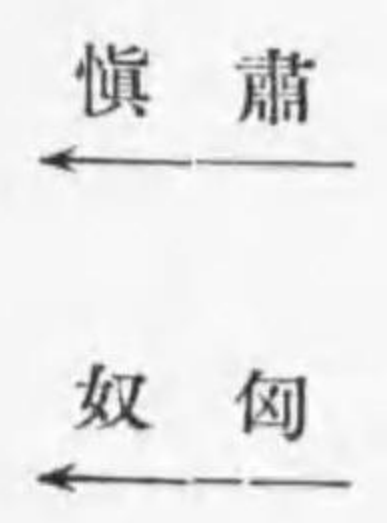
なスポーツマンであつて、テニス、ゴルフは堪能で野球にも趣味を持たれ、冬はスケートに興ぜられるのである。

茲に帝の二十年の忍苦生活は終局を告げ、一個人の溥儀氏となり、再び新國家の元首として國家經營の首途に立たれることになつた。國土は清朝發祥の地である若き滿洲國に、清の正系たる青年元首、恰も新緑の陽光を浴びるやうに清新の氣の躍動するを覺えるのである。

(三)故主、滿洲人の滿洲として建國したから故主といふのか、滿洲より起つた清室の正系を推戴したから故主といふのか、讀者の判斷に一任することとしよう。但し本國史中歷朝の君主たり帝王たりし者の死を記すには死、卒等の文字を用ひたに拘はらず、清の太祖及び太宗の死を記すに至り始めて崩の字を用ひた事より推して、編纂者の意思の那邊にあるかを想像し得ぬこともない。

満洲國史年表

日 本 皇 統 西 紀	年		重 要 事 蹟
	前	後	
一七〇頃	二七〇頃	二五	夏亡び殷興る
一六〇頃	二二〇頃	二二	殷亡び周興る
四六〇	"	二五	箕子朝鮮の始
四四五	"	二五	周亡ぶ
四四四	"	三二	秦の統一
四四六	"	二五	始皇帝萬里の長城連接工事を起す
四五九	"	二〇	漢の高祖の統一
四六七	"	一九	箕子朝鮮亡び衛氏朝鮮となる
五五三	"	一〇	漢の武帝衛氏朝鮮を平ぐ
六〇四	"	五七	新羅の建國
六〇四	"	五七	高句麗の建國
六四四	"	三七	



垂仁	崇峻	推古	同	同	同	孝德	天智	元明	醍醐	同	同	同	同	朱雀	同	村上
六四三	二四九	二七一	二七三	二七三	二七三	三〇五	三三三	三三三	三五七	一五八	一五七	一五七	一五七	一五六	一五六	一五七
後	元	五九	六二	六三	六三	六八	六五	六三	七三	九〇	九〇	九〇	九〇	九六	九六	九七
百濟の建國	隋の統一	隋の煬帝第一次遼東侵入	隋の煬帝第二次遼東侵入	隋亡び唐興る	唐の太宗遼東侵入	唐の高宗百濟を滅す	渤海の建國	唐亡ぶ	契丹の太祖雲州(山西大同縣)侵入	契丹の太祖帝を稱す	契丹の太祖渤海を滅す	契丹の太宗後晋を助けて後唐を滅す	契丹國を大遼と號す	遼の太宗後晋を滅す		

同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同

一九四一	一九三九	一九三五	一九三二	一九二〇	一八九四	一八八四	一八六六	一八三三	一七五五	一七五五	一六六四	一六三九	一六〇〇
------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------

二八二	二七九	二七五	二七二	二六〇	二三四	二三三	二〇六	二〇二	二二五	二二五	二〇四	九七九	九六〇
-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----

宋の太祖即位	宋の太宗の統一	宋の太宗遼を攻めて大敗す	宋・遼和議成り宋は遼に歳幣を贈る	金(女真)の太祖即位	金、宋連合して遼を滅す	金兵初次宋侵犯。宋の徽宗欽宗に位を禪る	金の太宗北宋を滅す、南宋の高宗即位	蒙古の鐵木真生る	鐵木真成吉思汗と號す	蒙古軍ロシア侵入	蒙古、宋と連合して金を滅す	元の世祖即位	蒙古國號を立て、元と稱す	マルコポーロ元に来る	元南宋を滅す	元軍日本に入寇す(弘安の役)
--------	---------	--------------	------------------	------------	-------------	---------------------	-------------------	----------	------------	----------	---------------	--------	--------------	------------	--------	----------------

後	正	後	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
後	正	後	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
後	正	後	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
後	正	後	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
後	正	後	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同

二〇一八	一三四三	一三七九	一三六六	一三六二	一三九七	一三〇四	一三三二	一三三二	一三四三	一三四九	一三五七	一三九六	一四二〇
------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------

一三八八	一五三三	一六二六	一六二六	一六二六	一六三七	一六四四	一六一	一六二	一六八三	一六八九	一六九七	一七六六	一七六〇
------	------	------	------	------	------	------	-----	-----	------	------	------	------	------

明興り元亡ぶ	清の太祖(滿洲の奴爾哈赤)兵を起す	清の太祖後金の皇帝と稱す	清の太祖薩爾濟の大勝	清の太祖崩じ太宗立つ	後金國號を清と改む	清の太宗朝鮮を降す	明亡ぶ、清の世祖北京に定鼎す	鄭成功臺灣に據る	清の聖祖康熙元年	臺灣清の有となる	清露ネルチンスク條約締結	外蒙古青海等清の有となる	清の高宗乾隆元年	清の高宗天山南北路を平定す
--------	-------------------	--------------	------------	------------	-----------	-----------	----------------	----------	----------	----------	--------------	--------------	----------	---------------

後櫻町	德川家治	二四九	一七九	清の高宗緬甸を平ぐ
光格	同	二四一	一八一	暹羅清に朝貢す
同	同	二四八	一七八	安南清に朝貢す
仁孝	德川家齊	二四九	一八九	阿片戦争起る
孝明	德川家慶	二五〇	一八五〇	長髮賊起る
同	同	二五二八	一八五	清露瓊瑋條約締結、露國黑龍江北を取る
同	同	二五二〇	一八六〇	清露北京條約締結、露國烏蘇里江東を取る
明治	德川家茂	二五四	一八四	日清戦争起る
		二五五	一八五	日清下關條約成る
		二五八	一八九	獨逸膠州灣を租借す
		二五〇	一九〇〇	露國旅順、大連を租借す
		二五一	一九〇一	北清事變(義和團)起る
		二五四	一九〇四	北清事變局を結ぶ
		二五五	一九〇五	日露戦争起る
		二五六	一九〇六	日露戦争講和條約成る
				清國立憲政體採用の上諭發布

明治	四一	二五六	一九〇八	清の德宗光緒帝崩殂、宣統帝即位
	四三	二五七〇	一九一〇	日本韓國併合
	四四	二五七一	一九一一	支那革命戦争起る
	四五	二五七二	一九一二	清祚終る
大正	二	二五七三	一九一三	支那共和國成立
	五	二五七六	一九一六	袁總統死し黎元洪之に代る、張作霖奉天督軍となる、後東三省巡閱使となる
	六	二五七七	一九一七	馮國璋大總統となる
	七	二五七八	一九一八	徐世昌大總統となる
	九	二五八〇	一九二〇	直皖戦起る
	一〇	二五八二	一九二二	孫文南方政府の大總統となる
	一一	二五八三	一九二三	第一次奉直戦起る
	一二	二五八四	一九三三	曹錕大總統となる
	一三	二五八五	一九三四	第二次奉直戦起る。段祺瑞臨時執政となる
	一四	二五八六	一九三五	郭松齡張作霖に叛す
	一五		一九三六	段執政退職す

昭和	二	三	四	五	六	七	八	九
二五八七	二五八八	二五九〇	二五九一	二五九二	二五九三	二五九三	二五九三	二五九四
一九二七	一九二八	一九三〇	一九三一	一九三二	一九三三	一九三三	一九三三	一九三四
張作霖大元帥と稱す、國民政府南京に成立す、蔣介石の第一回の北伐軍山東に侵入す	蔣介石第二回の北伐軍成功す	張作霖爆死、張學良父業を繼ぎ東三省保安總司令となる、後東三省を擧げて國民政府に服従す	蔣介石、張學良連合して馮玉祥、閻錫山を攻撃す、張學良國民政府陸海空軍副司令となる	支那官兵滿鐵柳條溝の鐵道爆破、日本軍起つて滿洲要地占據、學良の勢力完全に滿洲以外に驅逐さる	滿洲國獨立して建國し日本之を承認す	日本滿洲問題に就いて列國と意見相容れず國際聯盟退を聲明す	滿洲國帝政を布き、執政溥儀氏第一世皇帝の位に即く	

日本の滿洲國承認と日滿議定書

昭和七年九月十五日午前九時十分(新京時間)新京の滿洲國執政府に於て、我が滿洲國派遣特命全權大使武藤信義大將と、滿洲國國務總理鄭孝胥氏との間に調印された日滿議定書は、公式令に依り上諭を附し、十五日午後四時官報號外を以て公布された。

議定書

日本國は滿洲國が其の住民の意思に基いて成立し獨立の一國家を成すに至りたる事實を確認したるに依り

滿洲國は中華民國の有する國際條約が滿洲國に適用し得べき限り尊重すべき事を宣言せるに依り

日本國政府及び滿洲國政府は日滿兩國間の善隣の關係を永遠に鞏固にし互に領土權を尊重し東洋の平和を確保せんが爲左の如く協定せり

(一) 滿洲國は將來日滿兩國間に別段の條約を締結せざる限り滿洲國領域内に於て日本

國又は日本國臣民が從來日支間の條約協定其他の取決め及び公私の契約に依り有する一切の權利利益を確認尊重すべし

(二) 日本國及び滿洲國は締約國の一方の領土及び治安に對する一切の脅威は同時に締約國の他方の安寧及び存立に對する脅威たるの事實を確認し兩國共同して國家の防衛に當るべきを約す、之が爲所要の日本國軍を滿洲國內に駐屯するものとす

本議定書は署名の日より効力を生ずべし

本議定書は日本文及び漢文を以て各二通を作成す、日本文と漢文本文との間に解釋を異にする時は日本文本文に依るものとす

右證據として下名各本國政府より正當の委任を受け本議定書に署名調印せり

昭和七年九月十五日即ち大同元年九月十五日新京に於て之を作成す

大日本帝國特命全權大使

武藤信義印

滿洲國國務總理

鄭孝胥印

帝國政府は我が滿洲國正式承認が日滿議定書の調印完了により完全に實施せられたので十五日午後四時外務省より右議定書公表と同時に左の如く滿洲國正式承認に關する帝國の聲明書を中外に發表した。

帝國政府の聲明書

滿蒙は曾て帝國が國運を賭して其の危急を救ひたる地なり。爾來二十有七年吾が官民一致して同地方の開發に參與し苦心經營の結果今日の繁榮を致し、今や同地方は國防上國民的生存上帝國と不可分の關係に立つに至れり。而も近年過激思想に累せられたる支那の排外的革命外交の爲滿蒙に於ける吾が諸種の權益は日に月に蠶食せられたるが、遂に九月十八日事件の勃發を見、吾が自衛權の發動となれり。然るに右滿洲事變の發生に伴ひ、舊東北政權が覆滅を見るや其の機に乘じ、奉天、吉林、黑龍江、熱河の四省、東省特別區、蒙古各旗盟などの官紳士民相集り協議の結果、本年三月一日建國宣言を發して即日中華民國との關係を離脱し滿洲新國家を建設するを宣すると共に、新國家の建設綱領を昭布し、内に舊來の暗黒政治を排除して王道政治を實行し、又外に對しては信義を重んじ和衷を求め、其他既存の義務を尊重し門戶開放機會均等主義を遵守すべき事等内外に對する極めて公正妥當なる政綱を明かにせり。次で同

國政府は同月十日帝國其他十六國政府に通牒を發して右建設綱領の趣旨を反覆すると共に、同國との正式外交關係の設定を要請するところありたり。爾來帝國政府は半歲に亘り多大の關心と精密の態度とを以て滿洲國に於ける事態の發展に留意し來れる處、同國の前記内外に對する政策の實行に關する誠意と熱心とは正に信をおくに足るものあり、就中治外法權の徹廢及び一般外國人に對する内地解放問題其他條約の改訂については特に委員會を設け諸般の準備を整ふると共に、一方的措置を以て之を廢棄する等のことなく飽くまで關係國の合意により之れが改訂を實現せんとする態度の顯著なるものあり、財政其他諸般の施政に就ても改善の跡既に見るべきものあり、今や滿洲國は著々として獨立の實を擧げ其の前途に對し多大の希望を囑せしむ。

帝國政府は如上滿洲國の内外に對する態度に顧み又滿蒙の地が我が國防の安危、國民的生存の繫るところに鑑み、この際速かに滿洲國を承認し同地方の安定を促進し帝國の康寧と東洋の平和とを永遠に確保するの基礎を鞏固ならしむる事を期し、今十五日武藤特命全權大使を通じて滿洲國政府當局との間に議定書を締結し以て同國に對し正式に承認を與へたり。右承認の實行が帝國の加盟せる何れの條約にも牴觸すること

なきは本年八月二十五日帝國議會に於ける外務大臣の演説にこれを明かにせり。本議定書は滿洲國が其の住民の自由意思に基き成立せる獨立國家なることを確認すると共に、同國に於て帝國及び帝國臣民が從來條約其他の約定により有する一切の權益を承認し尊重すべきを定め、滿蒙に於ける我が各種權益に關する從來の紛糾を一掃する外、滿蒙に對する一切の行爲が同時に帝國の康寧に關するに顧み、日滿兩國共同して國家の防衛に當るべく之が爲所要の帝國軍を滿洲國內に駐屯せしむるものなるを議定し以て益々兩國間の善隣關係を永遠に鞏固にし東洋の平和を確保せんとするものなり、帝國に於ては滿蒙に對し何等の領土的意圖を有せざるは帝國の屢次宣明し來れるところなるが、今次議定書の前文中に於ても日滿兩國は相互に其の領土權を尊重すべきことを確認したり。將又滿洲國政府はその三月十日附對外交通牒に於て外國人の經濟活動に關し、門戶開放主義を尊重すべきことを明かにし居れるが、元來帝國の滿洲に對し要望するところは同地方に於ける吾が共同の權益を確保すると共に一切の排外施設を廢除し内外齊しくその生に安んずるにありたるを以て、帝國政府は滿蒙に於て各國人何れも均等の機會の下に經濟活動に従事し、同地方の開発と繁榮とに寄與せんこ

とを切望するは素より言を俟たず。惟ふに滿洲國上下の其内外に對する政策實行に關する至誠と眞摯なる態度は逐次全世界の認識を深め信頼を博するに至るべく、列國も亦早きに及んで同國との國交關係に入るべきを疑はず。茲に帝國政府は滿洲國を承認するに方り、同國の前途を祝福すると共に帝國官民は一致協力して克く善隣の義を全ふし、日滿共存共榮の實を擧ぐるに就いて遺憾なからむことを望む。

滿蒙三千萬民衆の福祉増進の爲又東洋永遠の平和の絆として生れた王道滿洲國が獨立を中外に宣布してより滿六ヶ月半、溥儀執政就任して以來實に半歳、昭和七年九月十五日（即ち大同元年九月十五日）日本政府の正式承認を受け名實共に一獨立國として世界地圖を染め直し世界の最新國として國際場裡に乗出す事となつた。國內には猶ほ匪賊の蠢動するあり、北滿松花江本夏の大水害も滿洲國今後の一大試鍊として殘されて居るが獨立國家として承認を受けた滿洲國は是等の難關を押し切つて洋々たる前途に向つて邁進を開始したわけである。此の空前絶後の記念すべき日は恰も仲秋の佳節と重なり眞に慶びの二重奏裡にある滿洲國は、津々浦々に至るまで新五色旗を翻へし、各官廳各學校一般國民は一齊に休業し三千萬民衆の衷心よりの壽ほぎ慶びの歌、滿洲國萬歳の聲は天地も破れよと響き渡つた。此の日畏くも勅命を奉じ若き滿洲國の獨立を確認すべき重責を擔つて派遣された帝國特派全權大使武藤信義大將は、午前八時十五分滿洲國外交總長 謝介石氏の出迎へを受け、小磯參謀長、岡村參謀副長、川越首席隨員以下五十餘名を帶同し自動車を連ねてヤマトホテルを出發、晴れの執

政府公式訪問に向ひ、午前八時二十五分長蛇の列を爲し執政政府表 玄關に止まるや國務總理鄭孝胥氏、侍從武官長 張海鵬氏等これを迎へ、中島諮議の先導で二階謁見室に招じ先づ滿洲國執政溥儀氏と帝國特命全權大使武藤大將の公式初對面が行はれた。劈頭武藤全權は極めて嚴肅な態度で「勅命に依り駐滿全權大使として着任した」旨の挨拶を述べれば執政溥儀氏は面上さつと紅潮を呈し、希望に燃ゆる血管の躍動せるを窺はれて眞に奥床しくも亦感激に滿ちた劇的場景を呈した。かくて日滿兩國が永久の親交を契る固き握手は交はされて溥儀執政は一旦休憩室に引揚げられた。

武藤全權は特設された調印室に入り茲に愈滿洲國の首途に對し日本の正式承認を約する日滿兩國の議定書調印が行はれることとなつた。即ち日本側は武藤全權を中心に小磯參謀長、岡村參謀副長、川越栗原兩隨員、滿洲國側は鄭國務總理を中心に謝外交總長、駒井總務長官、大橋外交次長、鄭祕書等威儀を正して並ぶ。やがて武藤全權は「日本政府は滿洲國政府の熱誠と三千萬民衆の要望を容れ兩國の親善と東洋平和の確保を期せんが爲本日をして滿洲國の儼然たる獨立を確認するものである」と宣すれば滿場寂として聲なく眞に莊重其のもの如き光景裡に武藤全權は紫絹の包より金色燦然たる菊花御紋章付の滿洲國承認に關する基本條項正文を取り出せば（内容は最初に日本文正文、次に漢文正文を極めて鮮明に印刷されたものである）、鄭國務總理も又緊張に心持ち手を震はせながら漢文日本文正文を取り出し、鄭國務總理先づ毛筆を採つて滿洲側の正文に達筆を振つて見事に署名を了せば武藤全權も又金ペンを採つて日本側正文に署名を了し、次いで武藤、鄭兩全權はそれぞれ正文を取交はし再び筆を採つて相手方正文に署名を了し茲に世界史に全く劃期的の日滿兩國基礎條項の議定書調印式は終はりを告げた。時に新京時間午前九時十分であつた。

次いで我が全權一行は別室に招せられ溥儀執政以下の大官とシャンペンの盃をあげて兩國の前途を祝福し表
玄關で記念撮影後九時三十分ヤマトホテルに引揚げた。此の日朝來滿洲國獨特の秋空晴れて紺碧の色に澄み渡
り微風だになき絶好の承認日和で、ホテル前より執政府に至る新道兩側は日滿兩國の堅き未來を約する全權の
威容に接せんと十重二十重に人垣を築き日滿兩國人の旗の波、歡呼の叫びに蔽はれ滿洲國空前の盛觀を呈し、
兩國軍隊並に警官の警戒振は嚴重を極めたといふことである。

日本の國際聯盟脱退の經過

九・一八事件勃發するや中華民國は當時恰も壽府で開會中であつた國際聯盟理事會に提訴した。それは昭和六
年九月二十一日即ち事件勃發の日より四日目であつた。紛糾を重ねた後、九月三十日聯盟理事會に於て最初に出
來上つた決議は

「日本政府は滿洲に於て日本臣民の生命財産の保護が確實となるに従つて其の軍隊を鐵道附屬地に引上げるこ
と」。

中華民國政府は日本の軍隊引揚後、日本臣民の生命財産の保護に就いては十分なる責任を負ふべきこと」。

「日華兩國政府は兩國の國交を速かに回復すべく萬般の手段を講ずること」。

といふのである。然るに聯盟人の机上に於ての論斷には日支の關係があまりに複雑で、滿洲在住の日本臣民の
生命財産の安全とか、軍隊の引揚げの如きは何時實行し得るものやら見込が立たない。そこで現狀を實際に調査
して認識を深める必要があるといふので例のリットン卿一行がわざ／＼東洋に派遣せられたのである。しかし白
人本位の聯盟人が更に自國本位の色眼鏡で見ると東洋の現狀殊に正義日本の公正なる意思の觀察などは出来るもの
ではない。

昭和七年三月一日滿洲は獨立の宣言を發した。九月十五日に至り日滿兩國の親善と東洋平和の確保を期し日滿
議定書を締結して日本は頑迷なる支那の狂奔と聯盟人嫉視の中に堂々滿洲國を承認した。

一方支那では滿洲國政府は日本の傀儡である。滿洲は依然として支那の領土であるから之を取返さなければな

らぬとして、張學良の失地回復の蠢動となり熱河の攪亂となつた。かうなると滿洲國に於ても領土内の擾亂を捨ててはおけぬとて茲に日滿議定書の條章に照らし日滿兩軍の熱河肅整となつたのである。

國際聯盟に於ては日本の滿洲國承認後も屢會議を開いてをつたが昭和七年十月一日にはリットン調査團の報告書が正式に聯盟事務局に提出されたが、果して其の調査は正鵠を得たものでは無かつた。我が外務省の公表を見て九千萬國民及び三千萬の滿洲國民をして其のあまりに報告書の認識不足を憤慨せしめたものである。

聯盟理事會は十一月二十日壽府に於て開かれ愈リリットン報告書の審議を進むることとなつた。我が松岡代表は侃諤の雄辯を振つて我が政府より提出された意見書に基いてリットン報告書記載の調査疎漏の點と、視察の誤謬とを指摘し日本の立場と決心を明示したが例によつて聯盟人は諒解しなかつた。諒解しても白人本位、自國本位の政策に囚はれて日本の意見を取上げやうとしなかつた。

十一月二十一日開かれた理事會は其の後一週間に亘つて討議し十一月二十八日に至つてリットン報告書及理事會の議事録を其のまま聯盟總會に移すこととなつた。總會は十二月六日から十二月九日までの間四回開かれたが波瀾曲折の後聯盟總會の中から十九ヶ國を選んで所謂十九人委員會なるものを組織し更に討議を進むることになつた。此の委員會は十二月十二日に開かれ十九人の委員の中から更に小數の委員より成る報告書起草委員會を組織し十二月十三日から十九日まで種々研究して二個の決議案を起草したが、之を未定稿のまま關係國間の交渉に任せ再び十九人委員會の討議となつた。此の間ドラモンド事務總長、杉村事務次長などの奔走があつたが聯盟は結局我が正義を認識することが出來ず、現實の事態を離れて徒らに机上の理論に走り、昭和八年二月二十四日の臨時總會で採擇された勸告書は實に我に對し非禮極まるもので九千萬國民の血を湧きだたせた。就中九・一八

事件勃發當時の皇軍の行動を自衛權の行使でないと斷ずるに至つては實に言語道斷である。要するに國際聯盟は東方亞細亞が將に黎明を望まんとするのを無法にも再び暗黒世界に引戻さうとするものである。我が政府に於ては東洋の平和と帝國の責任、國運の將來等について熟慮を重ね最早此以上國際聯盟と協力するの餘地なきことを看取し決然として聯盟を脱退するに至つたのである。

昭和八年三月二十七日 天皇陛下に於かせられては恐れ多くも大詔を渙發せられて帝國の執るべき方針を示し給ひ今後遭遇を豫期せらるる非常の時艱に際し國民の處すべき方法を御諭し遊ばされたのである。聖慮深遠寔に恐懼の至りである。帝國の臣民たる者感憤興起、舉國一致して聖旨に副ひ奉らんことを期せねばならぬ。聯盟離脱の大詔を下し賜はると同時に齋藤首相は次の如き告諭を發した

告諭

茲に帝國政府が國際聯盟離脱の通告を爲すに方り、畏くも大詔を渙發せられ帝國の嚮ふ所を明かにし、今後國民の進むべき道を示させ給へり。聖慮宏遠洵に恐懼感激に任ふるなし。

顧ふに國際聯盟の使命は世界の平和安寧を企圖するに在り。是を以て帝國は其の趣旨に賛同し、創設以來十有三年終始誠意を以て其の事業に協力し來れり。然るに日支案件の一たび聯盟に附託せられてより十七箇月に亘りし本件審議の經過に徴

し、又其の結末として本年二月二十四日臨時總會の採擇せる報告書に據るに、聯盟が帝國の正義公道に基き現實の事態に即して東洋の平和を確保するの外他意なき態度を正視せざることを判明し、且帝國と多數聯盟國との間に於ける國際聯盟規約等の解釋に就き重大なる意見の相違あること亦明白となり、茲に帝國と聯盟とは平和維持の方策殊に東洋平和確立の根本方針に關して全く其の所信を異にすること瞭然たるものあるに至れり。是に於て政府は東洋平和の確立に關する帝國の使命と滿洲國の獨立を尊重して其の健全なる發達を促進すべき帝國の責任とに稽へ、更に我が國運の將來に就いて慎重熟慮を重ねたる後遂に斷乎として聯盟を離脱するの已むなきを確信するに至れり。

然りと雖も國際平和の増進と世界文化の發達とに貢獻するは帝國の傳統にして且不動の國策なり。向後も尙依然として人類の安寧福祉を目的とする國際事業に參與協力するの方針を一貫して何等渝はる所なし。又敢て東洋に跼蹐して偏安を事とするものにあらず。益々友邦の誼を執くし正義公道を世界に宣布せむことを期するや固より言を俟たず。列國も亦必ずや帝國の採れる既定の根本方針が世界の平和を増

進すべき唯一の方途たることを自覺するに至るべきを確信して疑はざるなり。

但現下世界の各國は何れも不安の深刻なるものあり。帝國亦其の圈外に超然たる能はず。加之東亞の複雑なる政局に直面して滿洲國の建設事業完成に協力し、更に和協の基を開き極東の康寧を確立するの重責を荷ふ。其の任太だ重く正に是れ朝野奮起すべき秋なり。

古來我が國民は艱難に遭遇するや必ず之を克服し轉禍爲福の成果を收めざるなし。是れ國史の示す所にして國運の興隆窮りなき所以實に此に存す。今此の難局に逢着し我が官民深く詔書の聖旨を肝銘して舉國一心皆其の本務に勵精し大に綱紀を張り、嚴に荒怠を戒め固陋の偏見に囚はれず、矯激の思想に惑はず、質實剛健自力更生の意氣を以て帝國の使命遂行に邁進せば、明治天皇の偉業は昭和の聖代に於て更に一段の恢弘を加ふる所あるべく、由つて人類の幸福に寄與し聖旨に副ひ奉る所あるは本大臣の深く全國民に期待する所なり。

昭和八年三月二十七日

内閣總理大臣 子爵 齋藤 實

滿洲國帝政を布く

讀者は本國史の末尾滿洲國創建の譯述に當り「從此新國建立物歸故主」とある原文を、「此より新國建立せられ、山河民人故主に歸し」と譯し「故主」の註に於て「滿洲人の滿洲として建國したから故主といふのか、滿洲より起つた清室の正系を戴いたから故主といふのか、讀者の判斷に一任することとしよう。但本國史中歷朝の君主たり帝王たりし者の死を記すには死、卒等の文字を用ひたに拘はらず、清の太祖及太宗の死を記すに至り始めて崩の字を用ひた事より推して、編纂者の意思の那邊にあるかを想像し得ぬこともない」と述べて暗に滿洲人士が溥儀氏を戴いて帝政を切望してゐることを匂はせておいたが、果せるかな此の願望は大同元年(昭和七年)三月獨立當時より三千萬民衆の間に瀰漫してゐたものであつた。爾來肇國及討匪の事業に是れ日も足らぬ状態であつたが、建國事業は着々として歩を進め討匪の事業一段落を告ぐると共に、客臘より今年初頭に亘り磅礴たる帝政要望は遂に表面に現はれた。滿洲國要路の大官は此の民意の熾烈なるを看取し、幾たびか重大會議を開き、慎重熟議を重ねて

民論に順應した。三千萬民衆は期せずして白雪の上にひれ伏して、此の重大國策の實現を祈願し國家愛の赤誠を披瀝した。即ち全國民は新春を期し王道滿洲國の將來に至高なる天命下り溥儀執政は茲に改めて天業滿洲國を統治することとなり、滿洲國全土は新たなる榮光に輝き光輝ある建國の歴史に莊嚴なる一大改革を來すの日近きにあるを信ずるに至つた。斯くして「王道國の前途に榮光輝くの日近し、速かに天命に従ふべし」の要望全國に漲り、何人も堰止め得ぬ一大民衆運動となつたが、全國各縣長並に市長がそれ／＼其の管内人民を代表して提出した請願書は一月十日までに各省長の手元に達し、北滿特別區も又各行政分處長から特別區長に提出、興安總署では各旗長から分省長を通じてこれを興安總署に提出濟みとなつた。右の請願書は一月十五日鄭國務總理に提出され、參議府に附議の上執政に奉呈された。請願の内容は左の通りである。

執政閣下は國民の請願を嘉せられ肇國の大任に當らせられ、天意を體して王道の善政を布かれてここに二年、天業大に進み庶民康福の安居樂業の實舉り、天德聖明に期す、伏して冀くは皇帝の任に即き益國礎を強固にして順天安民、滿洲國建國の

大業を進められんことを。

言々皆國民の至情の迸りである。思ふに王道樂土建設の大旗を掲げて建國した滿洲が元首を執政と呼んで共和政體とした。「黨無く偏無く王道蕩々、偏無く黨無く王道平々」。「徳を以て仁を行ふものは王たり、力を以て仁を假るものは覇たり」とあるが如く人道主義の政治を行ふのが王道であるといへば王道の説明は盡きる。共和政體でも王道を行ふこととは可能であるが、我等は此の理窟以外政治に關し國民の至大至上の宗教的信仰の本尊ともいふべき王者の無い王道は何だか物足らない感じがあつた。然るに今回三千萬民衆の渴仰の的である溥儀氏を天命に従つて皇帝の位に即かしたといふのである。いふまでも無く滿洲は溥儀氏の祖先愛親覺羅氏發祥の地である。滿洲人が此の人を皇帝として戴き政治的安定を圖らんとするのは最も機宜に適したもので建國の過程からいへば正に龍を畫いて晴を點するものである。滿洲國政府は建國の宣言を尊重し、建國の大義に本づき三月一日を期し帝政を實施することに決し、順天安民の主旨を體し、執政溥儀氏は滿洲國皇帝の位に即旨一月二十日堂々中外に發表した。すなはち帝政實施に伴うて諸制度を改正し國號を滿洲帝國と呼び皇帝の稱を設く

る、其の要旨は左の通りである。

- (一) 滿洲帝國は皇帝これを統治す。(一) 皇帝の尊嚴は侵さることなし。(一) 皇帝は國の元首にして統治權を總攬す。(一) 皇帝は法律を裁可し、その公布及施行を命じ法律により法院をして司法權を行はしむ。(一) 皇帝は陸海空軍を統率す。

此の外關係法規の改廢は最小限度に止め三月一日の即位の盛典と同時に大同の年號を廢し、新年號を制定し國民の心機を一轉し新興帝國として堂々其の第一歩を踏み出すこととなつた。なほ建國の大義を象徴する五色旗は五族協和の實を擧ぐる建國歴史を永遠に誇るものとして變更せず、また建設途上の國都新京も其の名稱を改めないこととした。ここに於て滿洲國の國礎愈固く國際關係にも好影響を與へること少く無いであらう。從來動もすれば第二の復辟を懸念してゐた支那も溥儀氏が滿洲國皇帝の位に即き、其の領土の範圍も確定したので一月二十日鄭國務總理より、清朝の復辟にあらざる旨の力強い聲明を待つまでも無く復辟に關する支那側の杞憂懸念も解消したわけである。

抑王道主義は支那人が始めて唱へた處である。然るに支那四千年の歴史中唐虞三代

は暫く史家の説に従つて王道主義が行はれたといふことに強ひて反対はせぬが、春秋以後現今に至るまで易姓革命幾十回、此の間幾百の帝王君主が出現し明君賢主といはれるものもあるにはあつたが、此等の中果して幾人が完全に王者の資格を有するであらうか 多くは純然たる覇者で稀に王者的覇者があるに過ぎないでは無いか、之を滿洲國の新皇帝溥儀氏と比較すれば實に宵壤の差がある。溥儀氏は皇帝の位に即くに一矢も放たない、一兵も費さない唯徳を以て民意を酌み天命に従つて天子となるのである。嗚呼孔孟王道を説いて僅かに文献乏しき唐虞三代を理想化したのみで王道は遂に支那に行はれなかつたが、今新興の滿洲國には王者の民將に蕩々たらんとしてゐる。全滿を擧げて歡天喜地するも又以所あるかなである。

回顧すれば二十餘年の昔、辛亥革命の妖雲北京城を覆ひ、將に亡びんとして幼帝を擁し唯哀號する清朝の末路に對して人知れず悲憤の涙を絞つた譯者は、當時の幼帝たりし溥儀氏が茲に千古不磨の大典を擧ぐるに會ひ胸奥より湧出る歡喜の情を制するに苦しむ。現下世界不安の波浪中に在つて毅然として小搖ぎも無き日出る國日の本に生を享けたる我等は何等多幸ぞ、曩には日繼の皇子生まれまして國民感激の坩堝に入り、

今又兄弟國滿洲に此の盛儀を見ることが出来た。如何なる言辭を以て此の歡びを現はさうか不文なる譯者の能ふ處で無い 漸く古人の律詩一篇を藉り之を高吟して筆を擱いたのである。

龍池躍龍龍已飛、
龍德先天天不違、
池開天漢分黃道、
龍向天門入紫微、
邸第樓臺多氣色、
君王鳧雁有光輝、
爲報寰中百川水、
來朝此地莫東歸。
龍池龍躍つて龍已に飛ぶ、
龍徳天に先つて天違はず、
池は天漢を開いて黃道を分かち、

龍は天門に向つて紫微に入る、
邸第樓臺氣色多く、
君王の鳧雁光輝有り、
爲に報ず寰中百川の水、
此地に來朝して東歸する莫れ。

附記 (滿洲國帝政を布くの一章は昭和九年一月二十日滿洲國政府の國礎國策に關する重大聲明の號外を手にして起稿したものである)。

昭和九年二月十五日印刷納本
昭和九年二月二十日發行
昭和十年十一月十日改訂版發行

滿洲國史教本

不許複製製

譯者

筒井清芳

發行者

安部美代

印刷者

倉原剛

印刷所

共同印刷株式會社

東京市小石川區久堅町百八番地

東京市小石川區原町百二十番地

發行所

好文社

振替東京四九八一

356
628

終

